へたれ長じて○○となる

蔵畑 啓吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
へたれ長じて〇〇となる

【Ｎコード】
Ｎ９０４４Ｒ

【作者名】
蔵畑　啓吾

【あらすじ】
ある日、気づいたら彼は知らない場所にいた――そこで出会ったのは精霊を自称する謎の生物と、二人きりで生きてきた姉妹。彼らと過ごす日常は、彼の目に映る世界を変えていく。そしてある日、唐突に突きつけられる選択。日々を無気力に過ごすだけだった彼が選んだのは――現代のへたれな主人公がファンタジー世界で少しずつ成長していく物語です。気が向いたらどうぞ。感想いただけたら幸いです。※投稿日当日にはけっこういじるので、翌日に見ることをオススメします。

1．日常の終わり、非日常の始まり（1）

寝て、起きて、目を開けて、いつもと同じ一日がまた始まる――ずっと、そんなふうに思っていた。

心が躍るような出来事も、命を賭けて取り組むような目標もなく、どこかの誰かがたどってきたレールをなぞるだけ。

だからといってレールから外れる冒険心も、踏み越える勇気もないまま、自分自身を変える努力も、それをするための気力もわかずに、ただ惰性（だせい）で生きて、年をとっていく。

安全で、平和で、それでいて退屈なそんな毎日が、これからも続いていく――ずっと、そう思っていた。

いつもと同じ一日を過ごしていたはずだった。

いつもと同じように目覚めて、朝食を食べ、休日だが予定もないので、ベッドに横になったまま時間を過ごし。

そして――気がつけば、コウイチの世界は一変していた。

「……なんで？」

昼を少し過ぎていたぐらいのはずが、いつの間にか空は暗く染まっていた。しかもいるのはそこらの建物から漏れ出る明かりも、人の声もない森の中。

真っ暗闇に響くのは、虫の鳴き声、動物の遠吠え。

背筋がぞくりと震えた。

「……！」

恐怖にかられ、目的もなく走り出す。

暗い中、もたつく足を必死に動かし、

「ハァ、ハァ、ハァ……ッ！」

すぐに腕に走った鋭い痛みに、足を止める。

コウイチは思わず眉根を歪めた。腕を舐（な）めると血の味がした。痛

みと、それ以外の、はっきりとわかる感覚。
少し遅れて、折れた枝の先端で切ったからだと気づく。だが、それ以上に、
（夢……じゃない、のか……？）
突きつけられた現実が、痛みなどどうでもよくさせた。
「……はは」
渇いた笑い。人間、どうしようもなくなった時は自然に笑いがこみあげてくる、なんて聞いたことがあったけど、まさかそれを身をもって体験する日がくるなんて。
――結局、衝動のままでた行動で得たのは、腕の傷とこれが夢ではないという実感だけ。
なんでこうなったのか、自分でもさっぱりわからない。昼から夜になるまで何があったのか、まるで思い出せなかった。
いきなり気絶させられて、ここまで運び込まれた？
そんなバカな。そんなことをして何の意味がある。
（落ち着け……）
自身に言い聞かせ、深呼吸を繰り返す。ぐるぐると疑問が渦巻いていた頭が、いくらかはクリアになり――
「落ち着いたっスか？」
「……！」
いきなり聞こえた“声”に、コウイチは硬直した。

パタ――

羽ばたく音と同時に、目の前にそれは飛び出してきた。
「なっ……」
「無茶っスよ。こんな暗いのに、いきなり走り出すなんて」
丸いそれは、くだけた口調で話しかけてきた。
コウイチはそれを呆然と見つめる。
まず目についたのは、コウモリのように薄い皮膜状（ひまくじょう）の翼。出来の

悪いマスコットキャラのような胴体は、顔との境目がなくただ丸い。後ろでは、その体をひと巻きできそうな長い尻尾がゆらゆらと揺れていた。

胴体の中程にある大きな赤い口からは二本の牙が覗いており、その上にある二つの目は、興味深いものを見るような眼差しをコウイチに注いでいる。

「っていうか、なんでこんな夜中に森の中にいるんスか？　危ないっスよ？」

明らかに人間ではない姿で話す言葉は、まぎれもない人の言語。

「う……わ……」

「……あれ？　兄（にい）さん、もしかしてオイラが――」

その生き物が不思議そうな顔をする。

理解不能の恐怖に、コウイチは思わず後ずさった。

「あ――」

直後、木の根に足を引っかけて転倒、後頭部を強打した。

「……っ、……！」

頭を抱えて転がるコウイチを、謎の生き物に呆れたように見下ろした。

「言ったそばから……大丈夫っスか？」

「……痛い」

わりと、本気で。なんとか立ち上がって触ってみると、鈍い痛みが走った。血は出ていないが、これは盛大に腫れるかもしれない。

「と、いうか……」

おっかなびっくり、謎生物を見る。パタパタと羽ばたきながら宙に浮いているが、どう見てもその動きだけで飛べるとは思えない。

そもそも、なぜ人の言葉を喋るのか。

「自分っスか？　自分はカセドラっス」

「……」

名前を聞いたわけではないのだが。

とにかく、この謎生物はカセドラというらしい。いきなり襲いかかってくる気もなさそうだ。

それなら――

「ここは……？」

「森っスね」

「……」

見ればわかるようなことを答えられた。

「そうじゃなくて」

「詳しい場所を聞いてるんなら答えられないっスよ？　自分もついさっき生まれたばかりなんで」

生まれた？　ついさっき？

意味がわからず混乱していると、カセドラは補足するように付け足した。

「生まれたっていうか……はっきりと意識できるようになったほうが正確っスかね。自我の芽生え？　っていうかなんていうか……」

相変わらずよくわからないが、わかってないのはカセドラのほうも同じらしい。

諦めてコウイチは別の質問をする。

「君はいったい……なんなんだ？」

「自分は精霊っス」

セイレイ？　……精霊？

マンガやゲームの中では馴染みのある単語が、コウイチの脳裏に浮かぶ。

「む。なんスかその顔は」

「いや……だって」

新種の生物だとは思うのだが。だがいきなり精霊なんて言われても。

「ふーん」

明らかに不満そうな顔をして、カセドラは一度大きく羽ばたいた。

「別にいいっスよ、信じなくても。じゃあ今夜一晩、がんばって一

人で過ごすっス」
そのままくるりと背を向け――コウイチは慌ててその体をつかんだ。
「……なんっスか？」
「いや……別に」
気まずくなって目をそらす。
「用がないなら離してほしいんスけどね～」
「それは……」
困る。こんな暗い森の中で、一人取り残されるのは。さっきまで死ぬほど怖かったというのに。
ただそれを言えば負けな気がして。
「認めるっスか？　オイラが精霊だってこと」
ぶんぶんと、コウイチは二度大きく頷いた。

「そういえば、兄さんの名前はなんていうんスか？」
機嫌をなおしたカセドラが、思い出したように聞いてくる。
「……コウイチ」
木の幹に背にして座りながら、コウイチは答えた。
カセドラの提案で、動かずに一夜を明かすことにしたのだ。
『夜に動いても危ないだけっスからね。明るくなるまでじっとしてるのが一番っス』
その言葉に、コウイチは素直に頷いた。気温も肌寒くはあるが、耐えられないほどではない。
「コウ、イチ？　変わった響（ひびき）の名前っスね」
「普通……だと思うけど」
少なくとも、今までそんなふうに言われた記憶はない。
コウイチからすれば、カセドラという名前のほうが変わっている。
（いや……けど人間じゃないし……それはそれで、あり……なのかな？）
「それで兄さんは、なんで夜中にこんなところに？　猟師や木こり

でもないみたいっスけど」
ジーパンにTシャツという普段着姿のコウイチを見て、カセドラは首を――首がないかわりに丸い胴体を傾けた。
「それは……僕にも」
というか、ここがどこなのかすらわからないのだ。
疑わしそうに見ていたカセドラも、すぐにコウイチが嘘をついていないとわかったらしい。
「あー……それは大変っスね」
哀れみの混じった言葉に、心の底から頷きたくなる。
「だからそんな無気力な感じなんすか」
「いや……そういうわけでは」
別にこういう状況だから、というわけでもないのだが。普段よく言われている欠点をこうさっくりと指摘されると、微妙にへこむ。
「……」
黙り込むと、今度はなんだか落ち着かなくなった。
なんで、どうして、誰が、なんの目的で。
再び渦巻きかけた疑問を、コウイチは慌てて振り払った。考えて答えが出るとは思えない。カセドラも情報源としては頼りないし。
「……いま心の中でバカにしなかったっスか？」
「まさか、そんな」
慌てて首を横に振る。
「まあいいっスけど。それより今は寝たほうがいいっスよ。明るくなったら森を出るために歩かなきゃいけないんスから」
「……ああ」
とは頷いたものの。
目をつむっても心は落ち着かず、結局その日、コウイチは空が白み始めたころに少し眠れただけだった。

翌日――カセドラの案内で、コウイチは森の中を歩いていた。
平らなアスファルトとは違う、自然そのもの道のり。いや、道で

すらない。足下には小石や木の根が、顔や胴体を無造作（むぞうさ）に伸びた木の枝が遮る。

（……これは、疲れる）

目の前でパタパタと浮いているカセドラが、ときおり止まってはコウイチが来るのを待っていた。

（と、いうか……）

明るいところで見ると、ますますカセドラの異形が目につく。

暗闇の中ではわからなかったが、その丸い姿はそのほとんどが深い紫色に染まっていた。

「？　なんスか？」

「……いや」

不思議そうに体を一回転させるその姿は、見ようによっては愛らしい……と言えるかもしれないのだが、その見た目は――率直に言って、“形の丸いナス”っぽい。

「……今なんか急にムカっときたっスよ」

ジト目で見られたので、慌てて話をそらす。

「それより……あと、どれぐらいで森を出るんだ？」

「そんなにかからないはずっスよ」

そうあってほしい、と思う。でなければ、足が棒になるどころの話ではなくなる。

――結局、コウイチが森を抜けたのはそれからしばらくたってのことだった。

「……死ぬ」

「歩いただけっスよ？」

カセドラが呆れたように、ぐったりと地面に横たわったコウイチを見下ろした。

だって、ほとんど寝れてないし……。

とは思ったものの、口に出して反論する気力もわかない。こんなに歩いたのは、小さい頃に学校の行事でやった競歩大会以来じゃな

いだろうか。
「とにかく、これで森の外には出たっス。ここまで来れば、もう見覚えがあるんじゃないっスか？」
まだふらつく体を起こし、視線をめぐらせる。
「……」
「どうっスか？」
問いかけてくるカセドラをよそに、コウイチは呆然と呟いた。
「……ここ、は……」
視界に広がるのは一面の緑だった。しばらく平地が続いたかと思うと、すぐ先にはまた森が広がっていた。
どれだけ遠くを見渡しても、道路も、高層建築物もない。それどころか人の手が入っているものが一つも見当たらない。
「どこ……？」
「兄さん？」
山とかならともかく、これだけの開けた平地が自然のまま残っているところが、自分の生まれた国にあっただろうか？
「大丈夫っスか？」
「……」
言葉もなく立ち尽くすコウイチを、カセドラが心配そうに見る。
森の外に出れば少しはマシになるだろうと思っていたが、これは予想外だった。せめて民家の一つくらいあれば、そこで話を聞けるだろうに。
……民家？
視界の端、目を凝らして注意深く見なければ気づかなかったが、そこに小屋のような小さな建物が建っていた。
「カセドラ、あれは」
「んん？　……ああ、あれは家っスね」
「家？」
あれが？　それにしては小さすぎやしないだろうか？
気づくと、カセドラが冷めた目でこっちを見ていた。

「どこのボンボンだったんスか兄さんは。都市部の上流階級とかならともかく、こんな田舎の庶民の家ならあんなもんっスよ」

別に家は金持ちでもなんでもないのだが。

……ともかく、あれが民家だと言うのなら人が住んでいるはずだ。

思い直し、コウイチは這うような足取りで歩みを再開した。

遠くから見て小さかったその小屋は、近くから見ても小さかった。

中は八畳ほどしかないのではないだろうか？

それでも、人が住んでいるのは間違いないらしい。脇には新しい薪が積んであり、かすかにだが料理の痕跡――食べ物の匂いがした。

――ぐう。

「……」

そういえば、昨夜から何も口に入れていない。そんなことも考える余裕すらなかったわけだが、一度意識してしまえば空腹感はますます増すわけで。

「兄さん？　お腹が減ってるんなら、中で食べ物を分けてもったらどうっスか？」

「いや、しかし……」

性格的に人に頼みごとをしにくい性質のコウイチは、ためらうように言葉を濁した。

――いきなり赤の他人に、それは図々しすぎやしないだろうか？

耐えられないほど追いつめられてはいないわけだし。

「君は、減っていないのか？」

「俺っちは精霊っスからね」

……そういうものなの？

釈然としないが、とにかくここまで来てカセドラと話していても仕方ない。

回り込んで入り口を探そうとしたコウイチは、ふと人の声を耳にして立ち止まった。

「……？」

住人だろうか？
なんとなく足音を潜めて、声のするほうへと近づく。
小屋を挟んでちょうど反対側で、コウイチは足を止めた。
「……」
十歳をいくらか過ぎた程度、といった外見の少女が、そこにはいた。
年齢のわりには利発そうな顔立ちで、茶色の髪を頭の両側で結んでいる。やたらと古めかしそうな、麻だか綿だかの単純な作りの地味な服を着ており、その外見は周囲の風景とぴったり合っていた。
しゃがみこんだ少女の前には、木製の大きな桶。水が張ってあるらしく、少女が桶の中で手を動かすたびにチャプチャプと音がする。
何をやっているのかも気になったが、それより衝撃的だったのは少女の顔つきだった。明らかに、コウイチの生まれた国のものではない。
「やはり……」
ここに来るまでに間、森の中を歩いている時から漠然と予想はしていたことだが。
見慣れない土地に、人語を話す謎生物。そしてようやく見つけた人間の外見。
これは――
「海外……テビュー？」
まさか、こんな形で。
ついぞ国内から出たことのないコウイチにとっては、雷に打たれたような衝撃だった。
できるなら、もうちょっとまともなシチュエーションで来たかった……。
旅行会社に申し込んで、ガイドさんに連れられて、家族や友達と……ああ、でも自分なら手続きやらなんやらの段階で、面倒くさくなって投げ出すだろうか。
（いや……いやいやいや）

軽く現実逃避しかけた思考を振り払う。
というか、外国ならまず言葉が通じない。ここが何語の国かはわからないが、そもそもどんな外国語もまともに話せない自信がコウイチにはあった。
ああけどパスポートも持っていないから、まずは不法入国者として扱われるのだろうか。
「……兄さん？」
立ちすくむコウイチを、カセドラが怪訝そうに見つめてくる。
「……いや」
言葉が通じない程度で諦める必要はない。相手も自分が外国人だとわかれば、それなりの相手なり場所なりに連絡をとってもらえる……かもしれない。
もしそれで警察に連行されたとしても、あとはひたすら日本人であることを主張して大使館にでも連絡してもらえれば――
ほのかな期待を抱きつつ、コウイチは一歩踏み出しかけ、
「エシトーの奴……！　今度はどうしてくれようかしら……」
「……」
……あれ？　なんか聞き慣れた言葉が聞こえてきたような。
……日本語？
「靴の中にミミズを仕込むのはこの前やったし……ドールさんが大事にしている麦酒の空瓶でも部屋に放り込もうかな。いかにもあいつが飲んだふうに見せて」
うん。間違いなく日本語ですね。
本来なら喜んでいいところなのだが、コウイチはひきつった顔をして後ずさった。
……なんだろう？
いや、言葉が通じるってわかったのはうれしいけど、なんか聞いたらいけないことを聞いたような。
「……なんかあの子、怖いっスよ」
カセドラも怯んだように尻尾を丸めている。

「兄さん、話しかけないんすか？」
「カセドラ、君が」
「俺っちは精霊っスから」
「……」
それがいったい何の関係があるのかと、小一時間ほど問いつめ――……いやいやいや。
……ともかく、彼女に用があるのはカセドラではなく自分だ。ここまで来てさらに頼るのはどうだろう。
一度頼りかけた事実を都合よく棚の上に押し上げ、コウイチは意を決した。微妙に腰は引けていたのだが。
「あの――」
「きゃっ！」
声をかけると、少女は悲鳴のような声を上げてその場で飛び上がった。
（……いや、そんなに驚かなくても）
「だ、誰っ？」
若干傷つきながら歩み寄るコウイチを見ようとしたのか、少女は慌てて振り向きかけ――そのままバランスを崩した。
「あ――」
傾いた少女の先にあるのは、水の張った桶。
「っ……！」
ずぶ濡れになる自分の未来を思い浮かべたのか、少女は強ばった顔で目をつむった。
その腕を、とっさに飛び出したコウイチが掴む。
「え……」
視線が合う。
まだ成長途中のその大きな瞳が、きょとんとするさまを目にしながら、コウイチは少女を引き寄せようとして――
「あ――」
その瞬間、ついさっきまで酷使されていた足がストライキをおこ

した。
　意思に反してぐにゃりと膝が曲がり、少女の腕を掴んだままコウイチもバランスを崩す。
（まず……）
　このまま桶の上に倒れては、助けにでた意味がない。それどころか二人ともずぶ濡れだ。
　コウイチは急いで腕を引き寄せ、上体をひねった。衝撃にそなえ、目をつむる。
　――トサッ。
　柔らかい、土の上に倒れる音。
　どうやら、ずぶ濡れは避けられたらしい。
「え――」
「……？」
　あれ、なんか柔らかすぎないか？
「兄さん……何やってんスか」
　呆れたようなカセドラの声に、コウイチは目を開く。
　目の前にあったのは、少女の二つに結った頭の天辺で。慌てて回した腕は、その小柄な体をしっかりと抱き込んでいた。ちょうど、体の半分が少女に覆い被さるような体勢である。
……あれ？　なんでこんなことに？
　というか、この状況って外から見たらどうなんでしょうね？
「あー……あれっスね。か弱い女の子を襲う、暴漢って感じっス」
ですよねー。あ、でもわざとじゃないってわかってもらえば――
「ヒ――」
　腕の中の少女の体が、びくりと震える。
「あ、ちょ……」
　嫌な予感に、コウイチは慌てて弁解しようとしたのだが。
　直後、
「キャァアアアアアアッ！」
　鼓膜を突き破るような、甲高い音がコウイチの耳元で炸裂した。

1．日常の終わり、非日常の始まり（2）

どうしてこうなった？

むき出しの土の上、正座をしながらコウイチは自分の状況を振り返った。

……おかしい。

自分には何の非もないはず。そりゃまあちょっとばかり不幸な偶然が重なって、誤解されるようなことはしてしまったかもしれないが。

しかし、目の前にいるこの少女の態度はどうだろう？

仁王立ちになり、腕を組んで自分を見下ろす様はどう見ても怒っているもののそれだ。

さらには、その眼差しが耐えがたい。わずかに赤らめた頬とは対照的に、少女の目は凍りつくように冷たい。

……なんだろう？　あの、変態を見るような目は。

「何よ？　なんか言いたいことでもあるわけ？」

「……いえ」

少女の眼光に気圧されつつ、コウイチは目をそらした。

どう見ても年下の少女相手に情けないとは思いつつ、さりとてやましい部分がまったくないとも言い切れないので、怒りだす気にもなれない。

何より、さっき起こった偶然の悲劇を、少女を納得させられるように説明できるだろうか？

（……無理）

途中でしどろもどろになるのが目に見えていた。

自問自答している間にも、少女の目つきは険しくなっていく。

「兄さん兄さん。このままじゃ間違いなく牢獄行きっすよ」

ぱたぱたと羽ばたきながらのカセドラのささやきに、コウイチは背筋を凍らせた。

……困る。それは困る。
不法入国でならともかく、婦女暴行。いや、相手は年端もいかない女の子。そんな罪状で捕まった日には、二度と前を向いて歩けない。そして一生後ろ指を指される生活を送ることになるのだ。
（……それだけは）
ここはなんとしてでも身の潔白を証明しなければ。
「聞いて――」
精一杯の勇気を振り絞って紡ぎだした言葉は、
「はァ！？」
ドスの利いた少女の言葉にあえなく粉砕された。
ひき、と顔をひきつらせたコウイチを見て、少女がふんと、鼻をならした。
そして、何かに気づいたように顔をひそめる。
「あんた……見たことない顔ね。ヨソ者？」
「っ！　……実は――」
一筋の光明を見いだして、コウイチは口を開いた。
気がついたら、見知らぬ森の中にいたこと。そこに来るまでの記憶がまるでないこと。さらには、森を出てようやく会えた人間が彼女であること。押し倒したように見えたのもたんなる誤解だということ。
途中でつっかえつつも、一通りの事情を説明し終えたコウイチに、少女はうさんくさいものを見る目を向けていた。
「ふーん……」
「信じられないかもしれないが……」
「うん。信じられない。で、どこからが作り話？」
……いや、そんな。ばっさり言われると。
「冗談よ。嘘っぽい話だけど。その汚れ具合を見る限り一から十まで嘘ってわけじゃなさだし」
落胆のあまり肩を落としかけたコウイチに、必死さが伝わったのだろうか、少女はいくらか柔らいだ声をかけてきた。

「では――」
「ちょっと待って」
勢い込んだコウイチをさえぎって、少女は何かを思案するように顎に指を添え、唇を突き出す。そういった仕草を見る限り、ませたお子様といった印象なのだが。
「あんたの事情はわかったわ。アレが事故だったってことも納得したげる。――で、あんたこれからどうする気？」
「どうする、と言われても……」
一文無しで、着の身着のまま。そもそもここがどこなのかもわからない。それなら、考えていた通り、
「日本大使館あたりに連絡をとってもらえれば、と……」
「ニホンタイシカン？　何それ？」
『それって美味しいの？』と、言わんばかりの顔つきと口調だった。
「……」
ナンデスト？
「いや。だから、日本という国の、領事とか外交官がいる――」
うろ覚えの怪しい知識を総動員して話してみても、少女の反応は微妙なものだった。
「ニホン？　聞いたことないわね。それがあんたの故郷なの？」
「……」
え……えぇー……？
その後、思いつく限りの日本の情報を話してみても、まったく手応えはなく。
「何を探しているのか知らないけど、それはこんな田舎にあるものなの？」
それがとどめだった。
周囲は見渡す限りの自然、自然、自然……。
とてもではないが、あるとは思えない。
コウイチが呆然としていると、首を傾げていた少女は見せつけるようにため息をついた。

「やっぱり、当てもないみたいね……。仕方ないか、独り言きかれちゃったし」

言葉の後半は、声が小さくなりなんと言ったか聞き取れず。かと思えば、少女はいきなり腰に手を当てて胸をそらせてみせる。

「あたしの名前はアリヤ」

「……はぁ、どうも」

「気のない返事ね。まあいいわ。あんた、あたしを手伝いなさい。それで当分の間の食べ物と寝床は保証してやるわ」

「……」

――は？

「今、なんて……」

「あんたには主に力のいる仕事をしてもらうわ。頼りなさそうだけど、あたしよりは力あるでしょ？」

そう言うと、少女は口端を持ち上げてみせた。

（……なんと）

コウイチは素直に感動した。

一度は自分を襲う暴行魔と間違えた男に、困っているとわかったらすぐに救いの手を差し伸べる。

果たして自分だったらそんなことができるだろうか？

（無理……）

そう確信できるだけに、コウイチは年下の少女を尊敬の眼差しを向けた。

（なんて……いい子なんだ）

――などと感動している間にも、アリヤはごそごそと何やら持ち出してきた。

「はい、コレ」

渡されたのは、二つの大きな桶（おけ）と一本の長い棒。

「？　これは……」

「最初の仕事は水汲みね。とりあえずついてきて」

――そして日は暮れ。
「なっさけないわねー。どれだけ貧弱なのよ」
「……」
呆れたような声に反応すらできず、地面に大の字になっているコウイチ。アリヤの言う“力のいる仕事”の結果である。
すぐそばには半分ほど水の入った大きな水樽。そして、小盛りになった不格好な薪の束が転がっていた。
「すぐにへばるわ、しかも水はこぼすわ……あんたよりも小さい子でももっと役に立つわよ」
――そうは、言われても。
なにしろ両端に桶をぶら下げた天秤棒で水を運ぶのも、その後にやった薪割りも初めてのことなのだ。
水を汲むための小川に行き、そこから水が並々と入った桶二つを運んで戻る――
言葉にすれば簡単だが、小川までの距離は徒歩三十分ほどもあり、道のりも平坦ではない。水の入った桶の重量は十キロほど。それを肩に担いだ天秤棒の両端に吊り下げ、来た道を戻るのだ。
もう水がこぼれるこぼれる。戻った時には、一個の桶で運んだほうがマシだったのではと思えるほど水かさが減っていた。
さらに薪割り。手渡された斧は意外と重く、薪の中心に振り下ろそうとして狙いをつけてもうまくいかない。百回ほど試して、斧も食い込ませずきれいに割れたのは十回ほどか。
後半には握力もなくなり、マメだらけの手から危うく斧がすっぽぬけそうにもなった。
結局、夕暮れを迎えた今、両手はマメだらけ、天秤棒を当てていた肩はちょっと動かしただけで痛いし、ついでに言えば腰も痛い。
「はぁ……」
吐息をこぼすと、アリヤはそのまま家の中に入ってしまった。
「……っ」
「大丈夫っスか？　兄さん」

「……なんとか」
いきなり姿を現したカセドラに驚く気力もなく、言葉少なに答える。
「呆れられたのだろうか……」
「あのアリヤって子にスか？　……えっと……まあ」
言葉を濁すその優しさが、また辛い。
赤く染まり始めた空の下、コウイチはふと思いついた疑問を口にした。
「そういえば……」
「何スか？」
「あの子は、キミのことを何とも言っていなかったが」
「え……今さらっスか？」
絶句するカセドラ。自分でも今さらだとは思うのだが、そんな些細な疑問にすら気づく余裕もなかったのだ。
「あのっスね、多分あの子には、オイラの姿が見えていないんスよ」
「見えて……いない？」
……それは、どういう……？
「やっぱりオイラが精霊だからじゃないスかね？」
精霊＝姿が見えない、というのがカセドラの言い分らしい。だとしたら、不思議なことが一つある。
「なら……なんで僕は」
「さあ、それはオイラにもわからないっス。相性がいいとかそんな理由じゃないっスかね？」
そんな適当な。
「あと、それも関係しているか知らないっスけど、さっきから心の中で思っていることが伝わっているの、気づいてたっスか？」
「……」
そう言われれば。あまりにも違和感がなかったので、さっぱり気づかなかったのだが。
「これも……精霊の力、なのか？」

「多分そうなんじゃないんスかねー？」
こともなげに言うカセドラは、興味がないというより大して考えていないようにしか見えない。
「……」
まあいいか。おかげで助かったし。
いつもなら気になってツッコむところが、今はこれからのことが先だ。
下手をすれば、このまま役立たずとして放り出されるかも……というか、そうなったらどうしよう？
本気で悩み始めたコウイチは、近づく軽い足音に体を起こした。
「何一人でぶつぶつ言ってるのよ。気持ち悪い」
「……」
カセドラとの会話を、途中から見ていたらしい。
遠慮がないというか、なんというか。
いや、でも第一印象があれだから我慢するべきなのだろうか？
年下の少女に罵倒（ばとう）されるという状況に、どう対応すべきかと迷っていると、アリヤが黙って手を突き出した。小振りのコップが、その手には握られている。
「……？」
「喉乾いたでしょ？　これ使って飲みなさいよ」
有無を言わさず渡されたコップで、樽（たる）の中の水をすくって一口。
「……うまい」
「そりゃそうでしょう。あんだけ働いたあとだから」
その言葉には、労をねぎらうような響きが含まれていた。
驚きの表情を向けるコウイチに、アリヤはそっぽを向いて、
「初めてだったんでしょ？　ああいうことやるのって。それならあんなもんじゃない？」
そうぶっきらぼうな口調で言い捨てる。
「これから慣れてもらって、もっと働けるようになってもらわない困るけど。……夕飯の支度（したく）できてるから、さっさと来なさいよね」

途中から背中を向けながら、アリヤは大股で離れていく。まるで何かを隠すように、その足取りは早い。

その背中を呆然と見ていたコウイチも、慌てて立ち上がってその後に続いた。不思議なことに、ほんの少しだけ体が軽くなった気がした。

（……なるほど）

家の中は思った通り狭かった。が、それでも壁と屋根のある空間というのは、思ったよりも心安らぐものだ。

当たり前のように甘受（かんじゅ）していた平穏を噛みしめつつ、コウイチは目の前の空の皿を見下ろした。

豆と野草を煮込んだ塩風味のスープと硬いパン。ささやかな明かりが照らす中、コウイチはあっという間にそれらをたいらげた。

小さなテーブルの対面では、アリヤがパンとスープを交互に口に運んでいた。その目が、ふとコウイチに向けられた。

「そういえば聞いてなかったわね。あんた、名前は？」

「……コウイチ」

「コウ、イチ？　変な名前。それがあんたの故郷じゃ普通なの？」

「……まあ」

ふうん、と大して関心もなさそうに頷くと、アリヤは食事を続ける。

元よりあまり話し上手でない性質（たち）だ。加えて相手は今日会ったばかりの女の子。切り出す話題もない。

（……沈黙の、食卓）

テレビでもあれば少しは賑（にぎ）やかしになるのだろうが、ここにはないらしい。聞いてみたら、きょとんとした顔をされてしまった。

今は姿を消しているカセドラの存在を、無意識のうちに求める――が、その姿はどこにも見えない。どうやら自在に出たり消えたりできるらしい。相変わらずの謎生物っぷりだ。

（うらやましい……）

できれば、自分も消えてしまいたい。

感じているのは自分だけかもしれないが、微妙に気まずい空気の中でアリヤも食事を終えた。すぐに立ち上がって皿を片づける。

それを手伝いつつ、コウイチはぼそりと言った。

「……ありがとう。その……美味しかった」

「無理しなくていいわよ。かったいパンに、味の薄いスープ。美味しくないってことはあたしが一番よく知ってるから」

「いや、だが……」

確かに出された料理は美味いとは言い難い内容だったが、それでも丸一日ぶり食事。それも他人の厚意で振る舞ってもらったものなのだ。味以前に、それは体に染みいるような感覚をもたらした。それをちゃんと伝えられないのが、もどかしく感じられるほどに。

「さ、さっさと寝ましょ。蝋燭がもったいないし」

言いながら、アリヤはテーブルの上の残り少なくなった蝋燭に目をやる。

電灯はなく、当然テレビやパソコンなどもあるはずがない。洗濯機や冷蔵庫などの、コウイチからしてみればあって当たり前の家電機器すらない。

そんな環境で生活している少女に、コウイチは素直に逞しさを覚えた。

「はい、これ」

と渡されたのは、ボロ布のようになっている毛布。

「これは……」

「それで体を包めば少しはあったかくなるでしょ。……言っとくけど、あたしのベッドには入れてあげないからね！」

どうやら、これが布団代わりというわけらしい。ボロはボロだが、何もないことと比べればはるかにマシといえるだろう。ましてや昨夜の野宿とは比べるべくもない。

「……ありがとう」

「いいからさっさと寝なさいよね、明日も働いてもらうんだから」

その口調は相変わらず素っ気ない。
アリヤは蝋燭に息を吹きかけると、壁際にある寝台に横になった。
真っ暗になった部屋の中、寝台が一つしかないことに気づいて、ふと思いついた疑問を口にする。
「もしかして、ここでは君一人で？」
「そんなわけないじゃない。ちゃんと家族がいるわよ。今はちょっと出かけてるけど」
……それもそうか。
いくらなんでも、こんな女の子一人で生活していけるわけもない。
となると、ベッドは二人で使っているのか。
「……何よ。もしかして、嫌らしいことでも考えてたんじゃないでしょうね。寝てるのをいいことにベッドに潜りこんでくる気？」
「いや、それはない」
慌てて頭を横に振って、否定の意志を伝える。
いくらなんでも、十歳ぐらいの子供に欲情するような趣味はない。
「ふーん……どうだかね」
それでも疑わしげな声を向けてきたアリヤだったが、すぐに年相応の幼い寝息をたて始めた。
コウイチも毛布にくるまって、板の上に直に横になる。干したばかりのようで、ぬくぬくとした感覚にしばしコウイチは酔いしれた――が。
「……」
（……眠れない）
体は疲れきっているはずなのに、妙に目が冴えてしまっている。
寝るのを早々に諦めて、コウイチは体を起こす。
原因はわかっていた。
――夜の空は晴れ渡っているらしく、満天の星空だった。
きらめく星の明かりが、暗く染まった空を明るく見せている。
その中心には、月が見える。見慣れた夜空――だがちょっと違っ

て見えるのは、ここが異国の地だからか……？
指を伸ばしつつ、星々を線で結んでみる。星座の名前はいくつか知っているが、どれがそれかというといきなり心もとくなる。
結局、これがそれだと思えるような星座は見つからなかった。
というか――
「ここは、いったい……」
一人、静かな場所にいれば、体を動かしている時には考える余裕もなかった疑問が次から次へとわき出てくる。
ここは、どこで――
自分はなんでここにいて――
だれが自分をここに連れてきて――
その目的はなんで――
「……はあ」
疑問に蓋をするような、重い溜め息。
知りたいことは数多くあっても、それらを知る手段を思いつかない。
大使館なりに電話で連絡をとるという手段も思いついたのだが、そもそも番号を知らない。というか、電話自体がない。
……そのことは一通りの家電製品がない時点で予想はついていたが、その存在すら知らないのは妙だった。
アメリカだかどこかに、あえて電気を否定して昔ながらの生活をする人々がいる……なんてことをテレビで見た覚えがあるが、彼らにしても電気の存在を知らないわけではないだろう。だが、アリヤはそれすらも知らないようだった。
――ここは、自分の知っている世界とはあまりにもかけ離れている。
もちろん、自分が世間知らずなだけで、世界にはこんな場所もあるのかもしれないが……，
「……そんな場所で、言葉が通じるなんてことがありえるのだろうか？」

もしかしたら、自分はとんでもない思い違いをしているのかもしれない――

コウイチの疑問をよそに、夜は静かに過ぎていく。

1．日常の終わり、非日常の始まり（3）

――寒い。

目を覚ましてまず最初に思ったのがそれだった。

無意識のうちに毛布をたぐりあげようと手を伸ばし……あれ？

あるはずの感触がそこにはない。

うっすらと目を開く。ぼやけた視界がすぐに焦点を結び、まず視界に入ったのは汚れた天井。

ついで視線を下げても、かけていたボロの毛布は見あたらず。

（……？）

不思議に思ったコウイチは、のろのろと首を巡らせ――硬直した。

（……なぜ）

そこにあるのは、幼い少女の寝顔。手を伸ばせば触れそうな至近距離にである。端から見れば寄り添うような形で、なんだか犯罪的な光景かもしれない。

アリヤが体に巻きつけてあるのは、コウイチが使っていたボロの毛布。

寒いはずだ。というか、これは……

（夢、か）

夢だろう。でなければベッドで寝ていたはずのアリヤがこんな近くにいる理由がない。というわけでこれは夢、確定。

（と、いうか……）

気がついたら変な場所にいたのも、カセドラとかいう謎生物のことも、その後で起こったこともぜんぶ夢のことに違いない。

つまり自分は今、家のベッドでぬくぬく惰眠をむさぼっているのだ。

……あれ？　ならなんで寒いの？

などと現実逃避めいた結論を出しつつも、同時に沸き上がった疑問に首を傾げていると――

ぱちりとアリヤの目が開いた。

「……んにゅ」

口元をうにゅうにゅと動かし、小さな手でごしごしと目をこする。さらにあくび。

さて、どうするべきか――などと思案している間にも、ぼんやりしていた目が、すぐ前にあるコウイチの顔をとらえて真ん丸に見開かれたかと思えば、

「……何やってんのよ」

三角につり上がっていく。

「……いや、これは」

アリヤの表情が、一転穏やかなものに変わった。

「昨日、『それはない』と言ったなかったっけ？」

昨日？

ああ、なんかロリコン疑惑を向けられた時にそんなことを言ったような言ってないような。

……ってあれ？

夢……じゃ、ない？

思考がそこに行き着いた瞬間、コウイチの背中にどっと汗が噴き出した。

目の前には、不自然なまでの笑顔を浮かべた外国風の少女。

ただしその笑顔がコウイチには、獲物を前にした猛獣（もうじゅう）というか、瀕死の人間を見下ろす死神というか。なんかそんな感じに見えてしまう。

「とりあえず、話を――」

「そう」

何が、『そう』なのか。

コウイチの中のイヤな予感が最高潮（さいこうちょう）にまで達する。

それと同時に、アリヤの笑みが一際深くなり――すぐに鬼のそれ

へと豹変した。
「この……変態！」
「へぶ」
勢いよく立ち上がったアリヤのサッカーボールキックが腹に決まった。
ごろごろと転がって、壁にべたんと体を打ってようやく止まるコウイチ。
「朝っぱらから何やってるんスか……」
カセドラの呆れたような声が、薄れゆく意識の中でぼんやりと聞こえた。
いや、もう何がなんだか。

……あー。
「……兄さん？」
うー、あー。
「ちょ、どうしたんスか、兄さん」
うー？
「……壊れた？」
恐る恐る語りかけるカセドラに、ソンビのような反応を返しながらも、コウイチは働いていた。
今日やることは、昨日と同じ水汲みと薪割り。
筋肉痛をはじめとする体の節々の痛みで、たぶん昨日よりも効率が悪い。
「……てい！」
「っ！」
カセドラの尻尾が鞭（むち）のようにしなって顔面を打つ。
（……何を）
「何をじゃないッスよ！　なんスか、さっきからあーうーって」
（……いや、朝の件で）
思い切り蹴られた腹をさすりながら、心の中で“思う”コウイチ。

声を出すとぶつぶつと独り言を言う変な奴みたいに見られるので、意識して声は抑えるようにしているのだ。

「……あー、あれッスか。ってもしかして蹴られたのをひきずってるとか？」

（まさか）

そこははっきりと否定。それは別にいい。いいのだが――

（いや、いったいどうしたものかと）

「あ、そういうことッスか。えーと……」

言いよどむカセドラ。その視線が、屋外で洗濯物を干しているアリヤに向けられる。

ズゴゴゴゴゴ――

なんかそんな擬音さえ発してそうな、見るからに不機嫌なその姿には妙な迫力があった。

というか朝の件からこっち、警戒しているのか話しかけてきてもくれない。

「……確かにあれはちょっと近寄りづらいッスね」

カセドラにも同意され、ますます声をかけづらくなってしまう。

「どうするつもりッスか？」

（どう、と言われても）

できることなら機嫌をなおしてもらいたいとは思う。こんなわけのわからない場所に来て困っていた自分に親切にしてくれた相手なのだ。険悪な関係でいたくない、と思うのは人情だろう。

かといって謝って機嫌をとるというのも何か違う気がするし……。

「子供相手に悩むことじゃないッスよ……」

カセドラがとほほ、と肩（っぽい部位）を落とした。

（それは、まあ）

などと思いつつも、不思議と情けなくも思えない。

見た目を別にすれば、アリヤの態度や物腰はどうにも子供らしくないからだろうか？

大人びているというか、ようするにしっかりしているのだ。一人

で生活して家事もこなしているからだろうが、そこらへんはほとんど親任せだった自分からしてみれば、素直にすごいと思えるわけで。
「まあ朝の件を兄さんのせいにするのは酷ッスかね。兄さんがあの子を運んで自分の近くに寝かせたってんなら別ッスけど」
（まさか――）
否定しようとしたコウイチの思考がピタリと止まる。
そんなことをした憶えはない。憶えはないが、もしそれが事実だとしたら。
――真っ暗な部屋の中、静かに寝息を立てて眠る少女。それを見下ろし、不気味な笑みを浮かべる男。男はそっと少女を抱き抱え自分の寝床の横におろす。そして男は満足げな表情で、少女の横で眠りにつく――そんな光景が頭に浮かんだ。
（……死のう）
「なんで凹むんスか」
（いや、だって……）
「冗談ッスよ。オイラ、ずっと起きてたから知ってるんスけど、兄さんの毛布をぶんどってすぐそばで寝たのは間違いなくあの子ッスよ。半分寝てたみたいッスけど」
（……）
ひょっとして、夢遊病の気でもあるのだろうか？
「けどあの場合、理屈じゃないと思うんスよ」
（感情の、問題と？）
「そうっスね。相手は女の子ッスよ。目を覚ましたらすぐ横にたいして親しくもない男が寝ているってなったら、そりゃ驚くってもんッス」
それはそうだが。
「だから兄さんもそんなに引きずらないほうがいいッスよ。あんまり考え込まないで、いつも通り振る舞えばそのうち元通りになるんじゃないッスかね～」
そうかもしれないのだが。

その“元”が考え込む性質なのだから、どうしろというのか。
子供相手に～とか、うじうじ考え込むのは～とか、理屈でわかっていても感情では割り切れないところが、自分でも自覚しているダメなところなわけで。
あー、ダメだなあと軽い鬱に浸りながら黙々と進める作業は、当然ながらはかどらない。
（働けど働けど我が暮らし――）
別に働きづめというわけでもないのだが、なんかそんな感じのフレーズが浮かんでくる。じっと手を見ると、つぶれたまめから血が滲んでいた。
（……せつない）
憂鬱な気分に浸っていると、いつの間にかすぐそばまでアリヤが近づいていた。緊張しつつ、問いかける。
「……なにか」
アリヤは不機嫌そうな無表情で、手を突き出した。
「ん」
その手にあるのは、先端に糸と小さなＪの字型の金具のついた長い棒……釣り竿？　見てみると、もう片方の手にも同じものを持っている。
「これは」
「ん」
押しつけ、背中を見せて歩き出す。
「……」
なんだというのだろう？
呆然と見送っていると、しばらく歩いていったところでアリヤは振り返って顔を赤くしつつパタパタと戻ってきた。
「なんで来ないのよ！」
……いや、そんなこと言われても。
どうやらついてこいという意味だったらしい。
仕方ないのでついていくことにした。

連れていかれた先は、水汲みに使っている川の少し上流にのぼったところだった。川幅が広くなっており、その分、流れる水の量も多い。

（……なぜ）

手に持つ釣り竿とアリヤを交互に見ながら、コウイチは首を傾げた。

ここまで来たら釣りに誘われた、ということぐらいはわかる。が、その理由がわからない。

いや、正直助かるのだが。鬱のまま単調作業をするのもしんどくなっていたし。

「あの子も悪かったって反省してるんじゃないッスかね。今朝のあれは、どう見ても兄さんに非はなかったッスから」

そうなのだろうか？

それにしては、先を歩くアリヤの背中は、それと見てわかるほどご機嫌斜めだった気がするが。

まあ、ここまで来たら付き合わないわけにはいかないだろう。とはいえ釣りなどやるのは初めてなので、どうしたらいいのかなー、とぼんやり。

アリヤはを見ると、川辺にある岩をひっくり返して、そのその裏にいた小さな虫をつまんでいた。

（……なるほど）

あれが餌（えさ）ということか。真似して岩をひっくり返すと、なんか足が何本もある気味悪い虫がわさわさと。

（……）

しばし硬直したあと、恐る恐る指を伸ばす。刺されないかなー、などとびくびくしつつ、何度か失敗してから釣り針に虫を刺した。

さて、次は――とアリヤを見ると、呆れたような眼差しでこっちを見ている。

目が合うとすぐに視線をそらし、手頃な岩の上に腰掛けて釣り竿

を振る。
ポチャン、と音を立てて餌付きの釣り針が水面に沈んだ。
コウイチも少し離れた岩に腰を下ろし、釣り糸を水面に垂らす。
（……）
さて。
……どうしよう？
やることが待つだけになってしまえば、後は会話でもして場を和ませられればいいのだが。
生憎（あいにく）と口下手な上に、今の重苦しい空気ではそんな器用な芸当はできそうにない。
と、いうか。
さりげなくアリヤに目を向けると、傍目（はため）にもわかるほど集中していた。下手に話しかけたら怒られそうなほど気合いが入っている。
（……いや）
待て待て。これはチャンスではないだろうか？
ここで大量の魚をゲットすれば。
見直される→和やかな雰囲気に→朝の一件がチャラ→ぜんぶ元通り……ということになるのでは？
「そんなにうまくいくもんッスかー？」
などと呆れの混じったカセドラの言葉が終わるや否や――
ピク。
かすかな手応え。驚いて反射的に引き上げた釣り竿の先には、ぴちぴちと小振りな魚が踊っていた。

一時間後――
コウイチのすぐそばの桶（おけ）には、十匹以上の魚が狭い中を泳ぎまわっていた。すべてコウイチのつり上げたものである。
（……なるほど）
釣れなければ退屈と聞いていたが、釣れればこれほどおもしろいものだとは。

ビギナーズラック、という言葉は聞いたことはあるが、身をもって体験したのはこれが初めてだった。

まずい、はまるかも。

すっかり夢中になったコウイチは、このまま一生釣りをしていてもいいような高揚感に包まれていた。

（……そうか）

ふと思いたつ。

初めての釣りだというのに、この釣果。競馬などの賭事だったらともかく、初心者にこれほどの成果があげられるものだろうか？

（……否）

つまり、自分には釣りの才能があり、その秘められた才能が開花しただけなのだ。

ようするにこれからはどんな場所に行っても、そこに川と釣り竿があれば生きていけるに違いない。つまり釣りこそが、自分の存在意義なのだ。

手に職を得た気になり、変なテンションで舞い上がっているコウイチに、カセドラの醒めた横やりが入る。

「あー、盛り上がってるところ悪いんスけど、ちょっといいっスか」

（……なにか）

「釣りの腕前はすごいって思うんスけど、最初の目的を忘れてないッスか？」

目的？　釣りの目的が魚を釣る以外にあるとでも言うつもりだろうか、この謎生物は。

「いやそうじゃなくて……隣を見れば思い出すッスよ」

言われるままに隣を見て、コウイチははたと我に返った。

そこではアリヤがおもしろくなさそうな顔を釣り糸を垂らしている。ここに来るまでよりも、機嫌は明らかに悪化していた。

（……アリヤの、釣果は）

「ボウズッス。一匹も釣れてないッスよ」

（……）

それは機嫌も悪くなるはずだ。
（……どうしよう？）
「さあ？」
すげなく返され、コウイチはうろたえた。
さっきまでの高揚感はどこへやら。
このままアリヤが一匹も釣れず、自分だけが釣れる事態が続けば。
（さらに気まずくなることは、必至（ひっし）……）
とはいえ、さっきから適当に釣り竿を垂らしているだけなので手加減のしようもない。
などという間にも、また一匹釣れる。横目にアリヤを見ると、目をつり上がらせてなんか陽炎（かげろう）みたいな怒りのオーラを立ち上らせていた。
（……まずい）
冷や汗をだらだら流し、コウイチはできる限りゆっくりと餌を釣り針につける。
そのまま振りかぶり――余計なことを考えていたせいか、釣り針は思わぬ方向に弧を描いた。
「きゃっ」
「え」
よりにもよって、釣り針はアリヤの服にひっかかった。
「ちょ……なにやってんのよ！」
抗議の声を張り上げるアリヤ。焦って竿を引くコウイチ。
釣り針が引っ張られ、それは狙っていたようにアリヤのスカートをめくりあげた。
「え？」
「あ」
止まる時間。驚いてむき出しになった下着に目をやるアリヤと、同じものを見て硬直するコウイチ。
「……」
「……」

「兄さん……」
カセドラの声は呆れを通りこして、どこか投げやりにさえなっていた。
いやいやいや、ちょっと待ってほしい。
今のは決して狙ったわけではなく、あくまで不幸かつ偶発的な事故であり、だからこそそれをした者を罪に問うべきではない、と思うのだがどうだろうか。
「当事者が言う台詞じゃないッスよ、それ……」
カセドラの声はいよいよ疲れたようなものに変わっていた。
アリヤはというと、硬直から抜け出して体をプルプルと震わせている。うつむき加減になった顔から、表情はうかがえない。
「あの……アリヤ、さん？」
コウイチは恐る恐る近づき、
「なに……すんのよ！」
げし！
「ぶは」
鬼の表情のアリヤに思い切り蹴り飛ばされた。そして――
「あ」
「え――」
ばしゃーん。
そのまま川に転び、頭を打って気絶した。

目を覚ますと、暖かい空気に包まれていた。
「あ、起きた……？」
アリヤの気まずそうな声が、すぐそばで聞こえる。
（なにが……？）
首を巡らせ、すぐそばに焚き火とちょこんと膝を抱えて座ったアリヤを見つける。アリヤの髪は、なぜか湿ったように垂れていた。
（はて……？）
川に落ちたことまでは思い出せるが、その後の記憶がまったくな

い。
「……重かったわよ」
アリヤがそっぽを向いてまま、ぽつりとこぼす。
（……ああ）
コウイチは事情を把握した。
どうやら、あやまって川に落ちた自分を、アリヤが引っ張りあげて助けてくれたらしい。
その時に濡れた服を乾かす為、焚き火をしているのだろう。
「だいたい当たりッスよ。ちなみにオイラも気づかれないように手伝ったッス」
いきなり現れたカセドラが、いかにも恩着せがましい口調で肯定した。
「お礼はあそこでいい匂いたててる焼きたての魚でいいッスよ」
焚き火の周りには、木の枝に串刺しになった魚が立ててあった。
半分ほどは火に当てられているが、残りは煙だけ当たるように配置されている。
服を乾かすついでに魚も料理しているようだ。煙だけ当ててるのは、燻製にするつもりだろうか、たぶん。
（なるほど）
感心してから、ふと我に返る。そういえば、お礼をまだ言っていなかった。
焚き火を挟んで対面にいるアリヤに、礼を言おうとして、
「ごめん！」
なぜか、アリヤに勢いよく頭を下げられた。
「……は？」
礼を言おうと矢先の出来事に、コウイチは目を丸くした。
「朝、蹴ったこと謝る。あたし、自分が寝相が悪いってわかってるのに、あんたのせいにしちゃって……謝ろうと思ってたけど、なかなか切り出せなくって……」
「いや、それは」

言葉をつまらせ、頭を下げたままのアリヤを見て、コウイチはうろたえた。

相手に引かれると、ここぞとばかりに勢い込んで攻め立てるわけではなくむしろ自分も引いてしまうタイプなのだ。

自分にも悪いところはあったのでは、とか、助けてもらったのに、そんなことをまず考えてしまう。

ここで一言気にしていないと言えばすむ話なのだが、そうしたどうでもいいことが頭の中を占めて、簡単で当たり前のことを見失ってしまう性質の持ち主だった。

それに加えて、謝られるという予想外の事態が混乱を助長していた。深く考えていたわけではないが、蹴られた件は何事もなく流されるのかな、と思っていた。ようは思い込みだけで人を蹴っておいて、何食わぬ顔をしているような少女だと思っていたのだ。その誤解がまた後ろめたい。

二人とも黙りこむ中で、後ろめたさから逃れたい一心で、コウイチは辺りを見回した。

串刺しになった魚から、食欲をそそる匂いが漂ってくる。

(……もっとあったほうがいいかも)

たいして深く考えもせず、とりあえず息苦しさから逃れるために、釣り竿を手に立ち上がった。

見上げるように顔を上げたアリヤに、

「もう少し、釣ってこようかと」

それだけ言って、その場から逃れるように歩きだした。直後、

「あーもう！　何やってるんスか！」

しびれを切らしたカセドラの体当たりに、コウイチの体は勢いよく吹き飛ばされた。

「へぶ」

紫色の球体の体当たり攻撃に、くるくる回ってそのまま倒れる。

ばしゃーん。

運悪く倒れた場所は川の中で、半ば乾いたばかりの服は再びびし

ょ濡れになってしまった。
（……なにを）
「何を、じゃないッスよ！　なんなんスかその及び腰は！？　相手が謝ってきてるんだから素直に受け入れるなり、張り倒して土下座させるなりすればいいんスよ！」
（いや、しかし）
土下座はないと思う。
「……ぷっ」
吹き出すような笑い声。
驚いて顔を向けると、アリヤがおかしくてたまらないというふうに笑っていた。
「アハ、アハハハ！　な、なにやってるのよ」
けらけらと、屈託のない笑顔。彼女からしてみれば、コウイチが何もないところでいきなり転んで川に落ちたように見えたのだろう。
（……ああ、そうか）
アリヤの子供らしい笑顔を見て、コウイチの頭の中のごちゃごちゃがすっと霧散（むさん）した。
アリヤは自分の非を認めて謝ってきてくれたのだ。なら別に逃げる必要などないではないか。
「だからそう言ってるじゃないッスか」
などとぶーたれるカセドラを押しやり、コウイチはいかにも場を和ますためにわざとこけました的なすまし顔で立ち上がった。
「……気にしては、いないので」
アリヤは驚いた顔をした後、
「うん、ありがと」
朗らかにうなずいた。そして手招き。
「じゃあ一緒に魚食べましょ。ちょうどよく焼けたみたいだから」
そうして火を囲んで食べる魚は、気持ちの問題からだろうか――想像以上に美味しく感じられた。

2．居候先の姉妹の事情（1）

――四日後。

人間なんて、どんな状況にも慣れるものだ……実感しつつ、コウイチは今日も黙々と薪を割っていた。

（慣れは、偉大だ）

しみじみと思う。

あれほど苦しめられた筋肉痛も気にならなくなり、マメの潰れた手を見てもひるまなくなった。余分な力を使わずに薪を割るコツもつかみ、作業効率も上がっている。

自分がいる場所がどこなのかわからない――そういうわけのわからない状況にも慣れ始めていた。……というよりも、手っとり早く知る手段がないので、とりあえずその問題は棚上げにしている。

慣れたということは、余裕がでてきたということでもあり、寝食と引き替えの労働をこなしながら、コウイチはアリヤやカセドラとたまに会話を交わしていた。

「――ところで」

パカン。

「なに？」

アリヤが切り株の上に薪を立てる。

パカン。

最低限の力だけ使い、斧の重みでコウイチが薪を割る。

「いや……こんなにやる必要があるのかと」

切り株の周りには、散乱した大量の薪。

水は必要量しか汲んでいないのでともかくとして、明らかにこの家で消費する分を上回っているのではないだろうか？

なにしろ、コウイチの労働内容は、水汲み、薪割り、薪割り、薪割り……。一日のほぼ全てを、薪割りに費やしている。割る薪がなくなり、鉈とノコギリを手に森に伐採に行くこともあった。

アリヤの答えは、そっけないものだった。
「ヨソの家の分もあるのよ」
そのそっけなさに違和感を覚えつつも、なるほど、と納得。
「ヨソの家、とは」
「もっとあっちの開けた場所に小さな村があるのよ。そこにね。あたしたちも一応、そこの村人ってわけ」
薪を立てたアリヤの指が、彼方の方向を指し示していた。
パカン。
「村……？」
薪を二つに割った後、コウイチはその方向を見て首を傾げる。その先には、人家らしき建物は見あたらない。
「あそこが丘みたいに盛り上がってるのよ。そこを登れば見えるわよ」
「なるほど」
どうりでいくら目を凝らしても見つからないはずだ。
「……だが、なんでこの家だけ、こんな外れに？」
他意のない素朴（そぼく）な問いかけだったが、アリヤの答えには一瞬の間があった。
「……森が近いから。それだけだから」
森が近いから、なんだというのか。確かに木材の伐採には便利だが。
というか……あれ？　なんか……機嫌が悪い？
なんとなく、それ以上このことについて触れてはいけない気がして、それなら、とばかりに話題を変えることに。
「この近くに、大きな町などは」
「村から続く街道の先に、騎士団も駐在しているような大きな町があるけど？」
……騎士団？　なんか微妙にファンタジーっぽい単語を聞いた気がしたが、とりあえずそれは置いておくとして。
どの程度の距離にあるのだろうか。

「話に聞いただけであたしも行ったことはないけど、歩きなら三日はかかるみたい」
……なるほど。となるとこれは、一度、村に行ってみて話を聞いたほうがいいかもしれない。
考えてこんでいると、アリヤが疑問を投げかけてきた。
「もしかして、町に行こうって思ってる？」
「……いや」
微妙に間を置いて答える。
歩いて三日は遠すぎる距離だし、そもそも行ったところで元の場所へ帰る手がかりが掴めるとも限らない。知らないことも多すぎるし、そもそもそこまで行き着くための旅費がない。と、いうかもし途中で怪我でもしたら……などなど。すっかり育まれたネガティブな性格が顔を出して、コウイチの思考は悪い方悪い方にばかり転がっていく。
とはいえこのまま世話になり続けるわけにもいかないので、どうしたものかと悩みながら頭をひねっていると、
「そ。……そっちのほうがいいと思うわよ。あんたなら道の途中でへこたれるに決まってるんだから」
内心を読んだようなアリヤの指摘が、ますます出足を鈍らせる。
「それだけならまだいいけど、もし盗賊とかに襲われたら命も危ないしね」
……盗賊？
日常会話としては聞き慣れない物騒な単語に、コウイチは勢いよく振り向いた。
「盗賊、とは」
「滅多にないんだけどね。たまに出るみたいなのよ。どこかから流れてきた盗賊に、町に行く途中で襲われて身ぐるみはがされたりとか、下手したらその場で殺されたりなんてこともあったみたい」
「……」
まあ。

実際にどうこうするのは、もう少し落ち着いてからでもいいのでは？

別に盗賊が怖いというわけではないが、いや、怖いと言えば怖いが、ほら、やっぱり命あっての物種っていうし、命がなくなったら帰るどころか何かをすることもできなくなるわけだし――

（と、いうことで）

「もう少しだけ、お世話にならせていただけませんでしょうか」

半ば懇願（こんがん）じみた思いをむき出しにして、コウイチは頭を下げた。

そして薪割りも区切りがつき、ちょうど腕が重くなってきたころ、

「ご苦労様。少し休んだら？」

アリヤの言葉に甘えて、コウイチは日光のもと草の上に横になっていた。

寝ているわけではなく、一人で考えごとをしていた。

――考えてみれば、ここで寝泊まりするようになってから、ここがどんな場所なのか知ろうとしなかった。

とりあえず生きることはできるからだ。元の生活に比べればだいぶ不便だが、不思議と不満は感じない。

人はパンのみに生きるにあらず、と昔の偉（えら）い人が言ったようだが、自分はパンだけでも不満を覚えない性質なのかもしれない。

――だからこそ、積極的に何かに関わろうとしなかったわけなのだが。

などと考えていると、洗濯をしていたアリヤの視線に気づいた。

「……なにか」

「前から思ってたけど、あんた覇気（はき）がないわねー。どんな生活送ってたのよ」

不意に投げかけられた言葉が悪意もなく、ただ単純に思ったことを口にしただけなのだとすぐにわかった。

だからこそ、胸に刺さった。

（どんな……？）

漠然としか思い出せない――それも道理。学校と家を往復するだけの日々。ただ与えられたものだけを甘受する、目的意識もない惰性だけの生活。

働くということが生きることに直結する今に比べれば、なんと密度の薄いことか。

もっと自分から行動を起こすような性格をしていれば、記憶に残るような毎日になったかもしれない。

が、その踏み出すための気力のようなものが、自分にはどうしても湧いてこなかった。

「――あのねぇ」

苛立ちの混じった声が、塞ぎかけた心を現実に引き戻す。

顔を向けると、アリヤが眉をつり上げていた。

「ちょっと悪く言ったぐらいで落ち込まないでよね。あんたが暗くなると、周りの空気まで一気に重くなるんだから！」

どうやら自分でも気づかないうちに、場の空気を悪くしていたらしい。

「……すまない」

「いいわよもう！　それより、その薪、まとめて裏に運んどいて」

憤ったアリヤに言われるまま、束ねた薪を家の裏手に運ぶ。

自己嫌悪のせいか、ずっしりと重く感じられる薪を下ろして顔を上げる。そこにはすっかり見慣れた紫色の球体がいた。

「カセド――」

「うわっ、暗！　暗っ！　暗いッスよ、なんつー暗さッスか！　なんかドス黒い感じの負のオーラを放ってるッスよ兄さん！」

「……」

そこまで言わなくても……というか、負のオーラ？

「冗談っスよ」

「……冗談に、聞こえなかったんだが……」

けろりと前言を撤回する自称精霊、もとい謎生物。コウイチは一瞬、その口をつまんでどこまで横に伸びるか試したくなった。

それを察したのか、カセドラはくるりと回りつつ距離をとる。
「それはともかく、あの子とすっかり仲良くなったみたいッスね」
「仲良く……？」
そうなのだろうか？　今も不機嫌にさせてしまったし。そりゃまあ、少しは普通に話せるようになったとは思うが。
「これだけ馴染めば、もうオイラは用済みッスかね～」
はっとして顔を上げると、カセドラが意地の悪そうな笑みを浮かべて浮いていた。
「冗談ッスよ。兄さん一人にさせるのも心配ッスから、もうちょっとだけ一緒にいてあげるッス」
「……」
そんな。小さな子供を相手にするような。
「んん～？　なんか不満そうな顔ッスね。お邪魔なら消えてもいいんスよ」
ぱたぱたと、相変わらず飾りにしか見えない羽を動かして飛んでいくカセドラ。
――ぎゅむ。
その尻尾を慌ててつかむ。
「なんスか？」
「いや……その……僕個人としては、もう少しいてくれたほうが……」
しどろもどろ。カセドラはくるりと一回転して、いかにも仕方なさそうな表情を浮かべた。
「しょうがないッスね～」
ほっと安堵の息を吐く、と同時に不安もこみあげてきた。
そばにいるのが当たり前のように感じていたが、カセドラがいつまでもつきあってくれる理由はない。今まで一緒にいたのも、気まぐれのようなものなのだから。
そう考えると、心細さと同時に寂しさのような感情が沸き上がってくるわけで。

「あ、さっそくアドバイスッスけど、今は戻らない方がいいっすよ？」
「……？　それは、いったい」
「覗(のぞ)いてみりゃわかるッス」
言われるままに、小屋の陰から顔を出してみる。
アリヤに、彼女と同年代の数人の子供たちが近づいてくるところだった。
「あれは……」
「村の子供たちッスね」
なるほど。それならここにいてもおかしくはない。ないのだが……なんだろう。子供たちの表情が、ちょっとひっかかるような……。
だがその違和感も、次の瞬間吹っ飛んだ。
「こんにちわ、エシトー、ブランシュ、ライナ。どうしたんですか？」
年齢不相応な和(なご)やかな笑みを浮かべ、丁寧(ていねい)に頭を下げるアリヤ。
「いい天気だろ。みんなで森に行って、野苺(のいちご)でも集めようってことになってな」
「そうですか。いっぱい摘(つ)めるといいですね」

「――あれは、いったい」
……誰だ。
誰だあれは。
だらだらと冷や汗をたらしながら、コウイチはうめいた。
子供たちに笑顔を向けるあの少女、見た目はアリヤだ。だがあれがアリヤであるはずがない。
アリヤといえば、その容赦のない物言いと凍りつくような眼差し、眼光をもつて、我が道を阻(はば)むものを許さず、立ちふさがるものすべてをなぎ倒すような存在だというのに。
「……いや、大げさすぎやしないッスか？」
それなのに今自分が目にしているアリヤは、今まで見たことのな

い丁寧な物腰。そして同年代を相手にしているのに敬語。なぜか敬語。自分はついぞ敬語など使われたことなどないのに……！

「そりゃあ第一印象がアレだったっスからねぇ」

「それはともかく」

「流された！？」

何やらショックを受けているカセドラを無視して、じっとアリヤ似の少女を観察する。

……そういえば、アリヤは家族がいると言っていた。あそこにいる少女はまさしくそれではなかろうか。

「双子、とか」

「……兄さんも素でひどいっスね」

ジト目のカセドラ。

などというやりとりを交わしている間に、子供のうちの一人がアリヤに詰め寄っていた。

「おまえも暇だろ。つきあえよ」

そう声をかけられたアリヤの足下には、洗濯中の服が入った水桶。アリヤは困ったようにそれを見下ろす。

「え……でも」

「そんなもん後でいいだろ？　せっかく誘ってやってんだからこいよ」

「……ごめんなさい。先にこっちを終わらせないと」

しらけたような顔で子供の一人が口を尖らせた。

「なんだよ。せっかく誘ってやってんのに」

「ごめんなさい」

申し訳なさそうに頭を下げるアリヤ。しつこく誘い続ける子供たち。

あー、なんか平和な光景だなあ、と、半ば現実逃避に陥っていたコウイチだったが。

「――なんだよ、そんなもん！」

子供たちのうちの一人が痺れを切らしたように桶を蹴りとばした。中の水が流れ出て、洗っている最中の服が地面に落ちる。

「あ……」

「これでやることなくなっただろ？」

「……」

言葉を失って顔を伏せるアリヤを見て、コウイチもまた驚きに目を疑っていた。

「あれ……は」

いくら遊びの誘いを断られたとしてもやりすぎだろう。だというのに他の子供もそれを責めようとはせず、むしろ当然のように笑っている。

その表情には見覚えがあった。

小さい頃、その性格からかコウイチにはいじめられていた時期がある。幸い長続きはしなかったが、その時のいじめっ子たちが浮かべていた表情。

自分よりも弱い者をいたぶる、幼さゆえの加減のきかない残虐さ。それが表ににじみ出て、妙に口元の歪んだ嫌らしい笑みとなって浮き出る――そうした表情だった。

アリヤと重なる過去の自分。自分など、決して彼女と重なるものはないと思っていたのに。

不意に足下がぐらついた。

「う……」

支えを求めて伸ばした手は何も掴めず。

かわりに、カセドラの尻尾が足に絡まってコウイチを転倒を防ぐ。

「カセ、ドラ……」

「大丈夫っスか？」

初めて聞く、カセドラのおちゃらけのない声。引きずり込まれるようだった暗い思考から、現実に立ち返る。

「あ、ああ……」
呻くように言葉を返しながら、再びアリヤに視線を向け――コウイチは絶句した。
「……っ」
少女は、笑っていた。
それはどこか、困ったような、どこか遠慮がちな笑顔で――あの年齢の子供が浮かべるには、あきらかに違うもの。
その笑顔から、アリヤがこうした事態に慣れきっていることがわかった。
立ち尽くすコウイチをよそに、さっきまでしきりに誘いをかけていた子供たちの態度は変わっていた。
「あ、でももう人数足りてるよね？」
「あー、そういえばそうだった」
棒読みでそう言葉をかわす。
「ってわけで、やっぱおまえいらないや。じゃあな」
けらけらと笑いながら、彼らは立ち去っていく。
気づかないうちに握りしめていた手が、汗に濡れていた。
……要するに、最初から誘う気などなかったのだ。
嫌がらせがしたかっただけなのだ。ちょっとした刺激を求めて。
あるいは暇つぶしのために。
なんでアリヤがそんな仕打ちを受けるのか、されるがままを許しているのかはわからない。
遊びは終わりとばかりに、さも満足げに談笑しながら子供たちは遠ざかっていく。安堵にも似た思いが、深い息となってコウイチの口からこぼれる。
（終わり、か）
見ていて気分の悪くなるような一幕が終わったことに対する、安堵のため息。
これ以上続きを見なくてすむことに、コウイチは心底ほっとしていた。

と、子供の一人が急に振り向いた。無造作に、腕を振る。そこから飛来する何か。

「キャッ！」

アリヤが悲鳴をあげてよろめいた。

「なっ……？」

はっきりと狙ったわけではないのだろう。適当に、当てるつもりもなく投げられた石は、しかし運悪くアリヤの頭を直撃していた。

「――！」

「あ、ちょ、兄さん！」

背後からのカセドラの声。

なんで、と思う暇もなく。

走り出していた。

わけのわからない衝動（しょうどう）のままに駆け出し、頭を押さえてよろめくアリヤを支える。

「……アリヤ」

「バカ……な……んで、出てきたのよ」

痛みをこらえるようなくぐもった声に、力はない。

「な……なんで、って……」

なぜ非難されるのか、意味が分からないまま、石を投げた子供に目を向ける。

子供たちはいきなり現れたコウイチに驚いた様子だったが、すぐに背中を向けて走り出した。

追うべきか、いや、怪我をしたアリヤを放っておくわけには――考えている間にも、子供たちの姿ははるか遠くで見えなくなる。

腕の中にはぐったりとしたアリヤ。顎（あご）から、ぽたりと赤い滴がしたたれ落ちた。

「……とりあえず、手当てを」

包帯や消毒薬など望むべくもなく。傷を拭いて、清潔な布を巻きつけるだけが精一杯だった。

幸いなのは、思っていたよりも傷が小さいことか。頭の傷なので出血が多かったのだろう。
「それで……」
「何よ」
不機嫌そうでいて、噛みつくような声。やはり彼女はアリヤなのだと、こんな状況にも関わらず再認識した。
「いや……できれば、理由を知らせてもらえれば、と」
「今のあたしにそれを聞くわけ？」
「……」
やはり、もう少し落ち着いてからのほうがよかっただろうか？
いや、でも。タイミングを外すとますます聞きづらくなるし。
オロオロして視線をさまよわせるコウイチ。呆れた眼差しを向けていたアリヤだったが、その様子がおもしろかったのか、いきなりぷっと微笑した。
「……いいわよ。話したげる」
「え……だが」
「隠すようなことじゃないしね――両親がいないのよ。うち」
「……な」
絶句した。あまりにさらりと言われたので、理解するのに時間がかかった。
「いない、というのは」
「そのままの意味よ。あたしがちっちゃい頃に、死んじゃったの。村の中でそういう家はうちだけ。で、あいつら自分と少しでも違ったり、弱い者を見ると、突っつきたくなる年頃ってわけ。わかったでしょ？」
言葉が出てこない。あっさり言うが、被害にあってるのがそのアリヤ自身だというのに。
「なんで……そんな……」
「同情はいらないわよ。お腹がふくれるわけでもないし、うっとおしいから。あたしだってことさら自分を可哀想だなんて思ってない

し。あいつらだって、そのうちどうでもよくなって近寄ってもこなくなるわよ」

さばさばした口調で言い切るアリヤを前に、コウイチは何も言うことができなかった。

とてもではないが、十才そこそこの子供が話すような内容ではない。

「君、は……」

「なんて言っても、こっそりバレないように仕返しはするけどね」

……。

「……は？」

「ブランシュの奴……乙女の柔肌を傷つけたこと、たっぷり後悔させてやるんだから……」

ククククク、と、とても乙女とは思えない暗い嘲笑を漏らすアリヤ。

さっきまでとは別の意味で唖然とするコウイチ。

つい先ほど交わしていた会話が嘘のような光景だった。

「いや……あの？」

「なによ、バカみたいな顔して。あたしがあんなことされて泣き寝入りするわけないでしょ」

まるでそれが自然の摂理だとでも言うように。アリヤはあっさりと言い放った。

（……なんというか）

さっきまで抱えていたもやもやした思いは、あっさり霧散していた。

今までの重い話はいったい……というか、本当に堪えてない……？

落差に戸惑い、頭を抱えるコウイチ。

そういえば、初めて会った時も、靴の中にミミズがどうとか言っていたような……。

子供たちにはなぜか丁寧な態度で接していたから、バレないように何かするつもりだろう、たぶん。

なんとも言えない気分になり、コウイチは肩を落としていたのだが、

――バンッ！

「アリヤ！」

大きな音を立てて飛び込んできた人影に、驚いて飛び上がった。

「なっ……？」

小屋に入ってきたのは、コウイチと同じぐらいの年齢の黒髪の少女だった。

息を切らしている少女は、なぜか険しい目つきで、家の中に視線を走らせる。

「あの……」

誰なのか、と問いかける間もなく、

「っ……」

少女の視線が、ぴたりと止まった。その先にある血で汚れたアリヤの髪を見て、少女の顔から血の気が引いていく。

と同時に、少女は片手に持っていた弓に矢をつがえ、コウイチに狙いをつけた。

「って、ちょ――」

「アリヤから……離れて！」

少女が弓を引き絞る。いきなり矢を向けられて、コウイチの頭が真っ白になった。

――なんだ？

なんだこれは？

キリリ、と弦を引く音だけが、鮮明に耳に届く。完全に引き絞られた弦が、きれいな弧を描いた。

ああ、死んだ――他人事のように、漠然と思う。

思った時だった。

人影が視界の端から飛び出したのは。

「止めて、姉さん！」
コウイチを庇うように飛び出したのはアリヤだった。
「っ！」
驚きで放たれた矢は、アリヤの頭のすぐ横を通り過ぎて壁に突き立つ。
「あ……ご、ごめ――」
見ているこっちが気の毒になるほど、おろおろと狼狽する少女。
赤く染まっていた顔が、今度は青白く変わっていく。アリヤはそっと歩み寄り、その腰に抱きついた。
「落ち着いて姉さん。あたしは大丈夫だから」
（……ねえ、さん？）
呆然とするコウイチをよそに、アリヤは黒髪の少女に身を寄せていた。

2．居候先の姉妹の事情（2）

「ごめんなさい」
「いえ。その……気にしてはいないので」
しおらしく頭を下げられ、コウイチは慌てて手を振った。
「誤解するのも、無理はないかと」
深々と頭を下げる女性。アリヤの姉で、レナファというらしい。
話を聞いたところ、彼女は猟師で、今日まで森の中に入って狩りをしていたという。
そこで狩った獲物を持って村に行った時に、妹のアリヤが知らない男と一緒にいるという話を聞き、急いで戻ってきたらしい。
そこで目にしたのは、怪我をして髪を赤く染めた妹と、そのすぐそばにいる見知らぬ男。誤解しても仕方がないと思う。
「でも――」
「いえ、ですから本当に――」
「そうよ、姉さんは悪くないわ。悪いのはあたしに怪我させた奴らなんだから」
アリヤのフォローに、レナファはようやく頭を上げた。落ち着いた状況で見ると、さすがに姉妹だけあって目鼻立ちがアリヤとよく似ている。黒く見えた髪もうっすらと茶色がかっていた。
「……」
ふと思いつき、アリヤとレナファを交互に見比べる。
こうして外見だけ見ると、精神面では大人びているアリヤもいかにもお子様に見えるわけで。それに比べて姉の方はと言えば――
（……よし、正常）
不快に思われない程度にレナファのそれなりに均整のとれた体を視界に入れつつ、心の中でガッツポーズをとる。
「何がッスか……」
すかさずカセドラにツッコミを入れられ、

「……なんかおもしろくないんだけど」
アリヤに不機嫌な顔を向けられるが、それはそれ。なんでもないふうを装って、明後日のほうを見たりする。
「……へー。もしかしたら自分はロリコンなんじゃないかって疑ってたんスか」
（……）
心が読めるって、卑怯だと思う。
「アリヤ……傷のほうは、大丈夫？」
ジト目のアリヤに、レナファが声をかけた。
「大丈夫よ。そんなにひどい怪我じゃないし」
「でも……」
それでも心配そうなその様子は、さっき矢を向けてきたのと同じ少女には思えない。
姉妹ではあるが、アリヤとはまた違った気性の持ち主らしい。少し話しただけだが、あまり自分から前に出ない性格なのかもしれない。
ああ、そうそう、とアリヤが両手を打ち合わせた。
「それより姉さん。こいつ、困ってたみたいだったから拾ったの。薪割りとか水汲みとかさせてるから、姉さんも用事があったらこきつかってよ」
「拾ったって……」
絶句するレナファ。
説明に釈然としないものを感じつつも、コウイチは頭を下げた。
「コウイチ、と言います」
「あ、はい……」
少し距離を置いたように、よそよそしい反応。
……まあ、自分の知らないうちに、見知らぬ男が家で暮らしていたのだ。当然かもしれない。
（……あれ？）
というか……今の自分の立場って、血縁もないのに居座っている

迷惑な居候的なポジションなのでは？
「なのでは、じゃなくて、その通りっすよ。働いてるだけマシっすかね」
（……）
ぐさぐさと遠慮のない物言いで刺してくるカセドラを手で追い払うと、レナファに不思議そうな目で見られた。
「それより姉さん、なんで手ぶらなの？」
「あ……」
しまったという顔になったレナファを、アリヤが眉をひそめて見つめる。
「もしかして……獲物を食べ物とも交換しないまま村に置いてきたとか？」
「えっと……うん」
「はあ、まったく……でも、あたしを心配して急いで戻ってきてくれたんだもんね」
「ごめん……すぐに行って交換してくるから」
「ならついでにあたしも行く。食材が残り少ないし、あたしが行った方がたくさん代えてもらえるしね」
「でも、怪我は」
「これくらいどうってことないわよ。もう血も止まったしね」
「……うん。じゃあ一緒に行こう」
（……）
えーと。
なにやら自分を置いてけぼりで話が進んでいる中、アリヤがくるりと振り向いた。
「では、僕は――」
「あんたは留守番」
あっさりと言い放ち、姉妹は手をつなぐ。
「じゃ、行きましょ」
「うん……」

バタンと、家の扉が閉められた。後にはコウイチが一人、ぽつんと残される。

（……）

まあ。

せっかくの姉妹水入らずを邪魔しても悪いし。

というか、自分が行って何をする、というわけでもないし。手伝うようなことがあったら声をかけられているはずだし。

「兄さん。ひょっとして一人だけとり残されて寂しいとか」

ギクゥッ！

「それなら一緒に行きたいとか言えばよかったじゃないッスか」

「いや、まさか。そんな。それこそ誤解と言うものであって、まさかそんな寂しがり屋の子供のようなことを考えては」

「そっスか」

最後まで聞かずに、また姿を消すカセドラ。

「……」

後には、ぽつんと立ち尽くすコウイチだけが残された。屋内にも関わらず。ヒュルラ～と、木枯らしが吹いた気がした。

――夜。

森が近いせいか、夜行性の動物たちの遠吠えや鳴き声などが嫌でも耳に入る。

それでも静けさのほうが勝っている家の中、そこの住人達が出す音は鍋の中身が煮立つコトコトというものぐらい。

家を仕切る唯一の壁の奥では、アリヤが夕飯の支度をしていた。何度か手伝おうとしたのだが、アリヤいわく、台所が狭いので一人でやったほうがいいらしい。

必然的に、コウイチはテーブルを挟んでレナファと向かい合うことになる。

「……」

「……」

沈黙。会話もなく、ただただ時間が過ぎていく。

「……」

いや、わかってはいるのだ。ここはなんらかの話題を振って、会話を交わして親しくなっておくべきだということは。わかってはいるのだが。

（……無理）

そもそもよく知らない他人と、盛り上がることのできるような会話スキルなど持っていない。

（……と、いうか）

さっきから同じように、黙り込んだまま顔を伏せているアリヤを見る。

矢を向けられた時はじっくり見る余裕はなかったのだが、どちらかといえば……いや、はっきりと整っている顔つき。

猟師ということらしいが、軽く日に焼けた肌と少し引き締まった体以外は、普通の女の子となんら変わらない。

そんな相手と一つ屋根の下で、なぜか同じ食卓を囲っている。

（……無理）

そっち方面でも意識してしまって、アリヤの時以上に言葉が出てこない。

大人しい性格なのか、最初の出会いの引け目でも感じているのか、向こうから話題を振ってくる様子もないし。

状況によっては、静寂とはこんなに痛いものなのかと思いつつ、それとなく周囲に視線を走らせる。

こんな時に限ってカセドラは姿を現さないし。黙り込んだまま、せめて早くこの時間が終わってほしいと、切実に願っていたのだが。

「……あーもう！　なんなのよ、この重たい空気は！」

食事を運んできたアリヤに怒られた。

「……アリヤ」

「姉さんは人見知りするタイプなんだから、そっちから話題とかふってあげないとダメじゃない、コウイチ」

「いや、だが」
だってそんなキャラじゃないし。
目で訴えると、アリヤががくっと肩を落とす。
「……って無理かぁ。コウイチ、そんなタイプじゃないもん」
わかっているなら、ムチャ振りはしないでほしい。
ぶつぶつ言いながら食事を並べるアリヤ。いつもと同じような、野草と豆入りのスープ、それにパン。すっかり飽きた品ぞろえだが、食べさせてもらっている身としては文句はいえない。
――コト。
「……これは」
さらに一品。大皿に盛られた品にコウイチは目を奪われた。
食べやすいサイズに切り分けられた、油のしたたる獣肉。鼻孔をくすぐる匂いに、思わず喉を鳴らす。
「姉さんが獲ってきた鹿のお肉よ。どう？　おいしそうでしょ！」
まるで我がことのように、アリヤは誇らしげに胸を張った。
「ほとんど豆や野菜と交換しちゃうから、姉さんの狩りから帰ってきた時ぐらいにしか食べられないんだけどね」
「……いいのか？　僕も食べても」
「遠慮しなくてもいいわよ。あんただって働いてるんだから」
アリヤが嬉しそうに頷く。
対照的に、レナファは少しばかり冷めた視線をコウイチに向けていたが、肉に目が釘付けになっているコウイチはそれに気づかなかった。
「じゃ、食べましょ！」
その言葉が終わるや否や――コウイチは何日ぶりかの肉に、むしゃぶりついた。

夕飯後、いつもだったらすぐに寝るところだが、姉が帰ってきたのが嬉しいのか、アリヤはすぐ寝ようとは言い出さなかった。
「それで？　どうだったの？」

「今回は運がよかった……かな？　雨も降らなかったし、わりとすぐに鹿の痕跡を見つけることができたから」

アリヤにせがまれて、レナファは狩りの経緯を話し始める。その様子はいかにも仲のいい姉妹の団欒といったふうで、コウイチは少しだけ距離をおいて見ていたのだが。

「コウイチも聞く！」

「いや、なぜ」

「姉さんがとってきたお肉を食べたんだから、姉さんの苦労話を聞くのは当然でしょ？」

「……」

レナファが話したがっているというよりも。アリヤが聞かせたがっているだけのような気がするのだが。

とはいえ、実際の狩猟というものがどういうものなのか興味もあったので、黙って言われるとおりにする。

最初はぼんやりと耳を傾けていたコウイチだが、ぽつぽつとした口調で話すレナファと、所々で入るアリヤの説明に次第に話に引き込まれていった。

（……なるほど）

狩猟というものは、一度森に入れば何日もかけて獲物を追うことや、一日中じっと同じ場所で身を潜めていることも珍しくないという。

獲物を見つけても、場所は遮蔽物の多い森の中。木々に邪魔されて弓矢でしとめることは難しく、ある程度近づかなければならない。

かといって野生の獣は鼻が利くので、考えなしに近づけばすぐに逃げられる。

だから、耐える。野生の獣になったように五感を研ぎすませ、チャンスを待つ。

「……すごい」

我知らず、コウイチは呟いた。

話を聞いただけだが、猟師と言うのが技術以外にも、獲物に対す

る相当な執着と我慢強さを必要としていることがわかる。
それでいて、レナファはきっちりと獲物をしとめてきた。つまりは彼女は、それを備えているということだ。自分と変わらない年頃の少女だというのに。
「どう？　姉さんはすごいでしょ！？」
一通り話が終わると、アリヤは興奮した口調で問いかけてきた。
「ああ。その……本当に、すごいと思う」
本心からの言葉に、アリヤが満足そうに鼻をならした。よほど姉が誇らしいのだろう。
レナファは顔を伏せていたが、その耳がほんの少し赤くなっている。
（ひょっとして……照れてる？）
追求したい衝動にかられたが、それほど親しい仲でもないのであえてそこは抑えることに。
「あの、アリヤ……そろそろ寝ないと」
「えー、いいじゃない。もうちょっとだけ」
まだ楽しい時間を終わらせたくないらしい。唇を尖らせたアリヤがくるりと振り向いた。
「コウイチ、あんたも何か聞きたいこととかないの？」
「……そういえば。いや、狩猟のことではないんだが」
ふと気になっていたことを口にする。
「さっき、肉を交換と言っていたが」
姉の話題でないからか、アリヤは急に拍子抜けした顔になった。
「言ってたけど、それが何？」
「ここでは、それが基本なのか？　その、お金とかは」
「お金？　……ああ、あの丸くて小さいヤツ。使うのは行商人が来たときくらいよ。村内でのやりとりは基本的に物と物だから」
なんとまあ。
ここでは通貨での売買よりも、物々交換のほうが主流らしい。となると、ここでは村という共同体だけでほとんどの生活が成り立っ

ているのかもしれない。
「その、村といったがどのくらいの人がいるんだ」
「二百人くらいね。ホントにちっちゃな村よ。……興味あるの？　でもあんたは行かないほうがいいわ」
「……？」
アリヤはあまりいい顔をしていない。何が問題なのだろう。
「閉鎖的なのよ、うちの村は」
つまらなそうに、アリヤはぽつりと呟いた。
「かといって身内に優しいってわけでもないんだけどね。母さんが病気で死んで、父さんが事故で死んで。姉さんが猟師の父さんから狩りの仕方を教わっていなかった、私たちも役立たずだからって村八分にされていたかもね」
まあ今も似たようなものだけど、とアリヤは少女らしからぬ仕草で肩をすくめてみせた。
「ならなんで薪を」
昼間、薪をヨソの家に分けていると言った件を掘り返してみる。
「ああ、あれ？　ああしてご機嫌とっとけば、煙たがれることもないし。少しだけど、食料と引き替えでもあるしね」
……なるほど。
アリヤのしたたかさというか、ご近所さんのご機嫌をとるという抜け目のなさをに感心しつつも、
コウイチは密かに違和感も覚えていた。
今に始まったことではないが、その考え方があまりにアリヤぐらいの年齢の少女らしくない気がするのだ。
（だけど……まあ、そんなものかもしれない）
両親の庇護の元、ぬるま湯に浸かるような生活が当たり前の現代っ子な自分だからこそそう思うだけで、アリヤやレナファのように両親を失い、早くに自活する必要がある環境に育てば、感情よりも打算が優先されるようになるということなのだろうか――などと一人自問しながらも、コウイチはこの時、ただ姉妹のたくましさに感

心するだけだった。
ひとしきり話を終えると、まだ不満そうなアリヤをレナファがなだめて、姉妹はようやくベッドへと入った。
「姉さんが美人だからって襲うんじゃないわよ」
「……」
アリヤの忠告のげんなりしつつも、毛布にくるまり黙って目を閉じる。
最近では目をつむればすぐに寝られるようになってきた。それは住人が一人増えた今夜も変わることなく――そばにいる姉妹を意識する間もなく、コウイチはあっさりと眠りについた。

――深夜。
「……？」
ふと目を覚ましたコウイチは、違和感に気づいた。
一つのベッドを一緒に使っていた姉妹がいない。かわりに、外から話し声のようなものが聞こえた。
こんな夜中に……？
疑問に思い、体を起こしてそっと扉を押し開く。
「――しょうがないじゃない、姉さん。あいつ、ここまで来た記憶がないって言うんだから」
そう言ったのはアリヤの声だった。
「それは……そうだけど」
「そりゃあいつを家に置いとけば、村の奴らが嫌な顔するのはわかるわよ。昼間行ったときも嫌みを言われたし。けど今追い出したら、間違いなくそこらへんで倒れることになるもん」
何を……？
どうやら自分のことを話しているらしい。コウイチは外の会話に意識を集中した。
「……私はいいけど。家に残るアリヤは――」
「大丈夫よ。あたしがちょっと猫かぶってればみんな騙(だま)されてくれ

るもん。あたしたちを本当に嫌ってるのは村長ぐらいだし。適当にあしらってみせるわよ」

「アリヤ……」

「そんな顔しないでよ。姉さんが狩りに出てくれるおかげで、私も毎日のご飯が食べられるんだから」

「足りてるの？　その……食材とか。今までも余裕があったわけじゃないのに」

「一人分増えたのは確かに痛いけど、足りなくなるってほどじゃないし。それにほら、あいつってああ見えて釣りが得意なのよ。いざとなったらそれで食料調達するから」

「……ん、わかった。けど、無理はしないでね」

「わかってるわよ。たった二人の“家族”なんだもんね」

話を終えた二人が戻ってくる。

コウイチは無言のまま扉を閉め、そっと横になって毛布に身を包んだ。

2．居候先の姉妹の事情（3）

「あの」
「……なんですか？」
翌朝――
朝食を終えたコウイチは、レナファに声をかけていた。話しかけられたのが意外だったらしく、レナファは戸惑ったような顔をする。
「何か手伝えることがあったら、言ってほしい」
「え？」
アリヤが驚いた声をあげた。
レナファが困惑したように眉を寄せる。
「いや、その……昨日の肉のお礼というか、自分にも何か、できることはないか……と」
「……」
気力を振り絞っての発言だったが、沈黙にすぐに後悔が押し寄せてきた。
ひょっとして、いい迷惑だったろうか……。
困った顔をしたレナファが、アリヤに目を向ける。
「いいんじゃない。姉さん」
「アリヤ……」
「水汲みはあたしがやっとくし、薪もだいぶ溜まってきたから、今度は姉さんが手伝ってもらったら？　さすがに狩りに連れてくのは無理だろうけど、荷物を運ぶぐらいならできるだろうし」
妹にそう言われて、レナファは複雑そうにしつつも頷いた。
「それなら……はい、わかりました」
思わずほっと息をこぼす。嫌われているかもしれないと思う相手との会話は、なんでこんなに疲れるんだか。
「森に入るので、準備をしておいてください」
言いおき、レナファはコウイチに背を向けた。相変わらず、なん

となく距離をおいた態度である。

アリヤいわく、狩った鹿の一部が、まだ森に置いてあるらしい。獲物にもよるが、そうしたことも珍しくないという。今回の鹿もレナファ一人では運びきれず、残った分を今日にも運んでくる予定だったらしい。

準備と言われても何をしていいのかわからず、皮袋に飲み口をつけた水袋をアリヤに渡されたくらいだった。

「何日も森に入るわけじゃないしね。身軽なほうがいいと思うわよ」

あまりの荷物の少なさに戸惑っていると、アリヤにそう言われた。

「お待たせしました」

言うほど時間もかからず、レナファも準備を整える。

毛皮のすね当て、肘当て。背中には矢筒と弓を背負い、腰には鉈と縄、小さめの皮袋を下げている。

こうして見るといかにも猟師というか、見た目にも効率的で無駄がない。レナファの容姿と合わせて、凛々しさが引き立っている気がする。

「それじゃ……行ってくる、アリヤ」

「うん。行ってらっしゃい姉さん。あとコウイチもね」

木々が生い茂った森へと入る。

「……」

特に会話もなく、レナファのあとに続いて歩く。

淡々と。黙々と。何を話していいのかわからないということもあるが、レナファの足取りは思っていたよりも早く、そもそも話すような余裕がない。

「どうしたんスか？　急に積極的になって」

（……カセドラ）

例によって、謎生物はすぐ近くでくるくると回っていた。

「もしかして、好みのタイプとか？」

（いや、別にそういうわけでは）

好みか好みじゃないかと聞かれればまあアレだが、そうした下心があってのことではない。そもそも手伝いを口実に仲良くなろうとか、そんな積極性というか図々しさは持ち合わせていない。

「確かに兄さんにはそんな度胸はなさそうっすね」

（……）

わかってるなら言わないでほしいと思う。

「それなら、昨日のあの子たちの会話を聞いて気まずくなったとか？」

（っ！　……君も、聞いてたのか）

「当然ッスよ……というか、元々二人だけで住んでたところに、いきなり食い扶持が一人増えたんスよ？　台所事情が苦しくなるなんて、そんな当たり前のこと兄さんもとっくに気づいていると思ってたんスけどね」

（……）

気まずくなって、顔を落とす。

昨日、意図せず話を盗み聞きしてしまった直後、激しく落ち込んだことを思い出した。

そんなことなど、思いもしなかった。

黙っていれば毎日朝昼晩、三度の食事が出てきたあの場所とは違うのだ。ついあの時の感覚で甘えていた自分に嫌気がさした。

「またへこむ……いいじゃないッスか。そりゃ今まで気づかなかったのはヌケてるっていうか、兄さんらしいとは思うんスけど、それを挽回するために手伝うなんて言ったんスよね？　それならこの後の働きで頼りになるところを見せればいいんスよ」

「……カセドラ」

……もしかして、励まされているのだろうか。

謎生物にすら励まされる自分のふがいなさを情けなく思いつつも、なんだか胸の内がじんわりと暖かくなった気がした。

「それに兄さんが落ち込むのは勝手ッスけど、遅れてるッスよ」

顔を上げると、レナファの背中はかなり遠くなっていた。慌ててペースをあげる。

それからしばらく歩いた後、

「休憩しましょう」

レナファの一声で、ようやく休憩に入った。

肩で息をしながら、その場に座りこむコウイチ。

正直、ありがたい。

足場が悪いということもあるが、それ以上に先を行くレナファについていくのはキツかった。

そして自分がキツいと思っているにも関わらず、レナファは平気な顔をして汗一つかいていない。歩き慣れているとかそういう問題以前に、根本的な体力が違うのだろう。

渡された水の残りを気にしながら、口に含む。

（……まずい）

ぬるい上に、染みついた皮の臭いが嫌に気になる。

レナファはといえば、同じように皮袋に入った水を少しずつ口に含んでいた。

「あの」

「……なんですか？」

「いえ。あの、あと、どれぐらいで、目的の場所につくのかと」

「今日中には、帰れると思います」

「そう、ですか」

ぶつ切りの、会話とも言えない言葉の投げ合い。加えてお互いぼそぼそっとした口調で喋るものだからはずむわけがない。

（と、いうか……）

早くても、今日いっぱいはかかるというわけで。

時計がないので、時間がわからない。時間がわからないと、つらい時間はますます長く感じられる。

またしても訪れた沈黙に、

「兄さん兄さん」
耐えかねたようにカセドラが声をかけてきた。
「せっかくなんスから、いろいろ聞いてみたらどうッスか？」
「……いろいろ、とは」
「そりゃあもうお約束としては、好みの男のタイプとか、彼氏はいるのかとか」
（……）
それはあれか。ある日突然転校してきた美少女に対する質問か何かか。今時マンガぐらいでしかそんなシチュエーションはお目にかかったことはないのだが。それにそうした質問をするのは、たいていおちゃらけたお調子者キャラだ。対極の位置にいるような自分にそんなのの真似をしろと言われても――
「いやあの……冗談なんスけど。そんな本気にとられても……で、なんかないんスか？」
ああ、冗談か。……というか、そうは言われても。
聞きたいこと聞きたいこと……。
「……あ」
思わず出した声に反応して、レナファがなにか？　と言った顔を向けてきた。
「いえ、その……アリヤのことで、少し」
「アリヤが……妹がどうかしたんですか？」
「昨日のことなんですが。村の子供たちを相手にした時と、いつもの彼女の様子が、違ったようだったので」
「ああ……」
納得したように頷くレナファ。意外そうに、眉を持ち上げた。
「知らなかったんですか？」
「……何を、ですか？」
「……そう」
ふっ、と、力なく息を吐く。そのあと少し迷ったような素振りを見せたが、やがて重々しく口を開いた。

「あの子は……他人相手には本当の自分を偽っているんです」
「？……なんでまた、そんなことを」
「昨日の話、聞いてましたよね。両親がいない私たちは、村の人たちからも嫌われたら生きていけないんです」
「え……」
絶句する。
正直言って、それほど切羽詰まっているとは思えなかった。
その内心を読みとったのか、レナファが力なく笑う。
「私の狩りと、森に入って食べるものを探せば、日々の生活は送れます」
狩りの成果は安定しないが、それでも二人分の食料を確保するだけなら足りないということはまずない。すぐ近くの森は食材の宝庫だから、食うに困るということにはならない。
「普段の生活なら、ですけど。何か問題が起こったりしたら……」
その時を想像したのか、レナファの顔が歪んだ。
コウイチもようやくそのことに思い至る。いつ何時も普段通りの生活が送れるとは限らない。もし姉妹のうちどちらかが病気にかかったり、怪我をすれば、とたんに生活が立ちゆかなくなるのだ。
「あの子は幼いし、私だっていつ怪我をするかわからない……」
そうした時、誰かに助けてもらわなければならない。その時の誰かとは、すぐ近くに住む村人たちに他ならなかった。
「私は……人と話すのが苦手で。あまり人付き合いも得意じゃないんです。それで、代わりにアリヤが……」
なんとなく予想していたことを、レナファは恥じるように口にした。もちろん、狩りに出ている時間が長いということもあるだろう。
「だから、アリヤはあんな……猫をかぶるような真似を？」
レナファが頷く。
短い付き合いだが、アリヤの我の強さはコウイチも身に染みてわかっていた。
もし彼女がそれを表に出せば、誰彼と衝突するだろうことも。

「あの子は、あんなに小さいのに本心を隠して、自分を偽らなければいけないんです」

自分のふがいなさを嘆くように――レナファはぽつりと呟いた。

（……そういう、ことか）

アリヤの態度の豹変（ひょうへん）。姉妹の置かれた境遇（きょうぐう）。

それらを理解し、重く長いため息を吐く。

「なので、あの子が地の性格を見せられるなんて、あなたをよっぽど信頼していると思ってたんですけど……」

……は？

意外を通り越して、予想もしていなかったレナファの言葉に、コウイチは目を丸くした。

「いや、それは」

たまたまアリヤの本性を最初に見たからであって、信頼云々とは関係ない。

そのことを説明すると、レナファは拍子抜けしたように、

「そうなんですか？」

と、首を傾げた。

「あなたを家に泊めてるのも、そうだからだと思っていたんですが……」

「そういうわけでは、ないと思いますが。……それとは関係なく、彼女は僕を助けてくれたのではないかと」

「そう、ですか。……そうですね」

穏やかな笑みになるレナファ。

内心では、妹の優しさをほほえましく思っているのかもしれない。

同情もあったと思う。本性を見られたという弱みもあったかもしれない。だがそれでも根本的な理由は、アリヤの性格ゆえだろう。

彼女の乱暴な言葉つかいはあくまで表面的なもので、根っこはあくまでお人好しなのだ。

でなければそれほど楽な暮らしでもないのに、縁（えん）もゆかりもない他人の自分に、何日も寝食をあてがうことはない。

「――はっきり言って、あなたがうちにいることは迷惑だと思っています」

不意に投げかけられた言葉が、コウイチの心に突き刺さった。

「ですけど……アリヤが、あの子がいいと思っている間は、私もあなたがいてもいいと思っています。でも……もしあなたが妹を悲しませでもしたら――」

レナファの目つきが変わる。おそらく、狩人としての彼女の眼なのだろう。初めて会った時の、矢を向けられた時の鋭く刺さるような眼差しだった。

「その時は……力尽くでも出ていってもらいます」

歩くのがつらいようなら、待っていてもいい、と言われた。

帰りに合流するので、荷物もその時に分ければいいと。

……はっきり足手まといと言われるよりも堪えた。

――で、現在。

「……って、なんで本当に待ってるんスかあああぁー！」

カセドラの絶叫が森の奥で木霊した。

「……」

だって、はっきり迷惑だって言われたし。足手まといになってたのは事実だし。無理してついていこうとしても彼女のペースを乱すだけだし……。

二人（？）きりなので喋っても問題はないのだが、声を出す気力もない。

「それ、本当にそう思ってるんスか？」

（……）

見透かされたような問いかけに、返す言葉もない。

もっともらしい言い訳を並べつつも、自分でも本当は嫌なことから逃げ出したいからということはわかっている。

それが獲物をおいてある場所までの道のりということもあり、キツいことを言われたレナファと一緒にいるということでもあり。

重い話を聞かされた直後で、気が重くなっているということもある。実際に体感しているのは、あの姉妹にもかかわらず。

そのことが自分でもわかっているので、ますます自責と自己嫌悪の念がつのっていく。

カセドラが深々と息を吐いた。

「兄さんのダメっぷりは知ってたつもりだったッスけど……」

そう言われても、反論する気力も湧いてこない。ここで反論できるほど、顔の皮は厚くなかった。

「はあ……もういいッスよ」

呆れたと言わんばかりに、カセドラが姿を消す。

もしかすると、もう二度と目にすることはないかもしれない。そうは思いつつも、引き留める気にはなれなかった。

いや――カセドラだけではない。

ああは言っていたが、もしレナファが自分を置き去りにして帰った場合を想像してみた。

ありえない、とは言えない。

そんな事態になったら、自分は森から出ることもかなわなずに朽ち果てるだろう。じわじわと不安がこみあげてきたが、それすらも仕方ないかも、と思えてしまう。

そして、そう思ってしまう自分をコウイチが心底いやになり始めた時――

ガサ……。

それが、コウイチの前に現れた。

「……？」

レナファが戻ってきたにしては早すぎる。はじめは、森の動物か何かだろうと思っていた。

それは、間違いではない。

ただし、それはコウイチが見たことがないような生き物で――加

えて、明らかな敵意を放っていた。
「なっ……」
（いの……しし……？）
本物の猪を、目の当たりにしたことはない。今まで目にした猪は、すべてテレビを通してか、本の中で描かれたものでしかなかった。
それでも、あれが猪ではないことぐらいはわかる。
本物の猪は、あんなに大きくなかった。
本物の猪は、あんなハリネズミみたいな鬣を持っていなかった。
本物の猪は、頭に角なんか生やしていなかった。
（あれは……いったい……？）
現実の猪を倍ほどに巨大化させ、凶暴さを増したような角と鬣をその生き物は備えていた。
そしてその一本しかない角はまっすぐに――立ち尽くすコウイチへと向けられていた。
（……）
じっと角を凝視する。
あれで刺されたら、たぶん死ぬ。死体はどんなふうになるだろうか？
きっと、普通の猪に殺されるより酷いふうになるのだろうが――
（……？　……ああ、そういうことか）
なんでこんなことを悠長に考えていられるのかと思ったら、現実感がないからだ。目の前で威嚇しているのが、あんな見たことのない怪物ではなく普通の猪だったら、もっと取り乱していたかもしれない。
猪もどきが、地面を脚で掻くように土を抉っている。鼻息が荒い。地面を蹴った。高さだけでコウイチの身長ほどもある巨体が突進してくる。もし角がなくても、あんなもので体当たりされたらそれだけで死んでしまうかもしれない。
（だけど、まあ……それも……）
死ぬのは怖いが、生きていて何の役に立つのだろう――その思い

が、コウイチを動かす気力を根こそぎ奪っていた。
「何やってんスか！」
体に強い衝撃を感じて、地面を転がった。
猪もどきにはねられたわけではない。横になったコウイチの眼前に着地したのは、紫色の謎生物――カセドラだった。
「ぼうっとしてどうしたんスか、兄さん！　死ぬところだったんスよ！！」
「カセ……ドラ……？」
死ぬ……？
ぼんやりしたまま、さっきまで立っていた地面に目をやる。そこは角でえぐられ、大きく凹んでいた。
それを見て、現実に立ち返るコウイチ。
途端に恐怖が噴き出してきた。
「う……ああ……」
「呻いてないでさっさと立ち上がるッス！　早く立って逃げるッスよ！！　あんなの相手にしてらんねーッス！」
「っ……いや、それが」
「なんスか！？」
「足が……すくんで」
「～～！」
人間で言うところの地団太を踏む、の代わりだろうか。カセドラが口を大きく開閉させながら、その場でぐるぐると激しく回り始めた。
その間にも、猪もどきは向きを変えてコウイチに狙いを定める。
「……カセ、ドラ」
「今度はなんスか！？」
「君だけでも、逃げろ」
「は？」
「そして、伝えてほしい。……アリヤに、ありがとうと」
「ま、ちょっと待つッス。この場面でその台詞はＮＧって言うか…

…つーかアンタ、オイラが他の人間に見えないってこと忘れてないッスか！？」
「……あ」
そういえば。
「だったら、書き置きでも」
「そんなこと言ってる場合じゃねーッスよ！！　兄さん、後ろ後ろぉー！！」
振り向きたくはなかったが、振り向いた。ドドドド、という勢いのある足音とともに、猪もどきが突進してくる。
今度こそ、間違いなく死ぬだろう。
現実感が戻ったからだろうか。
今度は、少しだけ死にたくないと思った。
「だあぁああっ！！　もう、っとぉに世話のやける！」
視界の端で、紫色の燐光（りんこう）がきらめいた。
何が、と思うよりも先に、きれいだなと思った。
猪もどきが、甲高く鳴く。そばまで迫っていたそれが、急に向きを変えた。
勢いに乗ったまま突き進む先にあるのは、大きな岩。巨体が、ドガッという破砕音とともに停止した。
（……？）
コウイチが見つめるなか、巨体がゆっくりと横倒しになっていく。
「……なに、が」
恐る恐る近づいてみると、猪もどきの頭に生えていた角が折れていた。変化はそれだけだが、その体はぴくりとも動かない。もしかして、死んだ……のだろうか？
「はあ～」
どっと疲れたように、カセドラがふらふらと地面に着地する。その体から、燐光の残滓（ざんし）が漂っていた。
「なんとかうまくいったッスよー……」
「カセドラ……これは、君が」

「そッス」
ダルそうに体を横にしながら、カセドラが言った。
「兄さんが横によけたっていう幻覚を、あの角猪（つのじし）に叩きつけたんスよ。岩にぶつかるように仕向けたのはオイラッスけど、それで自滅してくれたのは運が良かったッス……」
角猪？　この生き物の名前だろうか？　いや、今はそんなことよりも……。
「君は……なんで、そんなことが……いったい」
「あー……言いたいことはわかるッスけど、オイラにも答えられないッスよ。こんなことができるなんて、今の今まで知らなかったんスから」
「……」
都合よすぎじゃないだろうか。
……だだ、まあ。
「ありがとう……助かった」
礼を言うと、カセドラは瞬きを一つ。そのあと得意げに頬をゆるませる。
「いやあ、お礼を言われるほどでも……って兄さん？」
なんでだろう。視界が斜めに傾いていく。
気が抜けたからだろうか。体に力が入らない。不思議と、目の前が暗くなっていった。もしかして……とは思うが――
「ちょっ！　兄さん、いくらなんでもそれは、って！　どうすりゃいいんスかオイラ！？　兄さーん！」
いくらなんでもないだろう。
こんなところで気絶なんて。それはいくら……なん、でも……情け、なさ、すぎ……きゅう。
「……」
ペシペシと顔を叩かれて目を覚ました時には、すでに空は赤く染まり始めていた。

朱色の空を背景にして、カセドラがふてくされた顔をして宙に浮いている。

（……気まずい）

助けてもらった直後に気絶とか、ありえないし……。

「カセ――」

とりあえず謝ろうと口を開くと、長い尻尾が口を塞いだ。その先端が、どこかを指さす。

「……レナファ、さん」

たどった視線の先には、しゃがんで角猪の死体を調べているレナファの姿があった。

コウイチの声に反応して、振り返る。

「……大丈夫ですか？」

「あ、はい。……あの、いつここに？」

「来たばかりです。……驚きました」

言いつつ、さっきまで見ていた角猪を見下ろす。

「これは、この森の主とも言われている角猪（つのじし）という生物です。……あなたがやったんですか？」

「ああ……いえ。その」

なんと言うするべきか。事実を話すには、カセドラのことを一から説明しなければならないし。

（……面倒くさい）

「これは……こいつが勝手に岩にぶつかって。自滅です、はい」

まるっきり嘘というわけではないが、レナファはあからさまな疑いの眼差しを向けてきた。

が、とりたてて追求しようとまではせず、視線をそっとはずす。

「……せっかくの獲物ですから。解体したいので、手伝ってもらえますか？」

頷く以外に、やりようがなかった。

3．雨降ってなんとか（1）

……どうもおかしなことになった気がする。

日課の薪割りをこなしながら、コウイチは内心で首を傾げていた。

レナファと森に入ってからすでに五日が経っている。よほど鈍い者でも、身の回りの変化を察するには十分すぎる時間だ。

今もコウイチは視線を感じ、うろんげに顔を上げた。

（……また）

遠巻きにこっちを見ている子供たちと目が合う。アリヤをいじめていた子供も混ざっているから、村の子供たちなのだろう。

ヨソ者の自分が珍しくて、一目見にきた、というのならわかるのだが。

「うわっ、こっち見た」

「逃げろ！」

子供たちはコウイチが見ていることに気づくと、わっと蜘蛛（くも）の子を散らすように逃げ出していった。

「……なぜ」

少なくともここに来る前に、子供に今みたいな反応をされたことはない。

たしかにここでは風変わりな容姿をしているのだろうが……そんなに怖い顔に見えるのだろうか。

「なに言ってんスか」

微妙にへこんでいると、カセドラに翼でツッコミを入れられた。

バシッ、といい音がして、コウイチはうずくまる。

「……痛い」

「そりゃ痛くなるように叩いたッスからね」

……だから、その翼に何の意味があるのかと。

あれか？　ひょっとしてハリセンの代わりなのか？

「な、なんスか急に怖い顔をして……。ともかく、別にあの子供た

ちは兄さんの顔が怖いってわけじゃないッスよ。つーか昨日説明したじゃないッスか」

「……あれは、何かの間違いではなくて」

「残念ながら事実ッスよ。実際に話しているのを聞いてきたんスから」

コウイチは頭を抱えてうずくまりたくなった。

きっかけは、レナファと一緒に角猪（つのじし）を運ぶところを村人に見られたことだったらしい。

森の主と聞いたが、実際のところあの巨大な猪もどきは近隣では有名な存在だったそうだ。

――凶暴で獰猛（どうもう）。巨体だから力もあるし、肉が厚いので矢や槍も致命傷になりにくい。弱点として名前の由来になった角があげられるが、それを狙うということは角猪の頭に近づかなければならないので危険きわまりない。

反面、その毛皮や角は貴重で、一頭しとめればしばらくは遊んでくらせるほど高値で取引されるほどだとのこと。

ただし、返り討ちにあって命を落とす可能性が高いので好んで狙う猟師はいない。並の猟師では、その姿を見かけたら裸足で逃げ出すほどである。

そんなとんでもない存在が、ヨソ者の男が来た直後に狩られた――結果、何をどう間違ったのかというと、

「兄さんが凄腕（すごうで）の猟師だなんて……ぷぷっ、勘違いにもほどがあるッスよねー」

まことに遺憾（いかん）ながら、そういう噂が広がっているらしい。というか笑うな。

ちなみに情報源が村人たちの会話である。カセドラは偶然、耳（……どこだ？）に入ったというが、相手は姿の見えない自称精霊。盗み聞きなど、いくらでもしたい放題なのだろう。

――それはさておき。

そのせいでここ数日、アリヤの機嫌はすこぶる悪い。姉をさしおいて、コウイチが猟師として腕が立つと見られているのが気に入らないらしい。

レナファは相変わらずよそよそしい態度だが、さらに距離をおいたような感じになったし。

その姉妹はといえば、薪を食材と交換してもらいに二人そろって村にでかけていた。

一人残されたコウイチは、斧を置いてため息。空模様は快晴なのに、心の中は曇天気味である。

「……帰りたい」

「兄さんの故郷にッスか？　でも行き方がわからないんじゃ？」

「……」

カセドラに言われて、コウイチはうつむいた。元の場所に帰る方法はわからず、そもそもここがどこなのかもわからず、居候先の姉妹とも今や微妙な関係。

ここまでくると、もう何もする気力もなくなる。

……それは元から、という説もあるが、それは気にしないことにして。

「ちょっと兄さん、また鬱モードに入ってるッスよ」

……なんだろう。呼吸をするのもめんどくさいようなこの感じは。

……いっそ、植物になりたい。そこらへんの雑草とかでもいいから……一歩も動かずに、光合成だけして生きていけるような、そんな存在に……。

「兄さん……？」

……あー……なんか……もう――

「……てい！」

ビシッ！

「……はっ」

「もう一発いっとくッスか？」

「……いや」

危ない危ない。もう少しで死にたくなるところだった。カセドラのツッコミに感謝しつつ、斧を持ちあげる。
体を動かせば、少しは気がまぎれるかもしれない。まぎれたらいいなと思いながら。

「おい」
声をかけられたのは、無心に薪割りをしている時だった。
コウイチが振り向くと、若い男と、初老の男がすぐ近くに立っていた。
「おまえが角猪を狩ったというヨソ者か？」
老人の声に合わせるように、若い男のほうが値踏みするような目を向けてくる。お世辞にも好意的とは思えない目つきである。
「へっ、とてもそうは見えねえな」
「……」
「なんスか、こいつら」
（さあ……）
二人とも初めて見る顔だ。が、どうやら向こうはこっちのことを知っているらしい。
「あの、あなたたちは」
「知らんのか？　わしは村の長をしておる、ゼフと言う。こいつは――」
と、老人のほうが若い男を指さす。
「倅だ」
「……はあ」
胸を張って言われても。初めて会ったんだから、知らないのは当たり前だし。
気のない返事が勘にさわったのか、爺さんが眉をピクリと持ち上げた。
……なんというか。
取っつきづらいというか、偉ぶっているというか、少なくともこ

っちから声をかけたいとは思えないような爺さんである。
（……って、あれ？）
「村長……？」
「あれッスよ。アリヤの話に出てきた」
ああ、あの姉妹を嫌っているとかいう……なるほど、それならこの険のある態度もなんとなく納得がいく。姉妹の家にお世話になっているヨソ者――嫌われこそすれ、好かれる要素はないだろう。
「それで……僕に、なにか」
あんまり長く話したくないなー、というこっちの心情を汲んだわけではないだろうが、
「前置きはなしだ。おまえ、この村の猟師となれ」
爺さんはいきなり本題を切り出してきた。
「……は？」
「おまえの腕を買ってやると言っておるのだ」
……いや、いやいやいや。いきなり言われても。
これは……スカウト、なのだろうか？　とすると、あのろくでもない噂を真に受けて？　それにしても唐突すぎて、ピンとこない。
「いえ、あの」
「もし受けるなら、この家をくれてやる。悪い話ではなかろう？」
そう言って顎をしゃくった先は、アリヤのレナファの家があった。
「ですが、ここは」
「何か問題でもあるか？」
「……もう住人がいるのでは」
「追い出せばすむ話だ」
……え？
ちょっと待て。彼女たちを、追い出す？
「……なに言ってんスか、このジジイ」
カセドラが不機嫌そうな声を出す。コウイチも唖然とゼフを凝視した。
「不思議に思うこともあるまい？　未熟な猟師の代わりに、腕の立

つ猟師を迎え入れるだけだ」
　子供にでもわかるような理屈を話す口調だった。
「鹿や兎ぐらいしか狩れん猟師などいらん。ましてやわしに従順でない者などな」
「……」
　そりゃまあこんな爺さんを相手にしたら、誰だって反抗的になるだろうが。それにしても、それだけで追い出すとか……いくらなんでも短絡すぎだろう。
　そもそも自分が本当に凄腕の猟師とやらだったとしても、レナファと入れ替えるとか意味が分からない。単純に猟師を一人増やせばいいのではと思ったのだが。
「父親ぐらい腕が立つならまだマシだったのだがな。言うことをきかんのはともかく、あやつは腕のたつ猟師だった。それに比べてあの娘は……」
「二人の、父親を知っているのですか？」
　なんだか愚痴が始まりそうでげんなりしたのも一瞬、ゼフの口から飛び出た単語に、コウイチは思わず食いついた。ゼフは眉間にしわを寄せて、面白くなさそうな顔をした。
「知っとるもなにも、この村であそこまでわしの言うことを聞かなんだ男は奴ぐらいだ。一度なんぞ、罠にかかっていた雌の獲物を、孕んでいたという理由で逃しおったのだぞ！　あやつほど勝手な男は、他には知らん」
「このジジイもずいぶん自分勝手な気がするんスけど」
　カセドラの意見に内心で頷きつつも、コウイチはゼフが姉妹を嫌う理由がわかった気がした。
（……なるほど）
　一方的に話を聞いただけだが、この爺さんが姉妹の父親を嫌っていたことはわかった。となると、その憎しみがそのまま娘に……ということなのだろうか。
「そんな奴ももう死んだ。惜しいとは思わなんだし、むしろせいせ

いしたがな。これで娘のほうが聞き分けがいいのならよかったが、そこは親子よ。いらんところばかり引き継いでおる。今までは見逃してきたが、これからはそうはいかん。なにせちょうど代わりが来たからな」

「代わり、と言うと」

「おまえのことに決まっているだろう。もう役立たずに用はない。半端な猟しかできん姉も、媚びを売るしか能のない妹もだ」

言い終えると、さきほどの問いの答えをうながすような眼差しを向けてきた。

「……」

沈黙の最中――コウイチは口を開かないかわりに、かすかな苛立ちを覚えていた。

自分のことをバカにされて怒ったことはない。そういうことがあれば、まず自分に原因があるのでは、と考えるような性質だった。だが今、蔑まれているのは自分ではない。アリヤとレナファの姉妹だ。自分なんかよりよっぽど立派に、協力しあって生きてきた二人だ。

この爺さんがどれだけ偉いのか知らないが。

あんたはあの二人をバカにできるほど、出来た人間なのか。

「そうは見えないッスよね」

（カセドラ……）

「どうするんスか？　まさか引き受けるとか……」

それはない。

そもそもが誤解から始まった話だ。自分には狩猟の技術も経験もない。

だがそれを正直に言えば、どうなるだろう？　……嫌な想像しか思い浮かばなかった。

「もし、仮に――」

コウイチはささくれだった心を落ち着かせるように、ゆっくりと口を開いた。

「あなたの言うとおり、僕が腕の立つ猟師だとしても、ここに永住する気はない」
「なに？」
ゼフが眉を持ち上げる。答えが意外と言うよりも、断られるのに慣れていないような反応だった。
「何が不満だ。住む家も与えると言っておるのに」
「そういう問題ではなく……それに。この家は今住んでいる姉妹のものです」
「だから追い出すと言っておろう」
本来のこの家の持ち主が誰に当たるのかは知らないが、あまりにも姉妹をおざなりにした物言いに苛立ちが再燃する。
「……つまり、もしもっと腕が立つ猟師が来れば、その時は自分が追い出される、ということになるのでは」
「ふむ……そうなるな」
取り繕うこともなく、ゼフはあっさりと頷いた。
「そんなことを言われて。わかりましたと話を受ける気にはなれない」
「そんなもの、追い出されることのないよう腕を磨けばいいだけだろう。あとはわしの言うことを聞いていれば、多少の融通はしてやらんでもない」
……なるほど。
今はっきりとわかった。この爺さんは、自分とは正反対のタイプの人間だ。
自分の言動が、他人にどういった影響を与えるか。どう思われるかなど考えない。他人の顔色をうかがって、結局は意見を言えないことも多い自分とは、まるで逆だ。
「羨ましいんスか？」
（……いや）
自分に問題があるとは思わない。だから、省みることもない。そうした生き方はできないし、したいとも思わなかった。

「どうしても断るというのなら、村にいさせるわけにはいかん。出ていってもらうぞ。それが嫌だと言うなら、この村の――いや、わしのために働け」

そのために連れてきたのだろう。今まで黙って後ろに立っていたゼフの息子が、ずいと前にでる。

頭一つ分は背が高く、肩幅も広い。いかにも荒事慣れしてそうで、ガチンコ勝負なら絶対に勝てなさそうな相手である。

普段なら親子そろって絶対に近づかない人種だが、今はそうも言ってられない。

とはいえ、この相手にはいくら口で言っても通じない。そもそも聞く耳を持っていないと思えた。

――それなら。

（カセドラ）

「なんスか？」

（手伝ってほしい）

「……へ？」

言いおき、苛立ったように答えを待っているゼフを真っ直ぐに見据える。

後はカセドラが、自分の狙いをくみ取り、動いてくれることを期待して。

「――それ以上、近づかない方がいい」

言葉は、男に向けて発したものだった。

「なんだ、ビビったのかよ？」

コウイチは黙って首を振る。

「それ以上近づけば、森の精霊が黙っていない」

「……へ？　森の……なんだって？」

困惑した男が目を丸くする。

「……ふん」

ゼフがさもくだらないとばかりに鼻を鳴らした。

「猟師というのは、信心深くなければなれんのか？」

「あなたは、森や動物たちのことを、ないがしろにし過ぎた」
「それの何が悪いと言うのだ」
「人と森には、それぞれの領分がある。それを踏み越えれば、待っているのは森の報復だ」
「っ……いい加減にせんか！」
しびれをきらしたゼフが一喝する。
いつもだったら怯むところだが。不思議と、そうはならなかった。
うまくいく自信はあまりない。そもそも自信というものをあまり持ったことがない。
だというのに、今は落ち着いている。
なぜか――考えるまでもない。自棄になっているだけだ。
どうせ生きている意味も見いだせない無気力人間。追い出されて野垂れ死になっても、ここでは誰かに悲しられることもない。失敗して元々、うまくいかなくて当たり前。そう思えばこそ、平然と思いつきのでたらめを口にすることに抵抗はなかった。
「……どうやらおまえもわしの言うことを聞く気はないようだな。フンッ、時間の無駄だったか」
吐き捨て、背中を向けたその体が、急によろめいた。
「親父？」
「……なんでもない！　少しふらついただけ――ガハッ！」
顔面に何かをぶつけられたように、ゼフが仰向けに倒れる。
「な、何が……？」
「……何やってんだ、親父？」
「な、何かいる！　何かがわしにぶつかってきたぞ！」
目をむいて叫ぶゼフが、何もないように見える空間を指さした。
「グッ――」
ゼフが腹を押さえてうずくまる。苦しそうにしているゼフを見て、男が後ずさる。
「な、なんだってんだ……」
男の声は、恐怖で震えていた。

二人が理解不能の現状にさらされている一方、コウイチにだけは見えていた。

ゼフに体当たりをして転ばせてから、その腹の上に思い切り飛び乗ったカセドラの丸い体を。

今もカセドラは性格の悪そうな笑みを浮かべて、宙に浮かびながら二人の混乱した様子を眺めている。

そんな事実を露(つゆ)とも漏らさず、コウイチは重々しく口を開いた。

「言ったはずだ。森の精霊が、黙っていないと」

「そんなものがいるわギャ！」

顔面を地面に打ちつけ、ゼフが無様な悲鳴をあげる。その後頭部にはカセドラが乗っていた。

「ま、まじかよ……ヒッ！」

コウイチが視線を向けると、及び腰になった男は慌てて後ずさる。

「今すぐ立ち去るなら、これ以上の害はない。まだやると言うのなら……」

「い、言うのなら？」

「……命の保証は、できない」

「う……うわぁあああ！！」

「なっ！？　ま、待てっ。待たんか！」

父親を置きざりにして男が逃げ出すと、ゼフもよろめきながら慌ててその後を追った。

わき目もふらない見事な逃げ足に、カセドラがけたけたと笑い声をあげる。

コウイチは深々とため息をついてから、脇の下がじっとりと濡れていることに気づいた。しっかり緊張はしていたらしい。

「森の精霊ッスか。当たらずとも遠からず、ってところッスかね」

「カセドラ……ありが――」

礼を言おうとした口を、カセドラの尻尾が塞いだ。

「あのジジイが気に入らないのはオイラも同じだったッスからね。けど兄さんがあんなふうにハッタリかませるなんて、意外だったッ

スよ」
「それは……自分でも、驚いている」
なんだかんだと理由をつけつつも、振り返ってみれば本当に自分がしたことが信じられない。たぶん、もう一度やれと言われても無理だろう。
「これで、あのジジイはしばらく来ないんじゃないスかね」
そうだといいが。
頷きかけたコウイチは、カセドラの背後を見てぎくりと顔を強ばらせた。
（……いつの間に）
そこには、レナファが立っていた。
そばにアリヤの姿はない。手ぶらなのを見ると、おそらく残りの薪を取りに来たのだろうが――
（聞かれてた……？）
カセドラとの会話を、だったら問題はない。せいぜい、独り言をぶつぶつ言う奴とかいうふうに思われるぐらいだ。
だがもし、ゼフとのやりとりを聞かれていたら。
詰め寄られて質問責めにされる、不気味なものを見るような目で見られる――などというコウイチの心配をよそに、レナファは何事もなかったかのように残りの薪をまとめ始めた。
「あ……手伝います」
ほっと息を吐きながら、割ったばかりで散乱している薪を束ね、レナファは差し出し、

パシ――

薪が、地面に落ちてばらばらになった。
手を払われた状態で、コウイチは硬直する。
「なんで――」
顔を伏せているせいで、表情は読みとれない。ただ、レナファの

漏らしたその声が、抑えきれない激情を押し込めているようで。
「……え」
レナファは手早く薪を束ねると、勢いよく立ち上がった。コウイチから目をそらし、早足でその場から歩き去る。
その背中が、コウイチには話しかけられるのを拒絶しているように見えた。
――結局、その日はレナファと目を合わせることもなかった。

「……はぁ」
翌日、地面についた斧に体を預けつつ、コウイチはうなだれていた。
レナファに邪険にされたことで、気分は昨日からずっと沈み気味である。
今までも友好的とはいえなかったが、それでもあそこまで直接的な行為に出られたのは初めてのことである。
（やっぱり……聞いてたんだろうか……？）
そのレナファといえば、今日から狩りに出てしまったので、話をすることも出来ない。まるで避けられているようなタイミングだが、実際に避けられていると見るべきだろう。
「……はぁ」
昨日から、気がつけば溜め息ばかりついている気がする。
気もそぞろなので、いつもの仕事もはかどらない。もう昼を回っているというのに、昨日の半分も進んでいなかった。
「コウイチ」
「あ、いや、これは、別にサボっていたわけではなく」
いきなりアリヤに声をかけられ、コウイチはあたふたと言い訳をし――途中で言葉を詰まらせた。
アリヤの表情が、目に見えて暗い。
ちらちらと、森のほうを気にしているように見えた。
「なにか、気になることでも」

「姉さんが……戻ってこないの」
その声は、隠しきれない不安に震えていた。

3．雨降ってなんとか（2）

――姉さんが、戻ってこないの。

アリヤの言葉の意味が、最初コウイチにはわからなかった。

一度狩りに出たら数日は戻ってこなくても当たり前というのは、ほんの数日前に聞いた話だ。

レナファが狩りに出たのは今日。なら、あと数日は戻ってこなくても不思議はない。

「違うの」

コウイチの訝しげな表情と見て、アリヤが小さく頭を振る。

持ち上げて見せたのは、コウイチも使ったことのある水を入れて持ち運ぶための革袋だった。

「……これは」

「姉さんがいつも使っている水袋。狩りに出かける時は、いつも持っていったのに……」

広い森の中、水分補給なら手段はいくらでもあるだろうが、それでもわざわざ置いていったりするものではない。

アリヤの話では、今までも何度か忘れ物をしたことはあったらしい。そして、今までは気づいたらすぐに戻ってきていたことも。

もうすでに太陽は空高く昇っている。

いくら節約して飲まずにいたとしても、すでにレナファも気づいているはず。なら戻ってきていてもおかしくはないのだが。

気になったのは、別のことだった。

「その……レナファ、さんのことなのだが。何かいつもと変わったところとかは、なかっただろうか」

「変わったこと？　……そういえば、いつもだったら狩りに出るときは前日までに言っていくのに、今回はいきなり今日になって行くって言い出したのが気になったけど……」

眉をひそめてのアリヤの問いに、コウイチは顔をひきつらせる。

原因は、ほぼ間違いなく昨日の一件だろう。
自分と一緒にいるのがそれほどイヤだったのか、それとも他の理由があるのか――
「もしかして、何か知ってる？」
「……いや」
昨日のことは、あまり話したいことではない。教えてどうなるものでもない。問題は、これからどうするか、ということなのだが。

「本当に行く気？」
アリヤの問いに、ただ頷く。
レナファを探しに行くと言ったのは、責任を感じたからではなく。ただ、昨日のことを黙ったままアリヤと二人でいることに重圧を感じたからだ。
「ならあたしも――」
詰め寄るアリヤに、首を振ってみせる。
「行き違いになったら、いけない」
「でも……」
「もしかしたら、もう少しすれば戻ってくるかもしれない。その時、誰もいなかったら彼女も心配する。……だから、ここで待っていてほしい」
「……ん。わかった」
渋々（しぶしぶ）と、それでも自身を納得させるようにアリヤが頷く。
そしてちょっと待って、と言い残し、家の中から二つの皮袋を取ってきた。
「……これは？」
「水と干し肉。必要でしょ？」
ん、と不愛想に押しつけてくる。
お礼を言いかけ、アリヤの目に隠しきれない不安の色が混ざっていることに気づいた。発作的に、自分のことしか考えていない自分自身を殴りたくなった。

その反動だろうか。
「っ……姉さんは、僕が連れて帰る」
気付けばそんな言葉が、口から飛び出していた。
驚いて目を丸くしているアリヤに、おどおどと付け加える。
「あ、いや、必ず、とは言えないけど、できれば……」
「兄さん兄さん、そこは必ず、って言い切るところッスよ」
カセドラの突っ込みは無視するとして。
慣れないことを言ったせいか、顔が熱い。落ち着かずに目を泳がせた。
そんなはたから見れば滑稽な様子に、ずっと強ばらせていた表情を崩してアリヤが笑う。
「そんなに気負わなくていいわよ。それよりもあんただって迷っちゃうかもしれないんだから。危ないと思ったらすぐに戻ってきなさいよ」
「いや、だが」
「……コウイチ」
言い聞かすような言葉の中に、わずかに心細さを感じたのは錯覚だと言い聞かせた。人から頼られるような、そんな立派な人間になった覚えはなかったから。

すでに見飽きた感のある森の中。といっても、いつも立ち入るのは外周部だけで、奥深くに入ったのはこの場所で目を覚ました時だけだ。
同じような風景が続く森の中は、焦燥感をひたすら煽りたてる。
「……」
早く。
「兄さん」
早く。
「ちょっと、兄さん？」
何が起こったと決まったわけでもないのに、焦りばかりがつのっ

ていく。
――レナファは、無事だろうか？
最初はそれほど深刻に考えてもいなかったが、歩き始めてから芽生えた不安は変わらない風景に圧迫感を感じているせいだろうか、少しずつ大きくなっていった。
単に森の中で迷子になっているならまだいいが、レナファにとっては知り尽くした場所だろう。それは考えにくい。なら、彼女の身に何かが起こったと考えるべきだった。
「兄さーん、無視するなんてひどいッスよー」
「っ……！」
ぴたりと足を止め、コウイチはさっきから周りを飛び回っていたカセドラに険しい眼差しを向けた。
「うわ、ガラの悪い目つきッスねー」
「言いたいことが、あるなら」
「焦ってもいいことなんかないッスよ」
あっさりとした物言いがなんだか苛立たしくて、奥歯を噛みしめた。直接的な行動に移さないように、顔を伏せて拳を握る。
そんなことは、わかっているのだ。だが、それでも。自分のせいではないと思いながらも。自分が来なければ。そういった思いが、さっきから脳裏をかけ巡っている。
「なに考えているかだいたいわかるッスけどねー、それをいま考えても意味ないッスよ？」
「っ……！」
だから、そんなことはわかっていると――
頭の中が真っ白になるような激情に突き動かされて、コウイチは勢いよく顔を上げた。
直後、目を丸くした。
「……あへ？　おほひほふはひっふは？」
「……いや。いったい何を」
逆さになったカセドラは、口を横に引っ張っていた翼を離すと、

くるりと体を反転させる。
「兄さんが変に焦っていたみたいなんで、落ち着いてもらおうと。で、おもしろくなかったすか？」
あっけらかんとカセドラが言う。
ガス抜きをされたように頭が冷え、がっくりと項垂れた。自分のしようとしていたことが、たんなる八つ当たりだったと気づかされたからだ。
「じゃあさくさく行くッスよ～。案内はオイラに任せるっす！」
（案内……？　……っ！）
言葉の意味が一瞬わからなかったのは、自分自身に嫌気がさしていたから。気づいた時にはカセドラに詰め寄っていた。
「レナファがどこにいるか、わかるのか!?」
「この森でのことだったら、だいたいのことならお見通しッス」
ふんぞり返るカセドラ。
（……そういえば）
最初に会ったときは、外まで案内してもらった。カセドラが自分よりもこの森に詳しいのは間違いない。最初から頼ればよかったのだ。
そんなことも思いつかなかった。それほど自分は、焦っていたのか。
あまりの馬鹿馬鹿しさに笑いたくなったが、その衝動はなんとかこらえた。
「なら、カセドラ。案内を……頼む」
「ういッス。じゃ急ぎで行くッスから、遅れないようについてくるッスよ」
言いつつもすでに先を行くカセドラ。
コウイチは一度脚を張ると、気合いを入れてその後を追った。

◆

枝葉が色濃く茂り、昼間だというのに日の明かりの多くを妨げている。

むせかえるような木々の匂い。いつもだったら落ち着くはずのそれらは、今の彼女にとって知覚する余裕もなかった。

「っ……！」

右の足首が痛む。軽く捻っただけのはずが、その後の無理がたたってひどく悪化していた。

それでも、と老木の幹に体を預けながら思う。

それでも、死なずにすんでよかった――

いつもだったら、見つけても身を潜めてやり過ごす角猪（つのじし）を獲物と見定めたのは単なる気まぐれではない。

それはコウイチと村に運んだ角猪に比べれば、たいぶ体も小さかった。まだ成長途中の子供だったのかもしれない。

はらんでいる雌（めす）と子は狩ってはならない――それは父から受け継いだ教えだったが、今ではすっかり自分にも根付いているはずだった。

それを破ってまで行った狩りは――言い訳のしようもなく失敗した。

放った矢は初めて狩りをした時のように、無駄に力み、急所を外した。

その後、怒り狂った角猪に追い立てられることになった。

「っ……」

体を抱きすくめる。はっきりとした殺意を感じた体が恐怖から立ち直っておらず、震えていた。

今までは、狙われれば逃げるような獲物ばかりだった。逆上し、殺意を向けてこられたのは初めてだった。

それでも生き延びられたのは、運がよかったからにすぎない。代償も、転んで痛めた足だけ、という安いものだった。

死んでもおかしくなかったのだ。運がよかった――

安堵の溜め息を吐くと、今度はろくに歩けもしない状況で一人で

いることへの不安がこみ上げてくる。
（……アリヤ）
自分にはもったいないと思えるほど、しっかり者の妹。抱きしめて、その温もりを感じたい。
「……っ」
ここでは叶えようもない望みに、唇を噛みしめる。
ただ、二人で平穏に暮らせればそれでよかった。
昨日、偶然耳にした会話を振り返る。
村長に嫌われているのは知っていた。それでもまさか、追い出されるほどとまでは思ってもいなかった。
あの話を聞かなければ、角猪を狩ろうなど思いもしなかっただろう。そして、今も一人で動けなくなっていることもなかったはずだ。
「……」
その発端となったある人物のことを思い浮かべると、胸中になんともいえない感情が沸き起こってくるのを感じた。
大人しそうで、どこか幼い感じのある、自分と同じ年代のどこにでもいる男性。
彼がいなければ、村長も自分たちを追い出そうとは思わなかったに違いない。
同時に、昨日の会話の流れでわからないところもあったが、それでも彼が追い出されようとしている自分たちを庇おうとしてくれたことも知っている。
（悪い人じゃ、ない……）
そう思うのだが、いなければよかったのにと思わずにはいられない自分がいる。そして、そんな自分に嫌気がさす。
それでも、いなければよかったのにと思わずにはいられなかった。
相反する感情がぶつかり合い、心を乱し――それでも狩人として磨かれた感覚は、近づく何かの気配を見逃しはしなかった。
「……いた」
聞き覚えのある、ほっとしたような声。まさかと思って顔を上げ

ると、今もっとも見たくない顔が目に入る。
「なんで……？」
汗みずくで、肩で息をしているコウイチがそこにいた。

◆

ゼーハーゼーハーと、まるでフルマラソンを走りきった後のランナーのように息を荒げながら、コウイチは近くの木に寄りかかった。
驚いた顔のレナファを見て、安堵で表情をゆるめる。自信満々で先を行くカセドラを疑ったわけではなく、先に自分の体力が尽きるかもといった心配が杞憂に終わったからだった。
（ここに来て、いくらか体力がついたかもと思っていたが……）
思っただけで気のせいだったらしい。
それはさておき――
「なんで、ここに……？」
「いえ、その……アリヤから、あなたが水を忘れたと」
言われて、レナファが腰のあたりをまさぐった。
（……もしかして、気付いてなかった？）
だとしたら、よほど何か別のことに気を取られていたのだろうか。
「それで、私を探しに……？」
「ええ――あの……もしかして、足が？」
横向きに座っているレナファの、むき出しの足首がひどく腫れていた。
骨折か、捻挫か。わからないが、自力で歩けるような状態ではないように思えた。
「……とにかく、帰りましょう」
言いながら、肩を貸すつもりで手を差し伸べる。来た時よりもはるかに疲れるだろうが、それ以外に方法は思いつかないので仕方ない。
――が。

「……あなたにだけは、助けられたくありません」
「え……」
脇を向いたレナファの硬質な声に、コウイチはその場に固まった。
アナタニダケハ、タスケラレタクアリマセン？
……ああ、あれか。ようは断られたのか。もしかしたらと思ったが、ここまで嫌われているとは思わなかった。にしてもこんな状況でも断るって。いったいどこまで嫌われているのだろうか僕は。きっと彼女から見たら僕なんて毛虫みたいな存在なんだろうな。ならここは生きていてごめんなさいとでも謝るべきだろうか。いや、彼女からしてみたら僕の声も聞きたくないわけで――
「あー……兄さん。気持ちはわかるッスけど、今はほら、そんな場合じゃ……」
さすがに同情が込もったカセドラの声で、はたと我に返る。
……ああ、そうだった。へこむのは後でもできる。
崩れ落ちそうだった体を奮い立たせ、それでもぎこちない動きでレナファの腕をつかむ。
「何を……！」
抵抗されるが、無視。底辺まで嫌われていると思えば、これ以上嫌われる心配もないわけで。
とりあえず無理矢理にでも引き起こして、連れ帰ろう――そう決意したのだが、ここに来るまでの道のりで溜まった疲労は、思っていた以上のものがあった。
「あ――」
「え――」
踏ん張っていた脚からがくりと力が抜け、コウイチの体が斜めに傾く。必然的に、その影響はレナファにも伝わった。
倒れる――そう思った瞬間、コウイチは体を捻った。
とさ、と軽い音を立てて、コウイチは地面に横倒れになる。直後、胸のあたりに衝撃を感じた。
「ゴ……ホッ……！」

むせかえりながらも視線を下げると、そこには自分を下敷きにして倒れたレナファの姿があった。

とりあえずは、姉妹そろって組み伏せる、という誤解に満ち溢れた状況は避けられたらしい。

「っ……！」

身をよじるレナファ。下手に動くこともできず、コウイチはレナファがどいてくれるのを待っていたのだが、すぐに異変に気づいた。

「い……た……！」

「レナファ……さん……？」

額に脂汗を浮かせて、苦悶の表情になっているレナファを見て、コウイチは慌てて体を起こした。

レナファが体を丸めて、くじいた足を押さえている。倒れた時に、さらに痛めたらしい。

「す、すいません……！」

焦りながら、慌てて頭を下げるコウイチ。助けるつもりが、結局は状況を悪化させてしまった。

ああ、なんでこんな――と自分の要領の悪さに嫌気がさしたのもつかの間――

「ッ……ければ……」

「え……？　あの、なんて……」

「あなたが……来なければ……こんなことに……」

「――」

涙をこぼしつつのレナファの言葉に、コウイチは呆然と立ち尽くした。

空気みたいだ、とは言われたことがある。それは、絶対に必要というわけではなく、いてもいなくても関係ない、という意味で。

だから、今みたいにはっきりと存在を拒絶されたことはあまりなかった。

――自己嫌悪にまみれていた感情が、すっと冷めた。頭の中が切り替わるようなこの感覚には覚えがある。

本当にイヤなことが起こった時、どうしようもなく追いつめられた時の自己防衛手段。

――感情の切り離し。

テレビの中の物語を見るのと同じように、目の前の出来事を自分とは関係ないと思いこむ。早い話が現実逃避。そして忘れるまで意識の隅に追いやる。そうして今まで乗り切ってきた。

だが――

黙っていれば、ただそこにいて時間が過ぎるのを待っていれば、今まではどうにかなった。

今は？　……違う。黙っていても、誰も助けてくれない。なら――どうする？

一瞬、本当にこのまま帰ってやろうかと思ったが、そう思った瞬間に脳裏をよぎったのは、アリヤと交わした冗談のような口約束。

「……」

声も出さず、表情も変えないまま、レナファを引き起こす。苦痛にあえぐ声はあえて無視した。そのまま背負う。嫌がられたが、その抵抗はさっきまでと比べてごく儚（はかな）いものだった。

「……い……やぁ……」

弱々しいその声も、気にならない。気にしない。そう思いこむ。

それでも――

「すぐには……無理、ですが」

口が勝手に言葉を紡いだのは、抑えようのない罪悪感があったからかもしれない。

「できるだけ近いうちに……あの家を……出ていきます、から」

「……え」

抵抗が、止んだ。じっとこちらの言葉に耳を傾けるような息づかい。

「ですから、今は。……アリヤのところに、帰ることだけを、考えてください」

そこから先は、ただ歩くだけ。人一人を背負って帰るのはとても

辛く、一度でも足を止めればもう歩けなくと思ったから。
だから途中で、
「しょうがないッスね～」
とかボヤくような声がして急に負荷が軽くなったこととか、
「なんで……」
と、泣きそうな声の呟きが背中から聞こえても、その意味を聞く余裕はまるでなかった。

――なんとか無事に帰り着いてからのことは、あまり憶えていない。
レナファの胸に顔をうずめて肩を震わせるアリヤ、という光景を目にした後、なぜか家の壁に座り込んでいるところまで記憶が飛んでいた。
そのままずるずると横倒れになる。疲れきった体はもう指一本動かせなかった。動かす気にもなれない。
それでも、心は満ち足りたように暖かかった。他人のことでこんな気持ちになるのは久しぶりな気がして。
「本当に……よか……た……」
途切れ途切れに呟きながら、ゆっくりと目を閉じる。
「お疲れさまッス。ま、兄さんにしては、よくやったほうじゃないッスかね」
カセドラのそんなどこかえらそうな声が聞こえた気がした。

3．雨降ってなんとか（3）

「――て」

温もりの中――夢も見ることなく熟睡していたコウイチは、慈しむような声を聞いた気がした。

ゆさゆさ、と体が揺すられる。

「――イチ」

さっきよりも鮮明だが、それでもまだ厚い膜を通したように聞こえるその声には覚えがある。

（……ア……リヤ……？）

ゆさゆさゆさ、といくらか激しさを増した揺さぶり。それでもまだ、眠りの淵から完全に引き離すほどのものでもない。

いや、むしろ――

（なんか……気持ちいい、かも……）

ハンモックの上で揺られるような、そんな気持ちよさが目を覚ましかけたコウイチの意識を再び眠りへ誘おうとしている。

「――イチ、コウイチっ」

少しずつ苛立ちが増してきている声も、今となっては子守歌のようで――

「アリヤ……」

「あ、起きたの？」

「……おやすみ」

そう声に出したとたん、コウイチの意識は夢の世界へと――

「ッ……起きろ、つってんのよ！！」

――ゴィン。

旅立つ寸前で、強烈な衝撃に見舞われることになった。

「……痛い」

「痛い、じゃないわよ。いつまで寝てんの？」

ぷりぷりと怒りをあらわにするアリヤの前で、うずくまりながら額を抱える。頭がジイィン、と痺れ、視界には星が飛んでいた。
「な、にを」
「別に大したことしてないわよ。ただ気持ちよさそーに寝てるあんたの頭めがけて膝を落としただけ」
「……」
いやいやいや、それは十分に大したことなのではないだろうか。
抗議の眼差しを向ける間もなく、アリヤはフン、と鼻を鳴らすと、
「さっさと水汲み行ってきてよね」
それだけ言って出ていってしまった。
(……まあ)
どうやら自分は寝坊したようだし、多少やられ過ぎの感はあるとはいえ、それだったら怒られるのも当たり前かもしれない。
気を取り直し、体を起こそうとする。
「……っ!!」
直後、全身を襲った衝撃に、コウイチは目を見開いた。
(こ、これは……)
脚といわず腕といわず、全身がひきつったような痛みを訴えてくる。体を起こす、そんな日常的な動作をしただけだというのに。
「な……何が……」
痛みに襲われながらも、コウイチはその原因を探り——思い出した。
(そういえば昨日、歩けなくなったレナファを背負ってここまで……)
思い出すと同時に、疑念も沸き上がってきた。あれは、夢だったのではないだろうかと。あんなことが自分にできるのだろうかと。
「まーだ寝ぼけてるんスか?」
聞き慣れた声に振り返る。
カセドラが、呆れと苦笑の入り交じった表情を浮かべていた。
「カセドラ、昨日のあれは」

「夢じゃないッスよ。ちょっと周りを見てみればすぐわかると思うッスけど」

言われて視線を周囲に巡らせ、すぐに違和感に気づいた。

（……あれ？）

アリヤたちが使っている寝台の上、そこには毎夜、自分が使っていたはずのボロの毛布が畳まれている。

そして、アリヤたちが使っていた毛布はといえば、

「あ――」

視線を下げた床の一ヶ所、そこには広がっているさっきまで使っていたはずの毛布には、穴一つ空いていなかった。

いつもの倍、時間をかけて水汲みを終わらせる。

空になった桶を投げ出すように置き、コウイチは地面に横になった。

（つ、疲れた……）

慣れてコツを掴んだはずの作業だが、今の体でやるには負担が大きすぎたらしい。

全身筋肉痛と疲労にまみれた体は、思ったよりも動いてくれなかった。

とはいえ、作業はこれで終わりではない。

よっこらしょ、と年寄りくさい掛け声を内心で呟き、体を起こす。

家の裏手にある斧を取ってこようとしたところで、アリヤに声をかけられた。

「薪割りはいいわよ」

え？　と驚いた顔を向けると、いつかのようにアリヤは二本の釣り竿を持って立っていた。

「今日はこっち」

言いながら、片方の釣り竿を突き出してくる。

「姉さんがしばらく狩りに出られないからね。あたしたちが食料調達しとかないと」

言いながら視線が向けられた先には、薬草を塗り込んで布を巻いた足首を庇うようにして立つレナファがいた。どこか心配そうな眼差しでこっちを見ている。

「……なるほど」

たしかにあの足では当分狩りは無理だろう。

納得しながら、自然と顔は明後日の方を向いていた。

……昨日のことが夢でないのなら、あの一連の会話も実際にあったことなわけで。

「何よ？　変な顔して」

「……いや、別に」

「ふーん……まあいいわ。じゃあ行くわよ！」

追及されたらどうしよう、と思っていただけに、気合いを入れて歩きだしたアリヤの反応にほっとする。

それにしても――

（……気まずい）

これからもしばらくはこの姉妹にお世話になるしかない。そうなるとレナファと二人きりになる場面も出てくる。

そのことを考え、コウイチは気づかれないようにこっそりとため息をついた。

――そんな鬱々とした思いが結果に出たわけではないだろうが。

「……コウイチ」

「……」

アリヤのジト目から逃れるように、視線を脇へそらす。そうすると、イヤでも魚一匹入っていない桶が目に入った。

……なんというか、まあ。

この前の大漁は、どうやらまぐれだったようで。

「「ハァ……」」

重なったため息。驚いて横を向くと、アリヤも驚いた顔をしてこっちを見ていた。目が合うと、ぷいっと顔を背ける。

わかりやすくご機嫌斜めなその様子に、コウイチもがっくりと肩を落とした。
「つまりー、自分には釣りの才能がありー、その秘められた才能が開花しただけなのだー」
わざとらしく棒読みの声のした方を見ると、案の定ニヤついた顔のカセドラがいた。
「ようするにー、これからはどんな場所に行ってもー、そこに川と釣り竿があればー、生きていけるに違いないー。つまり釣りこそが、自分の存在意義なのだー。……ぷぷぷ」
「……」
ぷちん、と。
いつかどこかで誰かが思っていたことを間延びした口調で話され、コウイチの中で何かが切れた。
――あは、あははは、あはははははは。
虚ろな笑みを浮かべて周囲を見渡すと、適当な岩はすぐに見つかった。ふらふらと夢遊病患者のような足取りで近づく。
「あ、あれ？　兄さん？　どうしたんスか？」
両手を岩に添え、前後に体を揺らす。
「に、兄さん？　ちょっと、無視は反則ッスよ」
なんか声が聞こえた気がするが、聞こえない聞こえない。
そしておもいっきり体を仰け反らせ――
（……いっせーの）
「どわあぁぁあああああっ！！」
飛んできたカセドラの翼で羽交い締めにされた。
「ちょ！　ちょちょちょちょ、兄さんなに岩にヘッドバッドかまそうとしてんスかっ！　気でも狂ったんスか！？」
「いや――死のうかと」
思っていたことをそのまま口に出すと、カセドラの口がひきっ、と歪んだ形になった。
「に、兄さん。からかったのは悪かったッスから、落ち着いて」

「……」
カセドラの必死な様子に、はたと我に返る。
気づけば、アリヤが不審者を見るような目でこっちを見ていた。
「なにやってんの、さっきから？」
「……いや、別に」
死のう発言は聞かれずにすんだらしい。
そして微妙に気まずい空気の中で再開された釣りは、やはり不調のままで。
「……」
こうも釣れないと、苛立ちや諦めを通り越して眠くなってくる。
アリヤはどうか、というと、なぜか鼻をスンスンと鳴らしていた。
「……何か」
「ねえ、ちょっと汗くさいわよ」
言われて、昨日汗だくになったのに、水浴びをしていないことに気づく。いつもは水汲みのついでにするのだが、うっかり忘れていた。
「気になったんだけど、いつも洗濯はどうしてるの？」
「ここで水浴びをするついでに、体ごと洗っているが」
服が一組しかないので、そうするしかなかったのだ。慣れない手作業のせいか、だいぶくたくたになってきた気がする。
「……信じらんない」
目を見開いてぼそっと呟くアリヤ。
そういえば、洗濯をしている姿を見かけることが多い。というか、それほど服を持っているわけでもないのに、空いている時間はいつも洗濯をしている気がする。かなりのきれい好きらしい。
信じらんない信じらんないと虚ろに呟くアリヤを横目に、とりあえず臭いだけなんとかすることにする。
どうせこれだけ釣れないのだから、いま川に入っても問題ないだろう。
川縁まで近づいて、すくった水で両腕を洗う。ついで膝（ひざ）まである

川の中にゆっくり足を進めていった。
「……なにやってんの？」
「いや、汗だけ流そうか……と？」
振り向くと、妙に据わった目をしたアリヤがずいと腕を伸ばしてきた。
「な……なにか？」
「服をよこしなさい」
……えーと。
「理由を、聞いても」
「洗濯するからに決まってるでしょ。というかさせろ」
妙な迫力を漂わせながら、アリヤが一歩前へ進み、押されたようにコウイチは後ずさる。
「いや、だが」
家族でもない年下の女の子に服を洗ってもらうとか、はっきりいって抵抗があるわけで。
「洗濯してくれるって言ってるんだから、してもらえばいいじゃないッスか」
カセドラがどこかから声をかけてくる。
（……だが）
ここで重要な問題が一つ。
替えの服がないのだ。洗濯のためにいま着ている服を渡せば、どうなるかは明白なわけで。全裸とまではいかないだろうが、下着姿を他人に見られるのは勘弁してもらいたい。
「い・い・か・ら！」
そんな心情など知ったことではないとばかりに、アリヤが立てた親指でクイッ、と後ろを指して、上がれと指示する。
「……」
がっくりと肩を落とし、言われるままに戻るコウイチ。その足取りは、売られていく子牛のように重い。
そして川縁の苔むした岩に足をかけたところで――お約束のよう

に足を滑らせた。
「あ――」
「ちょ、コウイチ！？」
反射的に、アリヤが手を伸ばす。単純に考えればアリヤがコウイチを支えられるわけもないのだが、コウイチもまた反射的に差し伸べられた手を掴んでしまっていた。
結果――
ばしゃーんと派手な水しぶきを立てて、二人はいつかのように水浸しになった。
腰をついて呆然とする二人。あちゃーといったように、翼で顔を覆うカセドラ。
ぽかんとしていたアリヤの表情が、ふいにふっと緩んだ。
「……なに？　あんたは人をずぶ濡れにする趣味でもあるの？」
「いや、そんな、滅相もない」
慌てて顔の前で手を振る。背筋を冷たいものが急激に駆け上げってくるのは、気のせいだと思いたい。
「一度だけじゃなくて二度までも……何してくれてんのよあんたはーっ！！」
青筋立ててうがー、と吠えたアリヤを前に、必死に頭を下げて許しを請う。
……なんか最近、こんなことばっかりしている気がする。
コウイチが自分自身に呆れ果てていると、顔を真っ赤にして怒っていたアリヤがうなだれた。
「……せっかく、姉さんのことでお礼を言おうと思って釣りに誘ったのに……」
「え」
というコウイチの声に反応して、
「え？」
と、アリヤが顔を上げた。
一息、二息。間の抜けたような沈黙の間、二人は目を合わせる。

自分が何を口走ったかに気づいたのか、さっきまでとは違った意味でアリヤの顔が赤く染まった。
「いや、ちょ、別に……そうっ、なんでもないの、なんでもないから！」
あたふたと両手を動かし、必死で言い募る。
「いや、だが、今」
「なんでもないったらないの！」
睨みつけるためにつり上がった目の形とは対照的に、その口元は言いたいことが言えない時のようにうにうにうにと動いていた。
「……」
「……」
「……っ」
「……？」
「～～っ！」
「……アリ――ぶっ」
声をかけようとしたら、勢いよく水をかけられた。
「……！　な、なにを」
「何を、じゃないわよ！　何か喋りなさいよっ！」
と言いつつ、そんな暇もないくらい水をかけてくるのはいかがなものだろうか。
「ちょ、ま……や、止め――」
顔を覆って逃げれば、追いかけて容赦なく水を浴びせてくるアリヤ。筋肉痛がたたって逃げ切ることもできない。そんな光景が続くうちに、
「――ぷ」
怒っていたような声に、笑いが混じるようになって。
「アリヤ……？」
「アハ、アハハハハッ」
子供のように、純粋な楽しさからくる笑みを満面に浮かべたアリヤに目を奪われたのは一瞬。

「――ブハッ」
かけられた水が運悪く気管に入ってむせたのはその直後のことだった。
「ゴホッ、ゲフッ……ちょ、だから、待――」
「やーよ、アハハハ！」
――結局、川の中を転げ回りながらの時間を忘れるような一時は、体の冷えたアリヤがくしゃみをするまで続けられた。

その日の釣果はゼロで、それでもスッキリした様子のアリヤと一緒に帰った頃にはすでに空が赤く染まり始めていた。
「――今日は、ありがとうございました」
アリヤを膝の上で寝かせたまま、レナファは浅く頭を下げた。
「……いえ」
そう答えるコウイチの声は、疲れが残っている影響と、もう一つの理由のせいで小さなものになっていた。
（……どうしよう）
早くも来てしまったレナファと面と向かっている状況に、内心で頭を抱える。アリヤもいるので二人きりというわけではないが、寝ている少女を勘定に入れても仕方がない。
意識をそらすために、アリヤの顔をじっと見る。はしゃぎ過ぎてよほど疲れたのだろう、夕食を食べるなり、倒れ込むように寝てしまった少女の寝顔は、天使というか無垢（むく）というか、そんな表現の似合うものだった――いや、別にロリコンとかいうわけじゃなくて。
「……」
……さーて。
寝るかな。疲れたし。
いくらか癒された気分のままそうは思いつつも、なかなか切り出せない。ちらちらと毛布に視線をくれていると、レナファがぽつりと声を漏らした。
「不安、でした」

「……え？」
「あなたが来たことで、これまでのアリヤとの生活が壊れてしまうんじゃないか……そう思ってました」
逆に、いきなり切り出された重い内容の話に戸惑う。同時に、あー、やっぱりそう思ってたんだと納得するところもあった。
「もしかして、一昨日（おととい）のことも……」
「はい。聞いてました」
村長との会話を聞いていたことをあっさり認めると、レナファはいきなり頭を下げた。
「ごめんなさい。あんな態度をとってしまって……あなたは悪くないのに」
「あ、いえ……気にしていないので」
そうは言いつつも。
まるっきり気にしてないわけではなかったのだが、レナファの言葉を聞いてそのわだかまりがストンと胸の下に落ちた気がした。
……無理もないことだと思う。逆の立場だったら、自分はそういう態度をとらないとは言い切れない。
いくらか晴れた気分でレナファを見ると、彼女はまだ何か言いたいことがあるかのようにそわそわしていた。
「……なにか」
促（うなが）すと、彼女はようやくといった様子で口を開いた。
「あの……私は、何日も家を離れなければならないことがよくあります」
狩りに出ている間のことを言っているのだろう。相づちを打つ。
「その間、アリヤはこの家で一人きりなんです。ですから――」
どこか迷ったような表情を振り捨てると、レナファは勢いをつけるように顔をすぐ近くまで寄せてきた。
「ちょ……っ」
「その間、あなたには妹のことをお願いしたいんです」
……。

え？

「え、いや、あの……なんで自分に？」

「このぐらいの子が一人きりというのはやっぱり心配ですし……それにこの子も、あなたに懐いているみたいだから」

懐かれてるとか。

確かに初対面の時よりは距離は縮んだ気がするが、正直扱いが雑になっただけのような気も……。いや、それが懐かれている証拠、なのか？

……いやいやいや、それよりも。レナファを背負っての帰り道で交わして会話を思い出す。

「ダメ、ですか？」

レナファがうなだれた。今さら都合がいいですよねと呟く声が聞こえるが、別にそういうわけではなくて。

助けを求めるようにカセドラの姿を探したのが。あの自称精霊はまじめな空気はお好みではないらしく、こういう時に限って姿を現さない。

仕方ないので、意を決して口を開いた。

「あの……近いうちに、出ていくつもりなので」

「……え？　……あっ」

驚いた顔をしたレナファが、すぐに目を見開いた。彼女も思いだしたらしい。

レナファを背にして言った言葉を、あの場限りのごまかしにするつもりはなかった。だから、彼女の願いには応じられない。そういう意味の説明をたどたどしくすると、

「出ていく必要なんて……ありません！」

レナファはきっぱりと言い切った。すぐにうつむいて、消え入りそうな声で付け足す。

「いたいだけ……いてくれれば……」

その耳が、赤く染まっていた。

いたいだけ、いてくれれば――

そうは言われても、それを言葉通りに受け取るわけにはいかないだろうと思う。自分がいることが負担なのは、間違いないから。

そうは思いながらも、レナファの絞り出したような声に。

この、どこだかもわからない場所で、自分の居ていい場所を見つけた気がして、じんわりと胸が暖かくなるのを感じていた。

「でしたら、こっちからもお願いが」

「……なんですか？」

「僕には、狩りができません」

わかりきったことを聞かされ、レナファの顔に戸惑いが浮かぶ。

「ですが、狩りの手伝いや、野草の調達ぐらいなら、手伝えると思うので……。そうしていくらか時間が空いたら――その分を、アリヤと一緒にいてあげてください」

言葉を紡ぐうちに、驚いたようなレナファの表情から力が抜け、その口元が緩み――

「……はい」

そう頷いた時には、思わず見とれるような笑みを浮かべていて。

「それなら、私からもお願いが……さん、はいらないです」

「……はい？」

「ですから、あの……呼び捨てで……」

「あ……はい」

頷くと、レナファは顔を伏せて黙り込んでしまう。

……なんだろう。この雰囲気は。

経験したことのない沈黙に、思わず目を泳がせて視線を左右。なんだか顔が熱い気がする。

「あー、かゆいかゆい」

「っ！？」

驚いて思わず飛び上がった。顔をきょどきょどと動かすと、横向きに寝たような体勢で背中をぽりぽりと掻いているカセドラのにやけ顔が目に入った。

（カセっ……いつ、の間に）

「さあ？　それより、鼻の下を伸ばす気持ちはわかるッスけど、そこらへんにしといたほうがいいッスよ」
それはどういう――
ゴゴゴゴゴ、となんだか回れ右したくなるような音が聞こえた気がした。
「人が寝てると思って――」
なんかドスの効いた声を出しながら、むくりと起きあがるアリヤ。
いつから起きていたのか、口元がひくついている。
「なに人の姉さん口説（くど）いてんのよ！」
目の前にアリヤの頭が迫ってきたと思った直後、視界一面に火花が散った。
「っ……いや、別に口説いては」
赤くなった鼻を押さえつつ、
「というか、いつから起きて……」
そう聞いたら、なぜかアリヤは顔を真っ赤に染めて、
「そんなのどうでもいいでしょ！」
と、蹴りを入れられた。
「～～ッ！　お礼を言われたからっていい気になるんじゃないわよ！　ほらっ、さっさと出てく！」
「いや……なぜ」
「今日、中で寝させたら絶対に姉さんのこと襲うに決まってるでしょっ！」
いやいやいや、それはないから……というか、襲うとか子供がそんなこと口に出さないでほしい。
「いいから！　出てく！」
なぜか興奮した様子のアリヤに、背中をぐいぐいと押されて。
救いを求めてレナファを見ても、彼女も妹に異を唱えてまで助けてくれるつもりはないらしく、困った顔でたたずんでいる。
結局、為すすべもなく外に追いやられ、
「それと勘違いしないでよっ、別にあんたなんかに懐いてないんだ

からねっ！」
そのセリフと同時、投げられた何かが広がって視界を塞いだ。
バンッ、と、派手な音を立てて扉が閉められる。
顔を覆う何かをはぎ取ると、それはいつも使っている方のボロの毛布だった。
……えーと……。
……なにこれ？
待遇（たいぐう）は逆戻り、どころか一昨日までよりさらにひどい。
呆然と立ち尽くすコウイチのすぐそばでは、爆笑をこらえるようにカセドラが背中を向けてぷるぷると震えていた。

4．嵐の中の選択（1）

――トンテンカンカン。

よく晴れたその空の下、調子外れな音が、自然の中に一軒だけ建てられた小屋のような建物から響きわたっていた。

「ねー、大丈夫ー？」

割り込むように発せられた高い声に、音が止む。

（五回目……）

心の中でコウイチがそっと数えたのは、アリヤに心配そうな声をかけられた回数である。

コウイチが今いるのは、居候（いそうろう）をしている姉妹の家の屋根の上。そんなところで何をしているのかといえば、前から気になっていた雨漏りする部分に板を打ち付けているところだった。

内心を表すように、コウイチは浅いため息を吐いた。

同じように壁を修繕（しゅうぜん）していた時に危うく指を潰しそうになっただけに、心配されてもしょうがないのだが、いくらなんでも心配し過ぎだろうと思う。

初めてやる作業なのでたどたどしいのは認めるが、さすがにもう慣れてきたし。

板を押さえている手をそのままに、アリヤが借りてきた金槌（かなづち）を持った手を振ってみせる。

納得したのか、心配そうな声はとりあえずは聞こえなくなった。

――非日常が日常になって、すでに一ヶ月。

釘を打ちつける単調な作業を続けながら、コウイチはその間に何をしていたのかを振り返った。

アリヤには、森の中の食べられる野草やキノコの見分けかた。薬草などの効能や処方（しょほう）などを教わり。

「そうそう。一度間違えて毒キノコを食べそうになって、思い切り

頭をはたかれたッスよねー」
「……」
えーと。
他には、使い古した桶や樽の修繕や、水洗いをしたりとか。
「直すつもりがバラバラにして、こっぴどく怒られたこともあったッスね」
「……」
……こほん。
思ったよりも早く足の治ったレナファには、鹿の毛皮の剥ぎ方やなめし方。肉のさばき方を教わったり。
「最初に見た時には真っ青な顔になってたッスねー、ププ」
「……」
ピクピク。
森に入ってからの獲物の痕跡を見つけて追いかける方法や、待ち伏せのやり方。簡単な罠の仕掛け方なども――
「自分の仕掛けた罠に、自分でひっかかりそうになった時には笑えたッスねー」
「……てい」
むんず。
「あ、ちょ、兄さん何するんすか、尻尾掴んで、って――あ、ひゃあああああ！！」
ぶんぶんと、ハンマー投げの要領でカセドラを振り回し、思いっきり放り投げる。
「……よし」
悪は滅びた。
さて、気を取り直して。
振り返ってみれば、この一ヶ月は平和そのものだった。とりたてて問題も起こらない、穏やかな毎日。
ハッタリが効いたのか、あれから姉妹を嫌うあの村長が顔を見せる様子もないし。……ちょっと効きすぎたのか、怖がられ感は増し

た気がするが。

アリヤなどは、親切な村のおばさんに真剣な顔で心配されたらしい。一緒に住んでいて大丈夫なのかい？　と。

その話をおかしそうに笑うアリヤから聞かされた時には、思いっきりへこんだ……のはまあいいとして。

気になる点が一つ。

アリヤとレナファの二人が、微妙（びみょう）に自分から距離を置くようになったのだ。

嫌われているわけではないのはなんとなくわかるが、なぜかこっちをチラチラと見ていることが多い気がする。

そして、そういう時に限って二人でひそひそと話をしていた。少し前なら、悪口を言われているのではないかと疑ってしまったところである。

（なんなんだろう……）

首をひねってみても、結局理由はわからないまま。気にはなるが、何かあるなら直接言ってくるだろうと自分に言い聞かせ――やっぱり気になるので、聞き耳を立ててみてもやっぱり聞こえなかったり。

……まあ、それはさておき。

この一ヶ月、ここ数年の無気力ぶりが自分でも嘘のように精力的に働いた気がする。

生きるために、だけではなく、誰かのために働くということで、これほどやる気が湧いてくるとは思いもしなかった。誰かに必要とされている――そう思えば、不思議と疲れも感じない。

もういっそ、ここに住ませてもらっても――

（……いや）

ふとよぎった考えに首を振る。

今だって出ていきづらくなっているというのに。いつかは出ていかないと、少なくともそう思っていないと、ただずるずると時間だけが過ぎてしまう。潔（いさぎよ）く行動を起こすようなバイタリティは、自分にはないのだから。

そういう意味では、コウイチは自分という人間をまるで信用していなかった。

（……とはいえ）

今すぐに出ていっても早々に野垂れ死にするだけ。姉妹と暮らしつつ、少しでも彼女らの持つ生活の術を学ぶことが自立への道筋だと思い――

「なーんて思ってるうちに居着いちゃう気もするんスけどねー」

「っ！」

何の前触れもなく眼前に現れたカセドラに驚いて、屋根から転げ落ちそうになった。

「あ、あぶ、あぶっ」

「さっきから手が止まってるッスよ。だから、ほら」

「ちょっとコウイチ！　返事しなさいよねっ」

バクバクと脈打つ心臓を押さえたコウイチは、ようやく自分を呼んでいた声に気づいた。

（まずっ……）

慌てて顔を見せると、ほっとしたようなアリヤの顔が、すぐに不機嫌そうなものへと変わった。唇を尖らせ、

「聞こえてるになんで返事しないのよっ」

ぷりぷりと擬音が聞こえてきそうな怒りように、慌てて顔を引っ込める。

「あ、ちょっと……！」

なんか聞こえた気がするが、相手をすれば説教されるに決まっているのであえて無視。トンテンカンと作業を再開すると、アリヤはようやく渋々と、

「早く終わらせてよねー。でないとご飯が冷めちゃうからね」

そんな一言を残し、家の中へと引き上げていった。

（……まあ）

やっぱり後で一言謝っておこうかな。あとを引くとイヤだし。

「兄さんらしいッスねぇ」

うるさい。親しき仲にもなんとやら、だ。
「ういッス。じゃ、オイラはぶらりと散歩にでも行ってくるッス」
そうしてカセドラは姿を消して。
青空の下、金槌を振るう自分だけが残されると早くも決意が薄れそうになる。
……こんな日が、ずっと続けばいいのに。
ふと、そう思った。
それは、以前には思いもしなかった願い。退屈で、生きているから生きているだけのような感覚に慣れきって、ぼやけた日々を送っていた時には願わなかった想い。
心境の変化に戸惑いながら、空を見上げる。
まだ日が出てそんなに経っていない早い時間帯。よく晴れた空の端に一筋の黒い雲を見つけ、不意に胸のあたりがざわついた。
（……そういえば）
物語のパターンで言えば、こうした平穏な日常は嵐の前の静けさなわけで。
物事を悪い方にとらえるのは、平坦すぎて生きていることすら実感できなかった日常を送っていた時の悪い癖だった。
（……いや）
願望とは真逆のことが起こるのではないかという悪い予感を、首を振って振り払う。
そんなわけないと。それは悲観的な性格からくるただの錯覚であって、実際には日常的な不運に見舞われたことはあっても、ドラマみたいな悲劇に巻き込まれたことなど一度もなかったから。
今日も明日も明後日も。
当たり前のように、昨日やそれまでと変わらない一日にがやってくる。
少し前なら憂鬱（ゆううつ）になっていたことに、今ではありがたみすら感じられて。
不思議と、心穏やかに受け入れられた。

「――ほっほう」
ビックゥ！
体ごと飛び上がりそうなほど驚いて振り向けば、そこには紫色の丸いアレが浮かんでいた。
「なっ……カセドラ、いつから、そこに」
「さっきからいたッスよ」
「……散歩に、行ったのでは」
「行こうと思ったんスけどね。なーんかポエマーちっくな臭(にお)いが漂ってきたんで」
あー臭(くさ)い臭いと、翼を団扇(うちわ)代わりにパタパタと扇ぐカセドラ。
（……えーっと）
「カセドラ、さん？　もしかして……最初から聞いていた、とか？」
「……さあ？」
にへら、と口元にイヤな感じの笑みを浮かべ、あからさまにわかりやすいとぼけ方をするカセドラ。かと思ったら明後日の方を向いて、今日も明日も明後日も～♪　などと妙な節をつけて口ずさみ始める。
……だから、心が読めるのって卑怯だと思う……。
恥ずかしさのあまり頭に血が上っていくのを自覚しながら、コウイチは頭を抱えてうずくまるしかなかった。

――いくら悲観的な性格だろうと、世の中に退屈さを感じていようと、実際の悲劇を期待したことなどなかった。それが当たり前だと思う。誰もが好き好んでイヤな目に遭いたいなんて思わない。それが、自分に降りかかるものならなおさらだ。
だから、あの時、望んでいたのはささいな変化。ちょっとした刺激程度のもので、今となっては――生きている実感を胸に抱ける今の生活では、すでに望んでもいないもので。
そして物事はえてして、望む時にはこなくて、望まない時には向こうからやってくるものだと。

これもまた悲観的な見方からくる錯覚かもしれないけれど、そんなことすら忘れていた。

――バンッ！

派手な音を立てて家の扉が開いたのは、コウイチが雨漏りを直したその日の午後のことだった。

驚いて振り向くと、息を切らしたレナファの姿が目に飛び込んできた。

「ハァ、ハァ……コウイチ、さん……？」

「……レナファ？」

彼女は森に仕掛けた罠に獲物がかかっていないか調べに行っていたはずだ。帰ってくるには早すぎる。

「いったい、なにが」

走ってきたのだろう。レナファの顎から汗が滴っていた。にも関わらず、なぜか顔色が悪い。

「今……すぐ……ここ、から」

「え」

「逃げて……くださいっ。今すぐ！」

……逃げる？　何から？

唖然（あぜん）としていると、じれったい顔でレナファが口を開いた。

「森で……見たんです。その……見慣れない人たちを」

「見慣れない、人たち？」

「変に思って近づいてみたら、話が聞こえてきて……村を、襲うって……！」

「っ……」

「たぶん――盗賊です」

「なっ……！」

盗賊、という単語で思い浮かんだのは、以前にアリヤと交わした会話だった。

あれはいつだったか。たしか、一番近くにある町への道のりを聞いた時のことだ。ごくまれに現れ、道行く人を襲うという――

ゴクリ、と唾を飲む。

そんな、まさか、嫌な予感が本当に当たるなんて。……いや、まだそうと決まったわけではない。レナファの聞き間違いという可能性だってある。

「それは……何かの、間違いということではなく」

コウイチの期待混じりの問いかけは、途中で途切れた。

焦りを満面に浮かべたレナファが、家の中を見回した後で問いかけてきたのだ。

「アリヤは？　あの子はどこにいるんですか！？」

「え……アリヤなら、今朝借りてきた大工道具を返しに……」

さあっ、とレナファの顔から血の気が引いた。

「アリヤ……！」

そのまま、踵(きびす)を返して走り出す。

もたつく足取りでその後を追い、コウイチは入り口のところでこけた。足下が、まるで泥の上を歩いているようにはっきりしない。

立ち上がると、レナファはすでにかなり先のほうにまで進んでいた。足を止め、呆然とその背を見送る。

ああ、アリヤを迎えに行くんだなと頭の片隅で思った。レナファが感じているような、焦りも、不安もなく、ただ漠然(ばくぜん)と。

「で、どうするんスか？」

「カセドラ……」

いきなり眼前に現れたカセドラに、驚く余裕もない。

「いや、どうすると言われても……」

（どうしよう……）

頭が空っぽになったみたいに何も思いつかない。

そもそも、実感がまるでわかなかった。深刻そうなレナファの話も、まるで性質の悪い冗談にしか聞こえなかった。

「ずいぶん混乱してるみたいッスねぇ」

混乱？　混乱してるのだろうか。それすらもよくわからない。
「とりあえず、備えだけはしといたほうがいいッスよ」
「備え、というと」
のろのろした動きで振り返る。カセドラの翼が、今朝汲んできたばかりの水の入った桶と、干し肉を入れた袋を指していた。
とはいえ、カセドラの言う備えにもそう時間がかかるはずもなく。水袋をいっぱいにして、干し肉を小さな皮袋に詰め込む作業はすぐに終わってしまった。
何もやることがなくなると、今度は不安と戸惑いがコウイチの頭の中を渦巻きはじめる。
何かの間違いだろうと思う。レナファのことといい、問題がこんな立て続けに起こるはずがない。
そう思う一方で、もし本当だったらという思いもある。だがもし本当だったら……と想像してみても、やっぱり実感がわいてこない。盗賊に襲われるという元の生活ではあり得ない状況を思い浮かべてみても、マンガや映画の話のような気がしてならなかった。
漠然とした不安を抱えたまま、うろうろと家の中を歩き回る。気づけば喉がカラカラだった。
「……っ」
家の中の限られた空間にいることに耐えきれず、外に出る。直後に後悔した。
村のほうから、聞き慣れない音が聞こえてきたから。
悲痛で、聞くだけで身がすくむような人の声。
（……悲鳴？）
痺れたような感覚に襲われて立ち尽くしていると、視界の中に人影が映った。
「レナファ……！」
すぐ隣にいる小柄な人影はアリヤだろう。ほっとしたのもつかの間、すぐに様子が変なのに気づいた。

二人が、全速力でこちらに駆け下りてくる。二人だけではなかった。他にも数人の男女が後をついてくる。

そして、そのすぐ後を、明らかに格好の違う二人の男が追ってきていた。

（っ……あれ、は……）

瞬間、頭の中が真っ白になった。

それは、男たちがその手に、剣と斧が握っているのを見たから。

斧はともかく、剣の使い道など一つしかない。それらの凶器をぶらさげて、男たちは蛮声（ばんせい）をあげながら前を走るレナファたちを追いかけている。

思考停止した頭で立ち尽くしていると、さらに衝撃的な光景が目に飛び込んできた。

アリヤの手を引いて先頭を走っていたレナファが急に立ち止まり、振り返って弓を構える。そして、引き絞られた弦から矢が放たれた。

矢は片方の男の腹に突き刺さり、男はそのまま崩れ落ちる。慌てて背中を見せるもう一人の背中に、レナファは正確な射撃で矢を突き立てた。

倒れて動かなくなる二人の男。その体の下から、じわじわと赤い何かが流れ出す。

（……え？　何、が）

わかりきっている。

レナファが、弓で、人を殺した。

（……なんで？）

その事実を認識しても、なぜか何も感じなかった。

人が殺された現場など見たら、パニックになって叫んでもおかしくないのに。

目に映る現実に、感情が追いつかない。状況を把握することでいっぱいになって、心がついていかなかった。

「コウイチ！」

いつの間にか、蒼白（そうはく）な顔のアリヤがすぐ近くまで来ていた。

「アリヤ……」
尋常じゃない様子の少女を見ても、何を言っていいかもわからない。
「いきなり……あいつらが来て……みんなを……」
息を整えながら、途切れ途切れに言うアリヤ。
一緒に走ってきた男女は、村人だろう。アリヤと同じように、恐怖と不安で顔をゆがませている。
そして、そんな彼らよりもコウイチが目を奪われたのは、
「レナ……ファ……？」
最後に駆けつけた彼女を見て、コウイチは息をのんだ。見慣れた狩り用の服、そのわき腹あたりに、朱色の染みが広がっていた。
「それ、は……」
「あたしが捕まりそうだった時に、姉さんが飛び出してきて……」
悲痛な顔で、アリヤが訴える。
レナファだけでなく、よく見れば村人たちも何人か傷を負っていた。
「大丈夫です……これくらい……それより――」
息を荒げ、何かを言いかけたレナファを遮って、一人の男が叫びをあげた。
「あいつら、俺たちを殺さずに捕まえようとしやがったっ……奴隷にして売り払うつもりだ、チクショウ！」
（……奴隷？）
奴隷ってなんだ？　いつの時代の話だ？
まるで現実味が感じられない男の叫びに、村人たちが悲鳴をあげる。
事態についていけず立ち尽くしていると、叫んだ男が詰め寄ってきた。
「あんた、凄腕の猟師なんだろ？　なんとかしてあいつらを追っ払ってくれよ！」
「え……」

男の懇願に同調するように、一斉に視線が向けられる。全身に突き刺さるそれらが、助けを求めているような気がして、

「う……あ……」

一歩二歩と後ずさり、コウイチは横に首を振った。

(無理……だ)

自分は、そんなではない。猟師ですらない。全部、勘違いなのだから。

そう訴えたかったが、喉が震えるだけで声にはならなかった。

黙っていると、男が痺れを切らしたように舌打ちして後ろに向き直った。

「クソッ……これからどうする?」

「逃げるしかないだろ!」

「みんなを見捨てるの!?」

「仕方ないだろ! 俺たちじゃどうしようもない!」

「それに仲間が戻ってこなけりゃ、すぐに他の奴らが追ってくる。町まで逃げれば奴らも追ってこれないはずだ」

「そうか、そこまで行って助けを求めれば――」

「ダメです!」

レナファの叫びに、村人たちが驚いたように振り返った。コウイチも、レナファの様子がいつもと違うことに気づく。

(興奮して……いや、苛立ってる……?)

いつもの控えめな態度が嘘のように、今のレナファは近よりがたい空気を発していた。

その鬼気迫った様子に、さっきの二人の男の末路を思い出す。同じことを考えたのか、何人かがレナファの顔を見て顔を伏せた。

その反応に、レナファがはっと息を呑んだ。気まずそうに顔を伏せる。

「何が、ダメなんだ……?」

恐る恐るといったふうに、一人が疑問を口にした。

「……盗賊たちも、何人か逃がすことは考えてるでしょうから……

街道には、待ち伏せがいると考えたほうが……」
「それは……」
十分可能性のある指摘に、質問した男が黙り込む。それ以外もいっせいに暗い顔で口をつぐんだ。
「ですから……」
いつもの彼女に戻ったように、控えめにレナファは森を指さした。
「ひとまず、森に隠れましょう。あそこならそう簡単に見つからないはずです」

4．嵐の中の選択（2）

――姉妹の住んでいる小屋からほど近い森の中。

そこになんとか逃げ込んだ、コウイチを含めた十人ほどの村人たちは、皆そろって力のない眼差しを何もない虚空（こくう）に向けていた。

重苦しい雰囲気の中、暗い顔で座り込む村人の心にあるのは、先の見えない不安。

これからどうすればいい？　こんなところに隠れていても、いつか見つかるでのは――

それを口に出せば現実になるのではという思いが、彼らから言葉を奪う。このままここにいても何もならないとわかっていても、誰も動きだそうとしなかった。突然襲ってきた理不尽な現実に、誰もが気力を失っていた。

「……コウイチ？　大丈夫？」

知らない間にぼうっとしていたのだろう。心配そうなアリヤに声をかけられた。いつもは活発なその声も、今ばかりは沈んでいる。

「いや……」

首を振って、上を見上げる。ほとんど空は見えず、生い茂った枝葉が視界のほとんどを占めていた。

まるで、とてもリアルな夢を見ているようだった。

今まであったことが、本当に夢なのではという気さえしてくる。

こんな、わけのわからないところにいるのも。

カセドラや姉妹との出会いも、その後の彼女たちとの交流も。

……盗賊とかいう現実では耳慣れない連中の、突然の襲撃も。

今頃は現実の自分は、家のベッドで寝ているのかもしれない……

なんとなく、そうだったらいいと思った。

――ドサ。

何かが倒れる音。直後、耳にしたのは悲痛な悲鳴だった。

驚いて振り向き、コウイチは息を呑（の）んだ。

村人の一人がうつ伏せに倒れ、そのすぐそばで身内らしい女性が半狂乱で泣き叫んでいる。

恐る恐る近寄って覗いてみる。たしか、元から深い傷を負っていた村人だった。

「死んでる……」

呆然と呟かれた声が呼び水になって、悲鳴は一気に広がった。

いきなり騒がしくなった周囲をよそに、コウイチは呆然と立ち尽くした。

霞(かすみ)がかっていた意識を浸食するように、黒い染みが広がっていく。その正体が恐怖という感情だとわかるまでにそれほど時間はわからなかった。

人が死んだ——レナファがした時にはテレビの中で作りものにしか思えなかった、覆(くつがえ)しようのない現実。それを間近で目にして、コウイチの思考が容赦なく現実に引き戻される。

胸を締めつけるような恐怖が全身から力を奪い、コウイチはその場に膝をついた。

（死……んだ……？）

夢だったらいいと。

そんな呑気なことを考えてる間に、人が……死んだ？

「ッ……はッ……」

悲鳴をあげようにも、喉がひきつったように声が出ない。もし正常だったら、他の村人たちと同じように悲鳴をあげていただろう。

視界がぐにゃりと歪み、ハッハッと荒い息づかいが聞こえた。左右に視線を投げて、すぐにそれが自分のものだと気づいた。

胸が苦しい。耳鳴りもする。自分の息づかいが、うるさいほどに耳についた。

バクッッ、バクッッと、心臓の鳴る音も耳障(みみざわ)りだ。胸も締め付けられるように痛む。

周囲の叫びがはるか遠くからのものと錯覚してしまうほど、体の内側からの音がうるさかった。

（……帰り、たい……）
そう思ったのが引き金になったように。
トサ、と、また、誰かの倒れる音がした。
――もう、いやだ。
これ以上はもうごめんだ。帰らせてくれ。退屈だが平穏で、人がすぐそばで殺したり殺されたりすることのないあの場所へ。
今度は目を向けなかった。視界に入れて、誰かの死を見せつけられるのが怖かったから。
――次の一言を、聞くまでは。
「姉さん！」
聞き慣れた声。
（……ねえ、さん？）
振り返ると、血の気を失った顔で、レナファが倒れていた。
一瞬、何が起こったのかわからなかった。
すぐに思ったのは、彼女の服にあった赤い染み。それがさっきまでよりも広がってないかという疑問。
呆然としている間にも、しゃがみこんだアリヤがレナファの服をまくりあげていた。
脇腹に走る痛々しい裂傷。獲物の捌き方を教わっていなかったら、ここで気を失っていたかもしれない。それほどの傷だった。
「っ……」
目の前が暗くなりかけ、反射的に唇を噛む。走った痛みに呻き声が漏れる。
（どう、すれば）
正直、コウイチにはレナファの傷が命に関わるほどのものかどうかはわからない。それでも放っておいていい傷でないことぐらいは想像がついた。
アリヤが自分の服を破いて、未だ血の止まらないレナファの傷口を押さえた。苦しそうな呻き声がレナファの口からこぼれる。
「おい、あれ……」

「ああ、あのままだとまずいかも……」
そんな声が、周囲から漏れ聞こえた。
「姉さんっ、姉さん！」
すでに意識を失っているらしいレナファはもとより、彼女にすがりつくアリヤもそれらの声を耳に入れる余裕はなさそうだった。
だがコウイチには、不思議なほどはっきりと――嫌でも耳に入ってきた。
「どうするの……？　助けを求めに行くにしても、街まで三日はかかるわよ」
「急いでも二日だ。それまで保つかどうか……」
「でも、街道には待ち伏せがいるかもしれないんじゃ……」
恐々といった会話。それら全てが、コウイチには言い訳を連ねているようにしか聞こえなかった。なぜなら――
アリヤが、彼らを見上げる。視線が合った誰もが、気まずそうに目をそらした。
消極的にだが、選んだのだ。自分の命を危険にさらして助けを求めに行くことよりも、自分の身を惜しんでここに隠れ続けることを。
唇を噛み、アリヤはうつむいた。
コウイチの足が、二歩三歩とアリヤたちから離れるように動いた。
コウイチにとっては今まで言葉を交わしたこともない村人たちだが、彼らの選択を責めることはできなかった。なぜなら、自分もそうだから。心の内で言い訳を重ねて、進んで危ない道に踏みいるような勇気もない。
危険を承知で、街まで行くか――
危険が通り過ぎるのを、身をすくめてただ待ち続けるか――
どっちが誉められた行いかはわかりきっている。なのに死の恐怖を前に、どうしても足がすくんでしまう。
――誰かのために働くことが？

自然と、口端がひきつるような笑みが浮かんだ。鏡を見なくてもわかった。それが自分をあざける、歪んだ笑みだと。

本当にギリギリまで追いつめられたら、誰だって自分のことしか考えられない。恩返しなどどうでもよくなるに決まっているじゃないか。

……いや、他の人はともかく、自分はそういう人間だ。目の前が恩人が苦しんでいるのに、助けようともしない。そのために危険をおかす必要があると知っただけで、足がすくんで動けなくなってしまうような卑怯な臆病者だ。

それすら言い訳と知りつつも、頭の中で自分を蔑む言葉を延々とひねり出す。

それでいてなぜか、苦しんでいるレナファと、唇を引き結んでいるアリヤから目を離せなかった。

拒むのなら、そこに後ろめたさを感じるなら他の連中と同じように、目をそらせばいいというのに。

気づけば、こっちをじっと見ているアリヤと目があった。

「コウイチ、お願い」

「っ……」

やめてくれ。そう思わずにはいられなかった。すぐ後に向けられるはずの、アリヤの自分に向けられた失望の表情を見たくなかったから。

そして――

アリヤの次の言葉は、予想だにしていなかったものだった。

「あたしが街に行くから……その間、姉さんのそばにいてあげて」

耳を、疑った。

周囲もざわめき、それで聞き違いでないことがわかった。

「アリヤ、無茶よっ」

村人の一人が、アリヤの無謀な意思を慌てたように諫める。

子供のアリヤでは、もし盗賊に見つかったらその場で終わりだ。

走って逃げきることもできない。

アリヤが顔を上げ、キッと止めに入った女を睨んだ。レナファとコウイチ以外の前では見せることのなかった、彼女本来の気の強さを感じさせる眼差し。

「それでも姉さんを……！」

苦しむレナファに視線を落とし、

「姉さんを、死なせたく、ないの……」

呟くような、小さな声をもらす。。

……怖くないはずがない。怯えも多分に含まれた声は、かすかに震えていた。

育った環境のせいで、大人と年相応の幼さを兼ね備えたアリヤ。本心を隠し、姉以外にほとんど心を許すことがなかったその少女が。

初めて、自分から誰かに助けを求めた。

しかも本人は、生きるか死ぬかの窮地に飛び込もうとしている。

レナファの、ただ一人の家族のために。

――その瞬間、自分でも驚くほどあっさりと頭の中が切り替わった。いつもの、追いつめられた際の現実逃避ではなく。

理屈ではなく、感覚だった。すっと頭の中がクリアになり、唇が反射のように動いた。

「――僕が」

その言葉は、まるで他人事のように。何の抵抗もなくさらりと、コウイチの口からこぼれ出る。

「コウイチ？」

「僕が、行く」

「え……？」

「僕が、街まで行って、助けを呼んでくる」

大言を吐いた直後の、いつもならあるはずの後悔が、今回ばかりは不思議となかった。

驚いたように目を見開いていたアリヤが、ゆっくりと頭を振る。

「コウイチ……だめ。させられないわよ。そんな、危ないこと」

「危ないのは、ここにいても変わらない。それに……アリヤじゃ、たぶん間に合わない」

運良く途中で盗賊に出くわさなくても、少女の足では、それだけ着くのが遅くなる。

「それは……」

アリヤもわかっているのだろう。悔しそうに目を伏せた。

「……なんで？　なんで、コウイチがそんなこと――」

なんで。

……なんで？

聞かれて初めてその理由を探した。

――自分自身を好きになったことはない。腕っぷしも自信はないし、無事に街まで辿り着けると楽観してるわけでもない。

そうだ。街まで行って、上手く助けを呼んでこられるだなんて思っていない。そんな英雄的な行為など自分には不釣り合いすぎる。

そもそもそんな楽観的な考え方ができるなら、無気力人間などと呼ばれるものか。

そう。自分は呼吸をすることすら面倒くさがり、生きることに退屈さすら感じていたようなダメ人間だったはずだ。ここに来て、姉妹と出会って少しは変わったかもしれないが本質はそのままのはず。

なら、その命の価値もそれ相応だろう。

その程度の価値しかない命、それでももしかしたら、超絶的な幸運に恵まれでもしたら、万が一ぐらいの確率で上手くいくかもしれない。それでレナファを助けることができたなら――

自身を徹底的にこき下ろす思考を巡らせながらも、コウイチの口元に笑みが浮かんでいた。それは、さっきまでの自嘲の笑みとは違う晴れやかな笑み。

なんだ。勝率は低いにしても、得られるものを考えればずいぶんと分のいい賭けじゃないか。

恩人を助けるという理由も、自分程度の人間が命を賭ける動機としては上等だろう。それなら――

（……いや）

頭を振って、思い直す。

やっぱりそんな英雄じみた動機は、自分には似合わない。そんな前向きな理由付けでは、途中で身のほどを思い知らされた時にへこむだろうし、自分のようなダメ人間の動機としては立派すぎてなんだか落ち着かない。

もっと小さい、自分にあった動機はないだろうか。

行き着いた思考がすっきりと胸に収まらず、逆戻りして新たな道筋を探す。答えはすぐに見つかった。

……そうだ。元々うまくいくかどうかもわからない話だ。そんなことに命を賭けようなどと、本来思うはずもない。それでもやろうとしたのは、たぶん、実感がないから。最後の最後、死ぬ直前まで、本当の意味で自分が死ぬということを理解できないだろうから。言うなれば、これも少し形の違う現実逃避であって。

それにここに隠れていても、結局は助からないかもしれない。盗賊たちも探しに来るだろうし、彼らの目から運良く逃れられるとも限らなかった。

それなら、ここで一人動き出したほうがまだ生き延びれる確率は高いかもしれない。もしそれで死んだとしても、死にざまとしては格好いい。……それを、誰も見ていなかったとしても。

（……よし）

これなら、とりあえず自分を納得させ、奮い立たせるための言い訳としては上等だろう。

そう、あくまでも自分のため。そのぐらいのほうが、動機としては身の丈にあっていて、安心できる。

「とことん自虐的ッスねぇ」

すっかり存在を忘れていたカセドラの呆れた声が、頭上から降ってくる。

「知ってるッスか？　それって偽悪って言うんスよ？」

（……いや。決して偽っているわけではなく）

「ま、それも兄さんらしくていいんじゃないッスか？　ちょっと行き過ぎな気もするッスけどね～」

（……？）

その口調がなぜか、うれしそうに聞こえた気がして。不思議に思って顔を上げると、いつもより多く回っているカセドラの姿が目に入った。

「……コウイチ？」

「ほら。ずっと黙りっぱなしだから変に思われてるッスよ」

言われて視線を戻せば、不安に目を潤ませたアリヤがいて。

コウイチはその肩に手を置こうとして、ちょっとだけ手を上げた後、やっぱり似合わない気がして止めにする。

「安心して、ほしい」

怪訝そうな顔をしたアリヤをごまかすため、そして、これから言う言葉ができるだけ実現可能なものとして聞こえるように、咳払いを一つ。

さらに、自分自身を奮起させるために、言葉の意味をじっくり噛みしめるように。

「レナファを、死なせたくないのは、僕も同じだから――僕が、街まで行って、助けを呼んでくる」

そう、言い切った。

4．嵐の中の選択（3）

引きとめようとするアリヤをなんとか説得し、レナファのことを任せた。

心配するような目で見送られて、一歩踏み出す。歩きながら、振り返りそうになるのを意識してこらえた。一度でも振り返れば、その時点で足が止まってしまうという不安があった。そうなれば、また一歩を踏み出せるか自信がなかったから。

背後からの視線を感じなくなってからもしばらく歩き続け、コウイチはようやく立ち止まった。

「カセドラ」

「ういッス」

声に応じて、カセドラが姿を現す。コウイチは深々と、カセドラに頭を下げた。

「力を、貸してほしい」

これを思いついたのは、角猪（つのじし）との一件がきっかけだった。

もし途中で待ち伏せをしている盗賊に見つかっても、カセドラが使った不思議な力があればうまくやり過ごせると思ったのだ。

ゆったりと上下していたカセドラの動きがぴたりと止まった。ぱたぱたと動かしていた翼の先端が、だらりと下がる。

「……カセドラ？」

「あー……言いづらいんスけど、それ無理ッス」

……なんですと？

「そ……それは、どういう――」

「オイラの力、人間相手には通じないんスよ」

「……は？」

「どうも動物限定みたいで。つーことで、ご期待にはそえないかと」

翼の先端で頬のあたりをポリポリと掻きながら、アハハーと、どこか空々しさが感じられる笑い声をあげるカセドラ。

……えーと。ってことは――

（終わった……）

その場にがっくりと崩れ落ちそうになったコウイチの体を、カセドラの尻尾が慌てて支えた。

「ちょ、ちょっと待つッスよ。それはできないッスけど、森を最短で抜けるルートなら案内できるッスよ。それにオイラが先に行って待ち伏せがいないか確認してけば、やり過ごすことだってできるだろうし」

そういえば、その手があった。カセドラの姿は他人には見えないので盗賊に見つかることもないし、その役目はうってつけではないか。

（……と、いうか）

ふと、カセドラの言葉に疑問を覚えた。

「森の中を通れば、そもそも待ち伏せの心配はないのでは？」

カセドラが翼を持ち上げて体を左右にひねった。人間でいうところの、肩をすくめて頭を振るような意味合いだろうか。

「そんなのんきなこと考えない方がいいッスよ。さっき言ってたじゃないッスか。盗賊たちが、村の人たちを奴隷（どれい）にしようとしてたって」

そういえば、村人の一人がそんなことを言っていた気が。

だとして、それがどうしたというのか。

「あのッスねぇ。物を奪（うば）うのと人を連れ去るのじゃ手間が段違いなんス。もし一人でも逃がして助けを呼ばれたら、その時点でも失敗したようなもんなんスよ。人を抱えて逃げるってわけにはいかないんスから。だから、森の中にも待ち伏せや見張りがいるって考えたほうがいいッスね」

「それは……」

なるほど。聞いてみれば納得できる話だ。話なのだが……。

コウイチは違和感を覚えて首を傾げた。

そもそも奴隷うんぬんというのは、村の人間が言っていた話だが。

なんというか、カセドラの考えはあまりにそれを事実としてとらえ過ぎている気がするのだが。

「ああ、それは簡単ッス。さっき村の様子を見に行ってきたら、人はほとんど殺されてなかったッスから。あとたぶん縛る用の縄も積まれてたッスよ」

「……なるほど」

いつの間に、とも思ったが、直接その目で見たというなら、そうなのだろう。

「ついでに言うなら、盗賊が何人か森に入ってくるのも確認済みッス」

さらりと言われたその内容に、頬がひきつるのを感じた。

「もしそうなら、レナファたちも危ないのでは」

「どうッスかね。広い森の中ッスから、派手に動き回ったり大声で騒いだりしない限り見つかる可能性も低いと思うッスよ。……それにそっちの心配をしても、どうにかできるわけじゃないし」

それはその通りなのだが。

「……いや」

とりあえずその可能性は考えないようにしよう。自分にできることは、一刻も早く街に行って、そこで助けを求めることだ。

「どれくらいで、街に着けると思う？」

「森に造られた道は障害物とか高低差とか考えてか、ぐねぐねした感じになってるッスからね。森の中をまっすぐ突っ切って行けば、一日と半分くらいで抜けられるッス。そこからなら街はすぐそこッスよ」

一日半……思っていたより短い。

「ただ街道の近くを通ることもあるわけッスから、その時は特に警戒したほうがいいッスけど。……なんて言っても、よっぽど運が悪くない限り見つかることはないと思うッスよ」

カセドラの楽観的な言葉に、現実逃避と自分でも皮肉に思った決断に、もしかしたらうまくいくかもと希望が芽生えかける。

それなら――

「……っ」

頭を振って、浮かれそうになった自分を戒める。まだ安心するには気が早い。絶望の中で、ほんの少しの光が差し込んだだけだ。

なら、希望の芽を、摘まないようにするためには。

慎重に。確実に。それでいてできるだけ早く。

切り替えろ。平和ボケした思考を。すでに自分は死と隣り合わせの状況にいるということ自覚しろ。実感はできなくても、想像ぐらいはできるはずだ。ほんの少しの心の備えが、明暗を分けることだってありうると考えれば。

「……行こう」

心の中で区切りをつけると、コウイチはそう頷きかけた。

森の中を歩く。

最初の緊張感はほぐれ――そんなにビクビクしてたら最後まで保たないっすよというカセドラの言葉で少し落ち着いた――それでも意識は耳と目に集中させたまま足を進める。

ここ一ヶ月の間に森の中を歩き回っていた経験がいくらか役に立っている。無駄に体力を使わず、それでいてできるだけ早く歩くようなペースを体が覚えていた。

先導するカセドラが、空中に浮かんでくるくる回りながら進んでいく。あれなら360度、どの方向も見逃すこともないだろうが。回りっぱなしで目が回らないのか聞いてみたところ、

「――へ？　大丈夫ッスよ？」

あっけらかんとした答えが返ってきたので、まあ大丈夫なのだろう。

「……そろそろ休憩ッスか？」

「それは……いや、休もう」

さっきから歩き通しで、さすがに足が重くなってきた。レナファのことを考えると抵抗があるが、頭がぼおっとしてきたせいで何度

か転びかけたことを考えれば、少しだけでも休んだほうがいいかもしれない。
「無理に急いでもしょうがないッスよ。ここなら街道からもけっこう離れているし」
そう言われ、焦る気持ちを抑えて腰を下ろす。自然と深い息がこぼれた。
「ちょっとでも寝たらどうッスか？」
「……無理。たぶん、眠れない」
気持ちが昂ぶって。
「そッスか」
それ以上何も言わず、カセドラはまたクルクルと回り始めた。
動きを止めた体から汗が噴き出す。額の汗を拭いながら、口に水を含んだ。カセドラに言われて用意した水袋が、こんなふうに役立つなんて思いもしなかった。
「カセドラ」
「ん？　なんスか？」
振り向いたカセドラに投げかけたのは、以前から思っていた疑問だった。
「君はどうして、僕のそばにいるんだ？」
カセドラとの出会いは、ただの偶然。それ以前に会ったことはないと言い切れる。それでいていつ見切りをつけられてもおかしくない自分なのに、カセドラはなぜか離れることなくいつもそばにいた。そのことが不思議だった。
「へ？　あー……」
首をひねるような素振りを見せ、そのままコロンを一回転。
「なんでッスかね？　自分でもわからないッス」
「……そうか」
なんでか、少しだけがっかりした。
「ただ――」
「ただ？」

「なんとなくなんスけど、兄さんから離れづらいっていうか……」
「それは、どういう」
「んー」
ひときりし唸りつつ、返ってきた答えは、
「さあ？　ただそう感じるとしか……」
「そう、か……」
まともな答えは得られなかったが、まるで深刻さを感じさせないカセドラの態度に、なんだかどうでもよくなってきた。
（ただ、まあ）
ここに来て最初に出会ったのがカセドラでよかったと思う。でなければ、自分はとっくにのたれ死んでいただろうし、アリヤとレナファの二人と出会うこともなかったから。
強く、感謝の気持ちを心に浮かべる。そうすれば、口に出さなくてもカセドラには伝わると――
そう思ったのだが、
「兄さん兄さん」
なぜかカセドラが、ニヤニヤと小悪魔的な笑いを浮かべていた。
「思いってのは言葉にしなきゃ伝わらないと思うんスよね」
「……は？」
「だから、ほら。今の心のたけを、思い切って口に出してみよう的な？」
……いや、キミ心が読めるんだから、言わなくてもわかるだろうに。
「それはそれ、ってことで。さあ、さあさあさあ！」
「いや、それは」
「んー？」
パタパタと翼を動かしながら、恥ずかしいんスか、ひょっとして恥ずかしいんスかと周りを飛ぶカセドラ。
……ああ、そうさ。恥ずかしいさ。つーか恥ずかしくないわけがあるかっ。そもそもそんな態度とられて素直にお礼が言えるかって

んだボケェ！

——などと心の中で絶叫しながらも、それでもいくらか気が楽になるのを自分を感じていて。

こんなんでいいのか、と思いつつも、まあ、これはこれでとも思う。

キツい時にキツいことばかり考えて自分を追いつめるより、よっぽどマシだろうから。

（……ひょっとして、ワザと、とか……）

カセドラのお調子者っぽい振る舞いが、実はそれを狙ってのことなのかと疑ったりもしたが。

（……いや、ない。それはない）

まーだー、とか言いながら周りを飛び回るカセドラを見て即否定。

まあわざとだとしても、しつこくまとわりついてくる今のカセドラに、礼を言う気にはならないのだが。

（と、いうか）

そろそろ止めていただきたいのですが。

いい加減離れる気配のないカセドラを追い払おうと、視線を走らせ——

「まだッスかー？　兄さ——ムガ！」

その口を押さえた。

何すんスかー！　と抗議の眼差しを向けてきたカセドラを小脇に抱えて、夢中で木陰に身を滑り込ませる。

そして恐る恐る覗いた先には、いかにも荒くれ者っぽい男が一人。

腰には剣を収めた鞘を下げていた。

解放したカセドラに、震える声をかける。

「カセドラ、あれは……」

「間違いないッスね」

（やはり……）

あれも、村を襲った盗賊の一人なのだろう。背中から冷たい汗がどっと噴き出る。

「どう、すれば」
「まだ相手はこっちに気づいてないわけッスから……向こうがどこか行くまで隠れてるか、見つからないようにここから離れるかのどっちかッスね」
様子をうかがうと、盗賊は退屈そうに立っているだけで、ことさらあたりに注意をはらっている様子もない。むしろあくびをして隙だらけにさえ見える。
「で、どうするんスか？」
「……行こう」
意外そうな顔をするカセドラ。
別に勇んだわけではなく、こんな状況でじっとしているほうが耐えられないと思ったからなのだが。
「ならあいつがこっちを向いたらオイラが教えるッス。オイラなら声を聞かれる心配もないッスから」
そうだった。カセドラの声は他人には聞こえないのだ。わざわざ口をふさぐ必要もなかった。
「……頼む」
手と膝をついたまま、這うように移動する。土に汚れてしまうが、気にしている余裕はない。地面の小枝や、枝葉に触れないように細心の注意を払いながら、少しずつ進んでいく。
「もう少しッスよ……」
どれほど時間が経っただろうか。それほどかかっていないはずだが、時間が引き延ばされたように長く感じる。
「……もう立っても大丈夫ッスよ」
待ち望んだカセドラの声。コウイチの体からどっと力が抜ける。
「カセ――」
礼を言おうとして立ち上がり、なぜかかけられたのは緊迫した声だった。
「兄さん！」
「っ！」

カセドラの視線を追って振り向くと、そこには別の盗賊がいて。
驚いていた相手の表情が、残酷に彩られていくのに、目を奪われた。
（なんで――）
カセドラの注意が最初に見つけた盗賊に向けられていたから？
だが、まさか二人もいるなんて。
信じたくない現実に気を取られている間にも、相手は蛮声をあげて駆け寄ってくるところだった――赤錆びた剣を振りあげながら。
恐怖と疑問で思考が止まり、その場に立ち尽くしていたコウイチに、
「ぼっとしてる場合じゃないッスよ！」
カセドラの緊迫した声がかけられる。飛び上がって走り出すと、その背に殺気のこもった罵声が浴びせられた。
その声は二人分。最初にやり過ごそうとした一人が、声に反応してコウイチたちの存在に気づいたのだ。
コウイチはといえば、そのことに気づく余裕もなく必死で走っていた。ただし、今まで歩いてきた道のりを逆走するように。
「そっちじゃないッスよ兄さん！」
――そっち？　そっちってなんだ。
自分のすぐそばまで迫った恐怖から、少しでも遠ざかりたい。その一心で走っているコウイチの思考からは、レナファとアリヤのことがすっかり抜け落ちていた。
「あーもう！　最初の目的を忘れたんスか！？」
「っ！」
目的。苦しむレナファと、彼女を見て辛そうにしていたアリヤ。
カセドラの言葉で本来の目的を思い出し、コウイチは走る方向を変えた。
余裕があれば、自分自身に悪態をついていただろう衝動を抱えて。
背中から浴びせられる声が、物理的な圧力を持ったように全身にのしかかる。

わけのわからない生き物ではなく、同じ人間から向けられる殺意のほうが体にまとわりつくものだと、コウイチは初めて知った。

こんな時、マンガでも映画でも、それに登場するようなヒーローなら、かっこよく立ち回ってうまく返り討ちにするのだろうが。

あるいは機転を利かせて、思わず喝采したくなるような方法を実行して窮地を脱するかもしれない。

だが自分は、平凡以下の人間だ。そんな腕っ節も、土壇場でアイデアなど思いつける頭も持っていない。

あいにくと自分には逃げるために走ることしかできない。その足も特別速いというわけではなく。

声がだんだん近づいてきている気がする。そう思った瞬間、背中に熱を感じた。

「ッ……！」

熱さと衝撃と、何かが背中をたらりと伝っていく感覚。

直後、くぐもった悲鳴と、何かの転ぶ音が聞こえた。

「大丈夫ッスか、兄さん！」

「カ、カセドラ……いったい、何が」

「気づいてないなら知らないほうがいいッス。それより、追ってきた奴らは蹴り飛ばしてきたんでもう少しペースを落としても大丈夫ッスよ。それと、このまま行けばもう少しで道に出るッス」

言われて前方に目を凝らせば、木々の間から、光が射し込んでいた。

息を切らせたまま森を抜ける。視線の先には、両側を木々に囲まれはるか彼方まで延びる道があった。

あとはこの道をまっすぐに進めばいいだけ。はっきりと指針を示された気がしてほっとしたその直後。

村側の道から迫る人影を見て、コウイチは目を疑った。なぜならそれは、形からして人単体のものとしてはあり得なかったから。

（……馬？　馬！？）

「っ！」

それが人と、人を乗せた馬だと気づいた瞬間、コウイチは考える間もなく走り始めていた。

だが、人の足で馬のそれにかなうわけもない。ドガッ、ドガッと重い足音はすぐに近づいてきて、

「うくっ！」

「兄さん！？」

さっきとは比べものにならないほど熱い衝撃を肩に感じ、コウイチは地面に倒れて転がった。

「っ……い、痛……」

愕然（がくぜん）として肩をやった手は、真っ赤に染まっていた。

（切ら……れた？）

信じられない現実にコウイチが呆然としていると、馬のいななく声がした。通り過ぎていった馬が、手綱（たづな）に従って振り返り、激しい勢いで突っ込んできたのだ。それに乗っている盗賊の剣が、赤い飛沫（しぶき）をまき散らしながら振り上げられる。

「こんのぉ！」

視界の端にいたカセドラの体が、紫色の光を放つ。その光を目にして、馬がひときわ高くいなないた。

（これが……！）

カセドラの“力”によって、乗り手の制御を離れて暴走した馬が、でたらめな方向に向かっていく。

「カセドラ……！」

コウイチのゆるみかけた頬が、間をおかずにひきつった。

暴走した馬の進む先――そこにほっとした表情で浮いているカセドラがいたからだ。

「へ？　――あびゃ！」

馬に跳ね飛ばされたセドラが、コウイチの目の前に転がってきた。

「カ、カセドラ……？」

「……きゅう」

目を回しているカセドラを心配する余裕もなく、森から追ってき

た盗賊が姿を現した。
転んだ拍子に足を痛めたコウイチは立つこともできず、そのまま取り囲まれる。
「チッ……手間取らせやがって」
「どうするコイツ？」
「一人くらい殺してもいいだろ。ここから連れて帰るのも手間だしよ」
物騒な会話が、頭上から降ってきた。
救いを求めてカセドラを見ても、すぐに目を覚ます様子もなく。
（……死ぬ）
もう、どうにもならない。はっきりとそう感じた。
――こんなどこかもわからない場所で。
――わけのわからないうちに。
――しかも、時代劇やファンタジーでもないのに、剣で斬り殺される？
意味がわからなすぎて、恐怖の代わりに、自然とおかしさがこみあげてきた。
知らずに笑っていたのだろう。気味悪そうに男たちが見ていた。狂ったとでも思われたのかもしれない。
こんな場面の当事者になったらもっと見苦しく泣きわめくものだと思っていたが、不思議と思っていたほど怖くはなかった。もしかしたら、恐怖のあまり心が壊れてしまったのかもしれない。
それでも――
ふっと、アリヤとレナファの顔が脳裏に浮かんで胸が痛んだ。
あれだけ大口を叩いてこのざまだ。うまくいくなんて思っていなかったが、結局なにもできなかった。
盗賊たちが、武器を振り上げた。あれが振り下ろされた瞬間、自分は死ぬのだろう。
（……ごめん）
直後に迫った死の恐怖よりも、あの二人の助けにならなかったこ

とだけが心に残った。

「――風弾！」

――その声は、諦めかけ、半ば麻痺していた心に鮮烈なまでに響いた。

声の直後、ヒュオッと音がして、目の前の盗賊二人が弾かれたようにその場から吹き飛んだ。

「なっ……」

何が起こったのかわからず、地面に倒れて痛みに呻く盗賊たちに目を奪われていると、足下の地面が大きな影におおわれた。

「ぎりぎり間に合ったようだね」

「安心するのはまだ早い。急ぐぞ」

交わされた声につられて見上げた先には、馬に乗った一組の男女がいた。

手綱をとる壮年（そうねん）の男と、その後ろに乗るまだ若い女。女のほうは男の影に隠れてよく見えないが、男のほうは鍛えられた体を鎧で包んでおり、力強さを感じられる顔立ちをしていた。

男がコウイチを見下ろし、穏やかな声で問いかけた。

「変わった服を着ているが、襲われていたところを見ると村の者だな」

反射的に頷いていた。

「遅くなってすまなかった。もう大丈夫だ」

「あなた、は」

「詳しい話をしている暇はないが、我々はこれから盗賊どもを討伐（とうばつ）に行く。何か知っていることはないか？」

二人が誰なのかという疑問以前に、彼らが信用できる人間だという直感が自然と口を開かせていた。

「ッ……村の外れにある森の近くに――」

レナファたちのことを話そうとした矢先、体がぐらりとよろめい

た。一瞬視界が暗転しぎりぎりのところで踏みとどまった。
「どうした?」
(こんな、時に――)
ガリ――
唇を噛み切って意識をつなぎ止め、口を動かす。視界が少しずつ狭まり、すでに自分が何を言っているかもわからないにも関わらず。
(これだけは――)
最後まで、言葉を紡ぐ。
生死の境にいるレナファのことが最後までしっかり伝えられたかどうかもわからないまま、コウイチは意識を手放した。

幕間．一時の別れと新しい道

目を覚まして最初に感じたのが、今までに経験したことがないほどの体の重さだった。

「……？」

張り付いたように重い瞼（まぶた）をなんとか開くと、そこは見たことのない空間。

どこかの部屋の中、ということはわかる。というか、それぐらいしかわからない。

「こ……こは……？」

口の中がひどく渇いて、うまく喋ることもできない。

状況がわからずに混乱していると、扉の開く音がした。誰かがベッドの近くにまで近づいてくる。

「……起きたか」

どこかで聞いた覚えのある声だった。

「……？」

コウイチがなんとか首を巡らせようとすると、肩にひどい痛みが走った。悲鳴にもならないようなかすれ声が口からもれる。

「無理はしないほうがいい。手当てをしてあるとはいえ、すぐに治る傷でもないからな」

（……傷？）

目だけ動かして、肩に白い包帯が巻いてあるのを見つける。

（なんで、こんな……）

包帯を巻かれるほどの怪我をする出来事などあっただろうか。

いまいち働かない頭で考えていると、声の主らしい男が視界に入ってきた。

中年の後半に差し掛かったぐらいの年齢で、灰色の髪と、無骨（ぶこつ）だが穏やかな顔つき。なぜかはわからないが、コウイチは男を見て安心している自分に気づいた。

「目は見えるな？　私のことを憶えているか？　ああ、喋らないでいい」

どこかで会ったのだろうが、うっすらと記憶にある程度で、はっきりと思い出せない。コウイチが首を横に振ると、男は頷いた。

「無理もない」

そう言ってから、卓上に置いてあった水差しを差し出してきた。

口元に飲み口を近づけられてから、ようやく喉が乾いていたことを思い出す。

「……っ！」

一口飲めば、あとは夢中だった。空っぽだった体が満たされていくような感覚を覚えながら、むさぼるように中身を全て飲み干した。

空になった水差しを名残惜しそうに見ていると、やんわりと声をかけられた。

「いきなり多く飲むと体にさわる。……少しは目が覚めたかな？」

さっきよりも意識がはっきりしていた。

（ああ……そうだ）

アリヤとレナファとの生活。平和な日常。それが――

「っ！」

（思い出した……！）

村が盗賊に襲われたこと。盗賊から逃れたが、レナファが大怪我をして倒れたこと。町に助けを求めにいったこと。途中で見つかって殺されそうになったこと。そして、目の前の男にぎりぎりのところで助けられたこと。

（それで……！）

あれから、どうなったのか。

焦って身を起こそうとしたコウイチを、男が手で押さえた。

「聞きたいことはあるだろうが、まず自己紹介をさせてもらおう。私はセンダリア王国、“遊撃”騎士団の団長を務めているフェスター・グレイセンという。そしてここは、我々が一時的に駐留しているクレイファレルの街だ。君にはたんに、“街”と言ったほうが

わかりやすいかもしれんな」
「き……し……？」
きし……騎士！？
コウイチが驚いた顔をすると、男――グレイセンはさっきまでよりもいくらか引き締まった表情をしてみせた。
「そう。そして、君が街まで来て会おうとしていた相手だ」
街まで行こうとした目的は確かにそれだ。
「だけど、なんで……？」
あの場所で自分が助けられた理由がわからなかった。助けられた直後の会話を思い出す限り、偶然通りがかったというわけでもなさそうだし。
「理由を説明すると、君たちの村が盗賊に襲われた時、我々もその情報をつかんでいた」
「え……」
「大規模な盗賊団がこの近辺に来ていたことは知っていたのでな。どこに潜んでいるか、そしてその動きを探るために、偵察を出していた。……もっとも、襲撃の報告を聞いてから動き出したので、対応が後手に回ってしまったのだが」
グレイセンの口調は事務的だが、声には隠しきれない悔しさがにじみ出ていた。
「村、は」
「今はもう大丈夫だ。村を襲った盗賊たちの大半はすでに牢の中にいる」
「なら……僕のしたことは……」
自分が助けを呼びに行かなくても、彼らはすでに動き出していた、というわけで。
全身の力が抜けていくのを感じながら、天井を見上げる。
「何を考えているのかわかるが……君のしたことが全くの無駄だったというわけではない」
「……？」

「レナファ、という娘のことなのだが」
その名を聞いた途端――
コウイチは反射的に体を起こしそうになり、全身に走った痛みに声にならない悲鳴を漏らした。
遠ざかりそうになる意識をつなぎ止め、荒い息の合間に、どうにか声を絞り出す。
「っ……レナ、ファは……？」
「彼女たちの隠れている場所を、君が教えてくれたのを覚えているか？」
答えになっていない。
「レナファは……彼女は、大丈夫だったんですか！？」
「結論から言うと、なんとか命は取り留めた」
その言葉を聞いた直後、体の芯から力が抜けたような気がした。
「よか……った……」
安堵のあまり目を閉じたコウイチに、穏やかな声がかけられる。
「医者の見立てでは、かなり危ないところだったらしい。もう少し発見が遅れれば、それこそ命にかかわるほどだったそうだ。だが今ではもう意識を取り戻している。君のことを心配していたぞ。……この子もな」
「え……」
グレイセンの視線が、コウイチの腰のあたりに注がれていた。
苦労しながら同じ場所を見ると、そこにはベッドに顔を伏せているアリヤがいた。下になって顔は見えないが、かすかな寝息が聞こえてくる。
「え……あ……いつ、から」
「姉が大丈夫だとわかってからはほとんどつきっきりだ。泣きはらして、君のそばから離れようとしなかったよ。さすがに疲れたのだろうな」
「そう……ですか」
「私の立場からすれば、君の行動は無茶だったと責めなければなら

ないのかもしれんが……君の情報がなければ、彼女はまず確実に命を落としていた。その子も悲しんだことだろう」

区切（くぎ）ると、グレイセンはまっすぐコウイチを見据えた。その目には、一片の虚飾（きょしょく）すらこめられていない。

「あえて言わせてもらう。胸を張れ。君が、君の行動が彼女たちを救ったんだ」

「っ……いえ……そんな……」

胸の奥から感情があふれて、言葉にならなかった。こんなにも力強く、胸を張れなんて言われたことは、今まで一度もなかったから。

こみ上げてくるものを必死でこらえていると、グレイセンが立ち上がった。

「さて、とりあえずはこれまでだな。今は少しでも寝て体を癒してほしい。これ以上の話はその後のほうがいいだろう。……彼女もちゃんと寝かせたほうがいいな」

アリヤを運ぼうと抱き上げる。アリヤは目を覚ます素振りも見せなかったが、その手はしっかりとシーツを掴んでいた。

コウイチは反射的に、感覚が半分ぼけているような手を動かしてアリヤのそれに触れる。途端（とたん）に小さな手から力が抜け、眉を寄せていたグレイセンの腕で抱き上げられた。

「驚いたな……。君はよほど彼女に信頼されているのか？」

「いえ……ただの、偶然かと」

からかいの混じった問いかけにまじめに答えると、グレイセンが穏やかな顔で苦笑してみせた。

「では、な」

そしてまた一人きりになる。

熱くなった胸は少しも冷める気配を見せず、傷の痛みも不快に感じない。これで寝れるのかとふと思ったが、それでも瞼は自然と閉じていった。

翌日、ようやく少しだけ体を動かせるようになった。

といってもいきなり動き回ることなどできず、運ばれてきた少量のスープと、とんでもなく苦かった薬を口に入れれば後はただ寝るだけ。

（暇……）

ぼんやりと天井を見上げる。どうもここは、病院のような施設らしい。まあ自分が怪我人なので、別におかしくはないが。

怪我といえば、包帯を巻くほどの処置が必要だったのが肩と背中ぐらいで、後は足首の軽い捻挫（ねんざ）と多少の擦（す）り傷があった程度。その割には寝込みすぎだと思うが、医者の話を聞く限りそれは疲労と精神的なものが原因だとか。

痛いのは服のほうで、ここに運ばれてきた時にかなりボロボロになっていたせいで捨てられてしまったらしい。思い入れのあるものでもなかったのでいいのだが、これで持ち物は本当に身ひとつになってしまった。

もちろん死にかけたことの代償（だいしょう）としては、安いのだろうが。

「はあ……」

「――失礼する」

思わずため息をついていると、グレイセンと名乗った男性がまた訪ねてきた。

（そういえば……まだ、礼を言っていなかった）

相手は命の恩人、礼を言わないのは人としてどうだろう……。痛みをこらえて上半身を起こし、深々と頭を下げる。

「あの……ありがとう、ございました。危ないところを、助けてもらって」

「本来であれば、ああした状況になる前にどうにかするのが我々の役目だ。むしろ私が謝らせてもらいたいぐらいだよ」

「ああ、いえ……」

いい人だとは思うが、明らかに自分よりも年上で立場も上の人に頭を下げられると、なんだか落ち着かない。

「さて、では昨日の話の続きをしたいと思うが、構わないかね」

「あ、はい、それは」
たしか、そんなことを言っていたような。というか、騎士のエラい人がわざわざ自分なんかに何の用だろうか。
緊張で堅くなっていると、
「これから始める話は、騎士団長としての職分というわけではない。気を楽にして聞いてくれ」
なんでだろう。こんなふうに言われて本当に楽にできるほど神経は太くないはずだったが、この人の言葉だと不思議と素直に受け入れられる。
「さて――単刀直入(たんとうちょくにゅう)に聞こう。君はこれから、どうするつもりだ？」
「……え」
いきなり聞かれても、特にどうする、と考えていたわけでもない。あんなことがあった後なので今まで通りというわけにはいかないかもしれないが、
（……まあ、またあの村に戻って――）
「村に戻ろうと考えているのならやめた方がいい。君にとっても、君と一緒に暮らしていた姉妹にとっても不幸なことになると思う」
「……え？」
一瞬、言っている意味がわからなかった。聞き間違いを疑ったが、それにしてはその言葉には憂(うれ)いのような感情がこめられている気がした。
「今回の一件で、村人たちにも多少の被害が出た」
いきなり変わった話題に、森の中で死んだ村人の最後の姿が浮かんだ。
「私たちが駆けつけた時には、村長をはじめとする何人かが盗賊たちに刃向かったことで殺されていた」
（ああ……）
レナファたちを追い出そうとしていた、あの。
どうしても好きになれそうにない人だったが、それでも殺されたと聞くと同情してしまう。

「それでも、事件の規模の割には犠牲が少ないのは不幸中の幸いかもしれないが……盗賊たちの目的が略奪（りゃくだつ）なら、もっと犠牲者が出ていただろうな」

自分でも意外なことに、その言葉にコウイチは強い反感を抱いた。人が死んだ――もちろん犠牲者は少ないほうがいいだろう。それでも少なかったからよかった、という言葉には納得がいかなかったのだ。

思わず抗議の目を向けてしまっていたらしい。

グレイセンが軽く驚いたような顔をした後、

「すまない。無神経な発言だったな」

そう言って、頭を下げた。

「いえ、そんな」

慌てて頭を横に振る。まさかそんな反応が返ってくるとは思ってもいなかったので、驚きが先に出た。

「いや、君の考えのほうが正しい。少なくともここでは、そんな言葉を口にするべきではなかった」

心から謝られて、逆にうろたえる。

なんて返したらいいかわからずに、答えを探していると、

「話を戻そう」

その一言で、思わずほっとする。

「今回の一件。盗賊たちがあの村を襲ったのは、ただ近くに手頃な村があったから――奴らの言い分だとそういうことだが、村人たちの一部はそうは思っていない」

「それは、どういう」

「手引きした者がいるのではないかと、そう疑っているようだ」

思わず硬直した。その話の流れからいくと――

「わかったようだな。疑われているのは君だ」

「そ、んな……」

頭をハンマーで叩かれたような衝撃に襲われた。頭がぐわんぐわんと鳴っているような気さえしてくる。

「まず言っておくが、村人たちの中には君に感謝している者もいる。だが、残念ながらそうではない者もいるということだ」

ただの不幸で片づけたくないのだろう。特に、身内を亡くした者は、なんらかの吐け口を求めている。

その場合、白羽の矢が立つのは――立てやすいのは、誰なのか考えるまでもない。

「村に戻らない方がいいと言った、私の言いたいことが理解できたと思う」

呆然としたまま頷いた。

元凶は取り除かれたとはいえ、まだ火はくすぶっている。そこに新しい火種を入れたらどうなるか。嫌な想像しか浮かばない。

いや、自分はともかく、それにアリヤとレナファまで巻き込まれるような事態は想像もしたくなかった。

だが、それでどうするかと聞かれれば、答えようがない。元より行くあてなどないのだから。

「君と親しくしていた姉妹から、おおよその事情は聞いている」

内心を察したように、グレイセンが声をかけてきた。

「君には、記憶がないらしいな」

「……ええ」

正確には違うのだが、アリヤあたりがそう説明したのかもしれない。本当のことを納得してもらえるように説明できる自信はなかったので、正直助かったと思う。

なにより――

うっすらと気づいていた。ここが、この世界が自分のいた世界とは異なるものだと。

日本語を話す外国人風の人たちに、明らかに遅れている文明、見たことのない生き物。それらを目にして薄々と感じつつも、今まで考えないようにしたことだった。

そんなことを話しても、納得させるどころか正気を疑われるのがオチだろう。

「そこで、だ。私から提案がある」
「……なんでしょう」
「この街では現在、新しく兵士を目指す若者を募っている。それに名乗りを上げてみる気はないか？」
「……え？」
思いもよらなかった言葉に、思わず呼吸を忘れた。
（……兵士？）
誰が？　と思ったのが本音だ。
「本来なら、自分自身の素性もわからないという者を雇うことはないだろうが……君がどういった人間かは、すでに行動で示されている。私が推薦しよう。どうかな？」
「いえ、あの、ちょっと待ってもらいたいんですが」
いきなりすぎて、話についていけない。
「もちろん、すぐに決めろと言うわけではない。じっくり考えてもらってかまわない」
「そういうわけではなくて……自分には、向いていないかと」
「なぜそう思う？」
「そんな……経験もないし。戦うとか……」
「誰しも初めてのことはそういうものだろう。それに無責任なことは言えないが、兵士だからといって戦争にかりだされると決まったわけではない。主な役目は、街の巡回、犯罪の取り締まり、抑止といったところだ。君にとっても悪い話ではないと思う」
そうだろうか？
混乱しかけた頭を振って、思考をまとめてみる。
まず、村には戻れない。あんな話を聞いて戻る気にはなれない。
そうすると生きていくために働かなくてはならないが、何か仕事を探すにしても、自分みたいな素性の怪しい人間を雇ってくれるところはないだろう。
となると……兵士？
親切心で言われているのはわかるが、やっぱり、ピンとこない。

話を聞く限り、警察のようなものらしいが、それでも向いていないと思う。元の世界でも、警察を目指そうなんて思ったことは一度もなかった。

だが――

それでもはっきり断ろうと思えないのは、なぜだろうか？

――バンッ！

「コウイチが村を出ていく必要なんて必要なんてないわよ！」

驚いて振り向けば、知った顔が二つ。勢い込んで入ってきたアリヤと、その後ろをレナファがおずおずと、といった様子でついてくる。

「ア、アリヤ……？」

「コウイチ、あんたが出ていく必要なんてない」

硬い声をかけられながら詰め寄られ、思わず体を反らす。

（と、いうか……盗み聞き？）

いつから聞いていたのだろうか？

そんなことを考えている間にも、アリヤは困った顔をしたグレイセンを睨みつけた。

「おかしいじゃない。こんな怪我してまで姉さんを助けようとしたコウイチが、出ていかなきゃならないなんて」

声量は大きいわけではないが、その分こめられた怒りを感じさせるような口調。その怒りが誰のためのものなのかぐらいは、コウイチにもわかった。

その気持ちはうれしい、うれしいのだが――

怒りを向ける相手を、完全に間違えている。

「アリヤ」

「なによっ」

「その人を責めても、何もならない」

一瞬だけ眉を持ち上げてあと、アリヤはグレイセンから目をそら

した。理解はできるが、感情が追いつかないといったところだろうか。

こうなると、どうなだめていいかわからず、救いを求めてレナファを見る。が、申し訳なさそうな顔で首を振らっるだけだった。

グレイセンの言いたいことはわかるが、心情的にはアリヤと同じ――というのは、都合のいい解釈だろうか。

「落ち着きなさい」

口を挟んだのはグレイセンだった。

「……なんですか？」

激情を抑えるあまり、無機質な声でアリヤが応じる。

「君の怒りは理解できる。その原因の一つである私が口を出すのも筋違いかもしれないが、ここで彼が村に戻っても、君が期待するような日々は戻ってこないと思ったほうがいい」

アリヤが悔しそうに唇を噛む。どう言われても納得できない――その思いが、ありありと見てとれた。

「あの……」

声を出したのは、後ろにいたレナファだった。ゆったりとした部屋着の下に巻かれた包帯が痛々しい。

「コウイチさんは、どう思ってるんですか」

「それは……」

元の世界に未練はない、と言えば嘘になる。だが、二人と一緒に今まで通り暮らしたいというのが本心だった。

けれど、それはできないこともわかっている。

幸いにも、出ていった場合の当てもできた。この団長さんは信頼できる人だと思う。

ただ、兵士というのがひっかかった。やっぱりどう考えても向いていない気がする。途中で諦めて逃げ出す未来図しか浮かばない。

だが――今回の一件で思い知らされたことがある。

（僕は、無力だ）

盗賊に見つかったとき、逃げることしかできなかった。走って、

逃げ回って、逃げきることもかなわずに最後には殺されそうになった。助かったのは運だ。

もし力があれば、と思った。力があれば、今回みたいにこそこそ隠れて逃げ回るなんてことも、死にかけることもなかった。レナファが大怪我を負うこともなかったかもしれない。

ヒーローみたいな誰も彼も救うなどという、大それた力は望まない。大切な、近しい存在を守れる程度の力でいい。

兵士になれば、それを身につけることができるかもしれない。そうすれば――どう考えても好きになれそうにない自分を、見直せるかもしれないと思った。

（……なんだ）

答えは決まっているじゃないか。

「アリヤ」

「……コウイチ？」

「ありがとう」

不安そうな顔をしているアリヤの頭に手をのせる。

「レナファも……お世話になりました」

「コウイチさん……」

困惑している二人から顔をそらすと、グレイセンを向いて、頭を下げた。

「さっきの話、よろしくお願いします」

「コウイチ！」

アリヤが悲鳴のような声をあげた。

「コウイチに兵士なんて絶対無理よ！」

「そうかも、しれない」

「なら、なんで――」

「けれど、決めたから」

同じようなことがあっても、今度は二人を守れるような力が欲しいと。そう望んだからこそ、二人の厚意に甘えるわけにはいかない。

「コウ……イチ……」

「……ごめん」
「なんで……なんでよ！」
手を振り払ってアリヤが出ていく。その声が涙に濡れているような気がした。
それを追いかけようとレナファだったが、扉の前で立ち止まって複雑そうな表情で振り向いた。
「あの……」
何かを言いかけ、結局は何も言わないまま口を閉ざして出ていく。
二人きりになった部屋。
気まずい沈黙の中、グレイセンが口を開いた。
「……すぐに答えを出す必要はないが、よかったのかね？」
「はい……考え直すつもりは、ありませんから」
時間をおけば、決意が鈍る。またずるずると時間を無駄にする。それをしてしまえば何一つ変われない。
グレイセンが見定めるような眼差しを向けたあと、深々と嘆息した。
「君は自分が兵士には向いてないと言うが、私はそうは思えんな」
「……？」
「筋力や体力は必要だし、勇敢さも大事だが、それは後からでも身につけることもできる。それより、そうしたものを身につけるにあたっての心構えのほうが重要だ。目的意識がはっきりしているほうが人は伸びるし、窮地に追い込まれても粘り強いからな」
……なるほど。そういうものかもしれない。だが――
「僕に、それがあると？」
「私はそう見てるが、違うかな？」
どうだろう。今は確かにそうかもしれないが、三日後にはどうなってるかわからないし。
「話は私から伝えておく。すぐにどうこうということもないだろうから、しばらくはここで傷を治すことに専念していてくれ」
そう言うと、グレイセンは部屋から出ていった。

そうして部屋に一人残されると、なぜか胸がじくじくと痛んだ。
自分で決断したことに、早くも後悔しているわけではないが。
視界の端で、尻尾がゆらゆらと揺れていた。
「カセドラ……」
目を覚ましてから初めて会う。もしかしてもう出てこないのではと思っていたので、ほっと胸をなで下ろした。
そのカセドラはというと、なぜかふてくされたような顔をしていた。
「あの……なにか」
「聞いてたッスよ。兵士になるって本気ッスか」
「あ、ああ……自分でも、向いてない、とは思うが」
「いいんじゃないッスか。兄さんが決めたことなんだしー」
(……はあ)
「あの、カセドラ？　もしかして、怒ってる……とか？」
「べっつに～。けど、オイラに一言あってもよかったんじゃないかな～って思ったり～？」
「……は？」
嫌みったらしく、語尾を伸ばして喋るその内容に思わず唖然としてしまう。
「あーあー。せっかく色々と力になってあげたのに、そんな重要なことを決めるのに相談もなしッスか。ったく、世知辛い話ッスねぇ」
そんなこと言われても。けど世話になったのは事実だし、カセドラにも命を救われたようなものだし。
なんだか申し訳ない気分になって体を縮めていると、
「っていう冗談はおいといて」
(……冗談っ！？)
「いやあ～、おもしろいッスねぇ、兄さんは。ちょっとしたことで落ち込んだり焦ったり」
……ひょっとして、イジられてる？。
「それはともかく、どうするつもりッスか？」

「どうする、とは」
「あの子たちのことッスよ」
言葉に詰まる。二人が今どんな顔でいるのかと思うと、胸の痛みが強くなった気がした。
「決めたことをどうこう言うつもりはないッスけど、後に引きずるような別れ方をしないほうがいいッスよ」
その言葉に、いつもおちゃらけたカセドラのものとは思えないまじめな響きが感じられて、
「そんじゃ。ちょっとフラついてくるッス」
そう言った時にはすでに、照れ隠しのようにカセドラはその場から姿を消していた。

五日後――
なんとか歩けるようにまで回復したコウイチは、街の兵士に付き添われてクレイファレルの街を囲う外壁の門にまで来ていた。
門のすぐそばにある兵の詰め所には、二頭立ての馬車が止まっている。盗賊襲撃の際、怪我を負った者は街で治療を受けたが、彼らが村に戻るために用意されたものだった。
「……」
「しっかし急だよなぁ、オイ。あの嬢ちゃんも怪我が治るまでここで大人しくしてりゃいいのに」
ここまで一緒に来てくれた中年兵士の視線の先には、レナファがいる。本来ならまだ療養(りょうよう)していたほうがいいらしいが、本人たっての希望で村に戻ることにしたらしい。
「……」
「んあ？　どうした変な顔してよ」
「……いえ」
その理由を知るものとしては、押し黙る以外に返しようがない。
あれから、二人とは話せていなかった。
あのまま別れれば、間違いなく後悔する。それはわかっていたが、

二人から避けられていて話す機会がなかったのだ。
「おっ、もう出るな」
兵士の言葉通り、手続きを終えた御者が詰め所から出てくるところだった。
促され、レナファや他の村人が馬車に乗り込もうとする。アリヤはすでにその中にいた。
このままここに立っていれば、馬車は出てしまう。そして自分はそれをバカみたいに見送ることになる。それで、いいのか――
（……いや）
いいわけがなかった。
避けられていたのは事実だが、その気になれば話すこともできた。それができなかったのはこれ以上嫌われたくない、という自分の意気地のなさが原因だ。
意を決して馬車に近づく。
それに気付いたレナファが馬車の中に声をかけた。渋々と、といった様子で、アリヤが中から出てくる。
御者に頭を下げて、コウイチは二人に近づいた。
アリヤはなにも言わず、唇を噛んでうつむいている。レナファは、辛そうに目を伏せていた。
「あの……」
「なに？」
ぶすりとした返事にくじけそうになったが、どうにかこらえる。後悔はしたくない。
カセドラのアドバイスからずっと考えていた。
考えを変える気はない。ならどうするか。二人にはまだ返しきれない恩がある。ここで別れてそれで終わり、というのはあんまりだろう。
なにより、自分自身が納得できそうになかった。
だから――
「さようなら――」

「「っ！」」
二人の肩が、ピクリと震えた。
「……とは、言わない」
二人の視線が初めてこっちに向けられた。眉をひそめ、戸惑いの表情を浮かべている
「すぐには、無理だろうけど」
息を吸い、自分自身に言い聞かせるようにゆっくりと。
「少しでも自信がついて、落ち着いたら――そうしたら必ず、また会いに行くから」
どれぐらいかかるかわからない。見知らぬ土地、見知らぬ世界で、今まで縁のなかった道に進もうとしているのだから。けれど、だからといって甘えていられない。
「だから、できれば……それまで、待っていてほしい」
断られる可能性が頭をよぎって、すぐに顔を伏せた。だから、二人がどんな顔をしたのかわからなかったけど。
「……なに言ってんのよ」
「っ……」
「そんなこと……なんで頼むんですか」
（ああ、やっぱり――）
都合がいいにも程がある。想像はしていても、失望で体が熱を失っていく。
その体を温めたのは、
「っ……コウイチ」
「コウイチさん……！」
首と腰に回された二組の両腕。暖かい感触に、思わず全身を硬直させた。
「そんなこと、言われなくてもわかってるわよ」
「え……」
「バカにしないでください。あなたが私たちのために村を出ていくのはわかってるんですから」

「納得するまで時間はかかったけどね」
二人が離れ、少しこわばったような笑みを浮かべた。
「じゃあ、またね！」
「待ってますから」
そう言ってから、未練を振り切るように馬車に乗り込む。
真っ白になって立ち尽くしていたコウイチが我に返った時には、馬車は遠くまで進んでいた。
「え……っと」
振り返れば、ニヤついた顔の中年兵士が口笛を吹いて、同じような顔をしたカセドラがその横に浮いていて。
「たいしたもんだな、あの嬢ちゃんたち。……で、本命はどっちなんだ？　やっぱり姉貴のほうか」
そんなことを聞かれたりしたわけで。
（って……は？）
「あ、いえ。そういうわけでは」
そんなことを言ったらギョッとされた。
「まさかあの小さいほうか？　まァ、人の趣味にとやかく言うつもりはねェけどよ」
……いや、だから。そういう問題でもなくて。
「いえ、あの……彼女たちとは、そんな関係では」
今度はなぜか呆れられた。
「おいおい、そりゃないだろうが。あんな言い方されたら向こうだって期待しちまうぞ」
「……え？」
いや、だって。そんなつもりで言ったわけじゃ。
……あれ？　だけど、聞きようによっては、たしかにそうとられても……あれ？
困惑が焦りに変わって呆然としていると、背中をバンバンと叩かれた。
痛みに悶絶（もんぜつ）してる横で、兵士が豪快に笑う。

「ま、そういうこともあらァな」
カセドラも腹を抱えて笑っていた。
「いや、あの、ちょっと――」
「さ、見送りは終わりだ。帰るぞ新入り！」
「え……えぇ？」
「聞いてねェのか？　おまえさん、今日からここの兵士見習いだ。ご愁傷さん。今日から地獄のシゴキだな」
「え〝……今日から、ですか？」
「おうっ。怪我人だからって加減してもらえねェからな。ま、頑張れよ」
これほど嬉しくない励ましもない。心持ち肩を落として歩き出す。その足取りは重い。心の中も、期待よりも不安のほうが大きい。それでも、不思議と後悔はなくて。
「がんばるッスよー」
「……ああ、行こう」
カセドラの声に応じた返事は、コウイチにしては珍しく力強い声だった。

幕間．一時の別れと新しい道（後書き）

これにて話は一区切り。
これまでお付き合いいただきありがとうございました。
舞台は変わり、物語も新展開を迎えます。
次話『へたれ長じて兵士となる（仮）』
相変わらず成長速度の遅いへたれなコウイチ君ですが、気長に付き合っていただけると幸いです。
ではまた。

5．へたれ長じて兵士（見習い）となる（1）

とある裏路地の行き止まりにある、小汚い見た目の建物。それが、男の行きつけの酒場だった。

美味い酒や料理が出されるというわけではない。ましてや居心地の良さからは縁遠い。それでも男が無愛想な主人のいるこの店に足を運ぶのは、ここがどれほど騒いでもどこからも文句を言われない店だからだった。

「オヤジィ……酒だ」

すぐに空になったグラスに酒が注がれる。安いだけの売りの悪酒だが、酔ってしまえば味などわからない。今日は徹底的に飲んで、嫌なことをさっぱり忘れるつもりだった。

「なんだァ、また負けたのか？」

「……うるせェ」

常連の客からからかいの言葉を投げかけられ、男が憮然とする。男が大の博打好きで、日銭を稼いではそれを賭事に費やしているというのはすでに知られたことだった。

「くそっ……あと、もうちょっとだったんだ……」

グチグチとこぼす男の頭が、早くもふらふらと揺れている。このまま限界まで酒を飲み続け、酔いつぶれる寸前に叩き出される――それがいつものパターンだが、今日に限ってそうはならなかった。

男の視界の端に、この安酒場には似合わないものが飛び込んできたからだ。

「……？」

帽子を目深にかぶった娘が、中を窺うように入り口に立っていた。恐る恐るといった様子で足を踏み入れ、いかにも慣れていない様子で店内のあちこちを見ている。とても飲みにきたようには見えない。

「あの――」

「……あ？」

働かない頭でぼんやりと眺めていた男に、娘が近づいて声をかけてきた。

「このお店の主は、どちらに？」

「あぁ……？　店主ならアソコに――」

カウンターを指さしかけ、そこに誰もいないことに気付く。店の奥にでも引っ込んでいるのだろう。

「チッ……」

「あの？」

面倒くさそうに振り返り、男は娘が思ったよりも若く顔立ちも整っていることに気づいた。その顔を間近で直視しているうちに、ふと暗い考えが頭をよぎる。

「そうだな……」

唇を舌で濡らす。

言葉づかいからして良い家の育ちなのだろうか、高そうな服を着ている。振る舞いや喋り方も上品そうだ。……少しつつけば、美味い目が見れるかもしれない。

「教えてやってもいいが、かわりにちょいと付き合ってくれねぇか？」

酒の入ったグラスを掲げて揺らす。中に入った琥珀色の液体が波打った。

「申し訳ありません。お酒は飲めないので……」

娘が申し訳なさそうに頭を下げた。傍から見れば誠実な態度だったが、酒で濁った男の目にはそれが自分を小馬鹿にしているように映った。

「ちょっとくらいにはいいだろうが」

腕をつかもうと伸ばした手が空を切る。単純に酔いのせいで目測を誤ったからなのだが、男には娘が飛びのいてよけたように見えた。

「んだァ……？」

その些細なこと、たったそれだけで、男の思考は黒く塗りつぶされる。元の性格からして短気だが、酔いと博打で負けた腹立たしさ

がそれを増長させていた。
　ゆらりと立ち上がり、娘を突き飛ばす。小さな悲鳴を上げて、娘は尻をついた。
「チッ……どいつもこいつも……バカにしやがって」
　おぼつかない足取り男は娘に近づいた。
　険悪な雰囲気に店中の視線が集まる。さすがに男の行動に顔をしかめる客もいたが、止めようとする者はいない。男の酒癖を知っている彼らにとって、こんなことで巻き込まれるのはバカバカしいことだった。
「てめえも……オレをバカにしてんだろォ……？」
　娘の細い腕を掴んで引き起こす。娘の顔が痛みに歪み、苦しそうな声をあげた。男の口端が、弱い者をいたぶる時の快楽に歪む。
「何を……なさるのですか？」
　困惑の混じった、素朴な問いかけだった。
「あぁ……？」
　男が気に入らなかったのは、娘が怯えていないことだった。怯え、救いを求めるような目を期待していたのだ。
　拳を握り、振り上げたときも娘は怯える素振りを見せない。それで男は拳を下ろすタイミングを失った。脅しをかけるつもりで振り上げた拳が、振りおろされる。
　最後まで、娘は目を閉じなかった。
　バシィッ――
　男の拳が途中で止まった。男が止めたわけではない。
　腕を誰かにつかまれたのだ。
「そこまでに、したほうがいいかと」
　ボソボソとした抑揚のない声。振り返ってみれば、そこにいたのは黒髪の青年だった。この酒場の常連ではない。一瞬いぶかしんだが、その疑問はすぐに投げ捨てられた。
「てめえも……バカにすんのか？」
「は？　……っ！」

ふりほどきながら振るった拳を、青年はとっさに飛び退いてかわした。
「っ……！」
「邪魔すんじゃねぇよ！」
力任せに拳を振り回す。当たれば骨が折れてもおかしくないほど力のこもった打撃だ。それでも、青年には当たらない。すべてを危うげない動作でかわされていた。
「ヤロウ……！」
男にはなんで当てられないのかわからなかった。
酔っているとはいえ、喧嘩慣れはしている。肉体系の日雇い仕事で鍛えた体は、そこらの男より力があるはずだ。
「だらァ！」
業を煮やして、男は肩から突っ込んだ。床に倒して蹴りつけるつもりだった。

――ズダァッ！

直後、男は天井を仰ぎ見ていた。
「あ……？」
何が起こったのかすらわからない。
「今の、うちに」
「ですが――」
「大丈夫、ですから」
青年が娘に声をかけていた。ためらう様子を見せながらも、娘は一礼して店から出ていく。
「てめえ……」
男がのそりと立ち上がった。痛みはあったが、それを怒りが帳消しにしている。近くにあった酒瓶を叩き割り、それを青年へ向けた。
明らかに度を過ぎた男の凶行に、戻ってきた店主が止めようとする。

他の客の怒声やはやし立てるような声で店内は騒然としたが、頭に血が上った男の耳には入らない。

「おおっ！」

酒瓶とはいえ、割られた部分は鋭く尖っている。思い切り人に刺されば命に関わるような怪我を負わせてもおかしくはない。そうした後先のことなど考えない、腰だめに構えての突進だった。

青年が一歩後ずさる。同時にその手が酒瓶にそえられた。そして――

バシィ！

男の視界が、ぐらりと揺れた。足から力が抜けて、そのまま床に崩れ落ちる。

「な……にが……」

――何が起こった？

実際には青年が酒瓶がそらした直後、逆の拳が男の顎を打ち抜いただけなのだが、死角からの一撃を男の目はとらえられなかった。

わけがわからないまま混乱しているうちに腕をとられ、そのままひねりあげられる。

「イ――イダダダダ！　な、何しやがるテメエ！」

「いえ、あの……どうやっても、大人しくしてくれそうに、なかったので」

「ふっざけんなゴラ！　いいから離せブチ殺すぞ！」

はあ、と嘆息。首のあたりに衝撃を感じて意識を手放したのはその後のことだった。

そして次の日――

「……んだぁ？」

男が目を覚ましたのは、裏路地の片隅。記憶をきれいさっぱりなくし、なんで自分がこんなところにいるのかもわからない。

首をひねりつつも、それは男にとってそれほど珍しくもないこと。

どうせいつものように意識が飛ぶほど飲んだだけと思い直し、日が暮れるころにはそれを疑問に思うこともなくなっていた。

◆

クレイファレルの街は二つの隣国との国境近くに位置し、かつて要衝（ようしょう）の街として発展した歴史がある。

現在では平和も長く、多くの外国人を受け入れる玄関口となっているが、かつての要衝都市としての名残（なごり）は街のそこかしこにあった。

街全体を覆う分厚い外壁、その上に設けられた物見の塔、出入りを制限するための鉄製の大きな門。町中に引かれた水路と、そこにかけられたいくつもの跳ね橋。

そしてそのうちの一つ、現在の兵の数の割には広大すぎる練兵場（れんぺいじょう）の一角で、一組の男女が向かい合っていた。

「――で？」

喉元に突きつけされた鋼鉄の剣よりも、さらに冷たく硬質な声。

喉がごくりと鳴り、汗がこめかみを伝う。油断も気の緩みも感じさせない目の前の相手に、コウイチは立ち尽くすことしかできない。

背後の地面には、ついさっき弾き飛ばされたばかりの剣が突き刺さっている。ようするに、今は武器もなく、この劣勢（れっせい）を挽回（ばんかい）する手段も思いつかない。

「参り……ました」

切っ先がはずされ、同時に体から力が抜ける。そのままへたりこみたいところだが、前にそれをやってひどい目にあったのでなんとかこらえた。

そうして気を抜いた直後。

ベシィッ！

視界一面に火花が散り、コウイチはその一瞬だけ気を失った。

「な、なにを……」

剣の平で殴られた頭を抱えてうずくまる。訓練用の剣は刃が潰されているが、そんなことなどまるで関係のない一撃だった。
「気を抜いたよね？　それじゃへたりこんだのと同じ。敵と向かい合ってる時に油断するな」
「だが、あの状態ではもう負けなのでは」
「実戦の時もそうやって諦めるつもり？」
声の温度がますます下がった気がした。
「最後の最後まで諦めないで逆転ってこともあるんだ。その逆もね。訓練だからって舐めてかかったら本番で死ぬよ？」
そう言われると返す言葉もない。
「……はい」
うん、と頷いて、女は剣を鞘に納める。
「じゃ、これで終わり。いつも通りしっかりと筋肉をほぐしとくことね」
さっきまでとはまるで別人のようなさばさばした口調だった。いつもこんな感じならいいのに、と自分と同じくらいの年齢の女を見上げる。
訓練時は淡々として、まるで容赦のない彼女だったが、それ以外の時はさっぱりした性格だった。本人いわく、あまり考え込むことはないそうだが、その性格に合わせたように浅黄色の髪を肩のあたりですっぱり切りそろえている。
「ありがとう、ございました」
一礼すると、ん、と小さく頷き返された。
ここではたった一人、他でもあまり見かけない女の兵士だそうだが、実力はこの街の兵士たちの間でも上位に入る。
それじゃ、と手を振ってすたすた去ってしまう女を見送って、
（……疲れた）
その姿が見えなくなったところで、コウイチは大の字に倒れた。
投げ出した手がじんじんと痺れている。
「ドーン！」

「へぶ」
そうして気を抜いた油断した瞬間、腹に重い衝撃を感じてコウイチは潰れた悲鳴を上げた。
「な、何を……」
「油断するべからず、ッスよ、兄さん」
そうしてニヤリと笑ったかと思えば、腹の上にいるそれはどこか投げやりに聞こえる声でこう続けた。
「で、これで何敗目ッスか？」
丸い胴体に細長いしっぽ。コウモリのような皮膜場の翼。そのすべてが紫色で、人の言葉を喋るがなぜか自分以外の人間には見えない。一言で言えば、謎生物。……本人が言うには精霊で、カセドラという名前らしい。
「さあ……」
五十を越えたあたりから数えるのをやめている。
「つーかもういい加減、負けたのをからかうのは飽き飽きなんスけど。いつになったら勝てるんスか？」
うっさい。これでも一応は成長している。
今の模擬線（もぎせん）にしたって剣を一回合わせただけで弾き飛ばされることがなくなったし、訓練中に気絶することもなくなった——などと反論すると、カセドラに白い目を向けられた。
「……言ってて情けなくならないッスか」
「……いや、まあ」
気まずげに目をそらす。相手が自分よりもはるかに長く訓練を受けているとはいえ、こうも負けが続くと情けないと思う気持ちすらなくなってくる。
（がんばっては、いるんだが……）
訓練を受け始めた頃に比べると、かなりマシにはなったと思う。
始めの頃は本当に地獄だった。
肉体的にも、精神的にも、ぎりぎりまで追いつめられ、いじめぬかれた。朝から昼まで半日中走らされたかと思えば、そのまま倒れ

込んでもおかしくない状態で午後は全身の筋肉トレーニング。
ある程度、筋力と体力がついてきたかと思えば、今度は素手や木製の剣を使っての模擬戦。体から痣が消える日がないほど打ち合った。
その間、自分の弱さを徹底的に、嫌と言うほど思い知らされた。他の募集者のように逃げ出さなかったのは、単純にそれだけの体力が残っていなかったからにすぎない。
それでも一ヶ月経つ頃には、吐き気を覚えずに食事をすることができるようになったのだが。
（……まあ）
こんなふうに鍛えていれば、それこそタチの悪い酔っぱらいの一人くらいあしらえるようになる。というか、ならなければさすがに泣ける。
（気がついたら異世界でした、か……）
ファンタジーもののストーリーでは定番中の定番という展開なのだろうが、普通それに巻き込まれるのは、英雄になるような人間なんではないだろうかと思う。元々そういった素質があるとか、なにか特別な能力を与えられるとか。そういうのが当然の流れではないだろうか。日常生活では持て余す特殊なスキルを持っていて、異世界ではそれを十分に発揮して群がる悪をバッタバッタとなぎ倒し、助けたヒロインにはモテモテで寛容な女性陣に囲まれてハーレム完成とか。あるいは先祖代々勇者の血筋で異世界に呼び出されたのも運命のいたずらとかそんな感じで、なぜかピンチの時には予定調和的に助けがきたり、自分が助けに入るときは土壇場のギリギリ、それこそオマエ出待ちしてたんじゃネーカ？　ってタイミングだったりとか。
「兄さん兄さん、負のオーラが滲み出てるッスよ」
「……はっ」
おっといけない。危うく負のスパイラルにはまるところだった。
――とにかく、そのどちらでもない自分としては、生きていくた

めに鍛えるのは必然なのかもしれないが。約半年前まで、何一つ波乱のない平凡な人生を送ってきた身としては正直つらい。
「ならそろそろ逃げるッスか？　今ならその余裕もあるんじゃ？」
「……いや」
自分の我慢強さが理由でないとはいえ、なんとかこれまでやってこれたのだ。今逃げ出すのは……なんというか、もったいない気がする。
それに――
三ヶ月前に再会を約束し、別れた姉妹のことを思い出す。最低でも、あの約束を果たすまで逃げ出すわけにはいかない。
「……律儀（りちぎ）ッスねー」
「当然の、ことかと」
「けどそのためにはまず、あの子に勝たないといけないんスよね」
う、とコウイチの顔が苦虫を噛んだように歪む。
それはそうなのだが、未だに一本とるどころか、惜しいと思えたことすらない。
「……はあ」
手の平をじっと見る。最初はマメが出来ては潰れての繰り返しで血だらけだったが、今ではだいぶ硬くなってきていた。
それなりに鍛えられているとは思うが、一度も勝てないとそれすらも疑いたくなる。
さすがにカセドラが同情的な言葉をかけてきた。
「まあ相手が悪いッスよね。なんせ、あの人の娘なんスから」
「……まあ」
カセドラの言葉に脳裏にある人物を思い浮かべかけ、近づく足音に気づいた。
「リゼ、さん……」
さっきまで模擬戦で剣を交えていた女兵士だった。
（聞かれた……？）
聞かれてまずい内容を話していたつもりはないが、傍目（はため）には独り

言をぶつぶつ言っているように見えるので、少し気まずい。
「気にしないでいいよ。コウイチが独り言が多いっていうのは、もうみんな知ってるから」
「……はあ」
それもどうだかなー、と微妙な心境でいると、
「忘れてたんだけど、セナード様が呼んでたよ。自分のところに来てほしいって」
そう言われた。
「え……それはいつ聞いた話で？」
「訓練を始める前、かな？」
（……え、）
って、もうかなり経っているのでは？
視線で問うと、リゼが小さく頷いた。
「うん。だから急いだほうがいいかもね」
え……えぇー。
脱力しそうになるが、そうなると急がないわけにもいかない。慌てて立ち上がって駆け出すその背に、
「そうそう。アドバイスってわけじゃないけど」
リゼが声をかけてきた。
「強くなってきてるよ、確実に。期待してるから」
思わぬ不意打ちに転びかけて振り返ると、彼女はすでに一人で素振りをしていた。

訓練に使っていた練兵場からほど近い場所に、一件の大きな家がある。
（というより……屋敷？）
この街では珍しい三階建ての建物に、広々とした敷地。門構えも立派で、見上げるだけで気後れしてしまいそうな雰囲気がある。
急いで訪ねたコウイチが名前を告げると、すぐに中へと通された。
（……本物の執事と、メイド）

パット見は地味だが実用的な衣装を見ると、本物なんだなーと思う。

階段を上がり、二階の中ほどにある部屋の前で案内役のメイドが止まった。

「旦那様。コウイチ様をお連れしました」

「どうぞ」

声はすぐに返ってきた。怒っているような声でないことにほっとしつつ、メイドの開けた入り口を恐る恐るくぐる。

執務机の椅子から、中年の男性が立ち上がるところだった。一礼すると、メイドは部屋から出ていく。

「すまんね。わざわざ呼び出して」

「いえ、あの……すいません。お待たせしたみたいで」

「ああ気にしないでいい。訓練をしていたのだろう？」

こうして面と向かい合うのは二回目だった。一回目は兵士になる直前のことだ。

セナード・アレル・クレイファレル。

クレイファレルの街と、その一帯を統べる領主――つまり、ここらへんで一番偉い人……らしい。

領主と言っても、政治家みたいな印象はなく、上品な家庭の良いお父さんといったところだ。ちなみに、今の雇い主でもある。

「とりあえず座ってほしい」

向かい合わせに置かれたソファに腰掛け、対面のソファを勧めてきた。立っている方が気が楽なのだが、そう言われては断るわけにもいかない。

座るとすぐにドアがノックされ、案内してくれたメイドがお茶を運んできた。目の前にそれを置かれ、普通の客相手のような対応に戸惑う。そのメイドに、セナードさんが一言二言言いつけている間に、とりあえずお茶を口に運ぶ。

「……」

たぶん、上質なものなのだろうが。なんだか上品そうな感じはす

るが、ぶっちゃけおいしいかどうかはよくわからない。
味の感想を聞かれたらどうしよう、と思ってドキドキしたが、幸いにも質問は別のことだった。
「ここでの生活は慣れたかね」
「ええ、まあ」
「キミの話は聞いている」
「え……」
どんな内容だろうか？
（……っ、まさか）
コウイチの脳裏に、クビ、の二文字が浮かんだ。
「きっとそれッスよそれ」
なぜかうれしそうに口を挟んでくるカセドラ。
（いや、まさか、そんな）
クビにされるような失敗をしたつもりはないが、ここは異世界。雇用保障などない。ましてや見習いの身だ。普通の職業に例えれば、研修期間のようなもの。
（いや、だからこそ、その逆という可能性も）
「条件もクリアしてないのにッスか？」
カセドラのツッコミに、見習い卒業という前向きな予想もあっさりと潰される。
「……どうしたのかね？」
なぜか気遣うような声をかけられた。壁にかけられた鏡を見れば、蒼白（そうはく）になって虚ろな笑みを浮かべている自分がいて。慌ててなんでもないふうを装う。
「具合が悪いようなら、また日を改めるが」
「いえ、なんでも。大丈夫、です」
「そうか」
とりあえずは納得してくれたらしい。
「で、話の続きだが……ずいぶんと励（はげ）んでくれているようだな。その様子ならすぐに一人前の兵士になれるだろう」

「へ……」
「これからも修練を重ねてくれ」
と、いうことは。
（まだ、雇ってもらえる……？）
「チッ」
なぜか舌打ちが聞こえた気がしたが、それすらも気にならなかった。……とりあえず、謎生物は後でどついておこうと思ったが。
心の中の誓いなど聞こえるわけもないセナードが、それと、と言って身を乗り出す。
「何か困ったことがあったら、誰でもいい。相談しなさい。それを無下（むげ）にするような者はいないはずだ」
「あ、はい。それは……」
領主の人柄だろうか。先輩の兵士たちは、親切でかなり助けられていた。
……まあ職業柄、荒っぽいところもあるが。
それはさておき――
自分はいったいなんで呼ばれたのだろうか。まさか近況を聞かれるためだけとは思えない。
「さて、君を呼んだ理由だが」
そう言いおくと、セナードは探るような眼差しを向けてきた。
「違っていたら申し訳ないのだが……昨晩、君は何かトラブルに巻き込まれなかったかね？」
「は？」
思わずぎくりとする。昨日のことはまだ誰にも言っていない。店主から、大事にしたくないとそう頼まれていたからだ。大した被害はなかったし、巻き込まれた女の子は逃がしてしまったのでコウイチもその提案に乗ることにしていた。……直後に差し出された口止め料は、さすがに断ったが。
その反応を見て、セナードが小さく頷いた。
「ふむ……心当たりがあるようだね。当ててみせようか。君は昨夜、

酒場で一人の娘を助けた。……違うかな？」

「……！」

なんでそのことを――思わず目を見張るコウイチの背後で、ノックの音がした。

「おや、もう来たか。どうぞ」

「失礼します」

若い女の声に振り向くと、一人の少女が見とれるような動作で部屋に入ってくるところだった。

（あれ……？）

どこかで見た覚えがある気がしたが、思いつかない。ドレスを着ているところを見ると、領主の家族かなにかだろうか。それなら見かけていても不思議はない。

上品な服装ときれいな姿勢、整った顔立ちよりも先に目についたのは、背中の半ばまで伸びた金髪だった。

よほど手入れされているようで、なめらかというか思わず触ってみたい衝動にかられる。というか、こんな立派な髪の持ち主ならすぐに思い出しそうなものだが。

娘はコウイチと目が合うと、楚々（そそ）と微笑んだ。その笑顔によそ行きのものではない何かを感じて、コウイチの胸が高鳴る。

すぐそばに来た娘に、セナードが声をかけた。

「彼で間違いないかね？」

「はい、お父様」

（……おとう、さま？）

ということは――

セナードが立ち上がって、彼女を手で示す。

「紹介しよう。私の娘で――」

「フェリナ・リース・クレイファレルと申します。昨晩はお礼も言わず、大変失礼をいたしました」

5．へたれ長じて兵士（見習い）となる（2）

夕暮れ時、ぽつぽつと盛り上がり始めた酒場の端のテーブルで、コウイチは頭を抱えて突っ伏していた。

（なんという、偶然……）

領主のセナードと話をしてから数時間後、あまり働かない頭で、ことの経緯を振り返る。

本当に偶然なのだ。

夜の街では明らかに浮いている少女を見かけたのも、気になって後をつけてみたら案の定と言うべきか、その少女がトラブルに巻き込まれそうになっていたのも、そしてそれを助けたのも。

それが――その相手が、この街に住む領主の娘だったなんて。

たまたま助けた相手が、上司であるお偉いさんのご令嬢。

（……お約束？）

あまりにも物語的ご都合主義な展開に、思わず何かの罠では？と疑ってしまったほどだ。

……なんの罠なのかはさておき。

「おいおい、コウイチよ」

コウイチの対面から、苦笑混じりの声がかけられる。

「いつまでそうやってるつもりだ？　さっさと話せよ」

のそのそと顔を上げると、中年男のいかつい顔が目に飛び込んできた。

「バーナルさん……」

同じクレイファレルの街で働いているベテランの兵士だった。年齢は一回り以上離れているのだが、なぜかよく酒に誘われる。いくら飲んでも変わらないところが気に入った、と言っているのだが、本当かどうかはよくわからない。

「あの領主殿がわざわざおまえの訓練を減らしてやってくれって言ってきたんだ。何を頼まれた？」

役職についているわけではないが、最年長のバーナルは兵士たちのとりまとめ役をしている。隊長職を勧められたこともあるらしいが、面倒を嫌って断ったと聞いている。

そのバーナルに話がいっていること自体はおかしくないのだが。

「理由も、聞いているのでは」

「おおまかにはな」

……なら、話す必要もないのでは？

コウイチの疑問を察したのか、バーナルがクク、と笑う。

「まあそこらへんはな。おまえの口からも聞いときたいんだよ。どういうやり取りがあったのかってこともな」

深々と背もたれに体を預けて、バーナルはすっかり聞く体勢に入った。

あまり話したくないことだけに、コウイチは目をそらして眉根をよせる。なにしろ、あの後で話した内容は、フェリナとの再会が序の口のようなものだったから。

コウイチは観念したように、ぽつぽつと起こったことを話し始めた。

フェリナと再会したあの後――

すぐに彼女はセナードの言いつけで部屋を出ていってしまった。面と向かい合ったセナードが、おどけた口調で言う。

「驚いたかな？」

「……ええ、まあ」

驚きすぎて、礼を言うフェリナにうまく言葉を返せなかったほどだ。

「驚いてなくても同じようなもんじゃないッスか？」

（……まあ）

それはさておき。

言われるまで気づけなかった理由は、あの長い金髪だろう。昨日会った時には、彼女はあの髪を隠していた。まず目につく部分を隠

されていただけに、すぐに気づけなかったのだ。
（というか、昨日はなんであんな場所に……？）
領主の娘が、お忍びとはいえ行くような店ではないと思う。
「――さて」
セナードが、気を引くように一言。
「君にここに来てもらったのは、娘に礼を言わせるためだけではない」
「……では？」
「君に、頼みたいことがある」
「頼みたいこと、ですか？」
嫌な予感が鎌首をもたげる。自分の場合、こういうネガティブな予想はたいてい当たるのだが、
「君には、娘の護衛を頼みたい」
「……は？」
これは予想もしていなかった。

「あの娘が夜の街を出歩くのは、昨日が初めてのことではなくてね。始まったのは最近だが、それからほぼ毎日といっていいように外出するようになったんだ」
「はあ……」
「何度か止めているのだがね、素直な娘だが、このことに関しては首を縦に振ろうとしない。何か事情があるらしいのだが」
これが本人を見ていなければ、年頃の女の子が夜遊びの楽しさを覚えたとでも思えるのだが。あのいかにも令嬢らしいたたずまいのフェリナに、夜遊びのイメージが結びつかない。
「その、事情とは？」
「それを話してくれなくて困っている」
「……はあ」
いいのかそんなんでと思う。この世界の、自分からしてみたら古臭くも感じられるような価値観。それに彼女の立場からすれば、か

なりの大事ではないだろうかと思うのだが。
　自分から悪いことに手を染めることはないにしても、誰かにそそのかされるということもあるだろうし、昨日みたいに酔っぱらいにからまれる可能性だってある。
「無理矢理にでもここに閉じこめておくという手もあるのだがね。私としては、あの子の意志を無視するような真似はしたくない」
「だから、護衛をと？」
「その通りだ」
　はっきりと頷くセナード。
　コウイチは戸惑い、首を傾げた。人の――それも雇い主の家庭の事情に口を出すようなことはしたくないが、やはり夜の外出そのものを止めさせたほうがいいのではないだろうか。
　もちろん口に出しては言ったわけではないが、そんな思いをセナードはあっさり見抜いたらしい。
「親のひいき目に思えるかもしれんが、あの子はただの箱入り娘というわけではない。自分の立場も、世間というものもよく知っている。その上でなお外出をやめないのは、そうしなければならない理由があるということだろう。私はそう思っているよ」
　言葉だけ聞けば単なる親バカ発言だが、相手が娘だからという理由で目を曇らすような人には思えない。それに事情も話さない娘の勝手をただ許すほど、甘いようにも見えなかった。
「その……なぜ、自分を？」
　護衛役なら、他にもふさわしい相手がいるだろう。わざわざ見習い兵士の自分が頼まれる理由がわからない。
「交換条件だ。昨日の話を聞いた後では、さすがに一人で外出させるわけにもいかないのでね。外出するのは日が沈むまで。さらに護衛をつけるなら今までどおりにしてもいいと伝えた。そうしたらあの子が、護衛をつけるなら君がいいと言い出してな」
「え」
「正直に言えば、私としても好都合な面がないわけでもない。領主

の一人娘が夜中に出歩いているなど、あまり人に聞かせられない話だ。その点、君にはすでにそのことを知られている」

……そもそもさっきまで、彼女が領主の娘だということすら知らなかったわけなのですが。

「それに君は、あのグレイセン殿が推してきた若者だ。人柄も信用できるだろうと思ってね」

グレイセン――盗賊に殺されかけたところを救ってくれた命の恩人であり、路頭に迷いかけた自分を兵士に推薦してくれた壮年の男性だった。

この街に駐留している騎士団の団長で、あれから何度か顔を合わせてはいるのだが、挨拶程度にしか話をしていない。

「あの……」

ちょっと失礼かなと思いながらも、前から気になっていたグレイセンのことを尋ねると、セナードは目を瞬かせてから納得したように頷いた。

「そうか……君はこの街で初めて彼に会ったのだな。それにしても、以前に彼の名前をどこかで聞いた覚えはないのかね？」

「いえ」

ひょっとして、知っていないとおかしいほど有名人なのだろうか。

「私のように地位と立場を父から受け継いだわけではなく、一代で今の地位についた傑物だよ。能力については言うに及ばず、人格も高潔な方だ」

セナードが顎をさすりながら話し始めた。

「この街に駐留するにあたって、彼にはこの屋敷での滞在を勧めたのが断わられてね。理由を聞くと、いざという時、少しでも早く動けるよう、兵舎に泊まりたいと返された。そういう方だよ」

元々部屋が余っていたこともあり、騎士たちは兵士が寝泊まりしている兵舎に泊まっている。コウイチも当然そこで生活しているのだから、寝泊まりする場所としてはこの屋敷のほうがはるかに快適だろうぐらい想像はつく。

それなのにセナードの話を断ったということは、よほど控えめというか、生真面目な人なんだろうなと思う。

セナードが穏やかな笑みを浮かべた。

「私にとっても尊敬できる友人だ。私などが友人というのも、おこがましい気もするがね。もしあと二十歳私が若かったら、立場もわきまえず彼の元で働くことを望んでいただろう。そう思える人物だよ」

そう語るセナードの言葉の節々に、グレイセンに抱く絶対的な信頼が感じられた。

（……あれ？）

ふと疑問が浮かぶ。

そんな人のいる騎士団が、なぜこの街に駐留しているのだろう。前に聞いた話では、騎士団がこの街にいるのはあくまで臨時のことで、駐在所があるわけでもない。ここが国境に近いとはいえ、そんなに問題のある街でもないと思うのだが。

そのことを聞くべきかどうか迷っていると、

「ああ、話がわき道にそれてしまった。それで、だ。話を戻すが、護衛の件、引き受けてくれるかね？」

忘れたかった話題をぶり返された。

（……というか、領主の娘の護衛？）

それって、かなり責任重大なのでは？　自分一人のことだけでも持て余すのに。はっきり言って自信がない。

（……いや）

荷が重い――今までだったら、そう言い訳して逃げてきた。

そんな自分を変えたいと思ったからこそ、今の環境に身を置いたのだ。なのに、また逃げ出してどうする？　今変わらなければ、いつまで経っても変われない。

（やれる……はずだ……かもしれない）

自分だって鍛えている。昨日だって、前までの自分なら何もできずに終わっていたはずだ。

コウイチは意を決すると、顔を上げてセナードの目をまっすぐに見た。
「わかり、ました」
「で、引き受けたってのか？」
「……はい」
いくらか落ち込んだ声で、コウイチが答えた。
話を引き受けた時はまだ気分的に盛り上がっていたが、時間が経つにつれて不安ばかりが大きくなっている。
セナードには、
『無理はする必要はない。何かトラブルに巻き込まれそうになったら、あの娘を引きずってでも逃げてくれればそれでいい』
と言われているが、弱気の虫が頭をもたげて落ち着けない。もし何か失敗したら、と不安になって、料理の味もわからなくなっていた。
「そっちでもじゃじゃ馬娘のお相手ってわけか。よかったじゃねェか、両手に花で」
腹を抱えて大笑いするバーナルを、恨めしそうに見る。ケタケタというカセドラの笑い声も重なって聞こえてきた。
何度か話して気づいたのが、この人がカセドラと似たようなタイプだということだ。すなわち、人の不幸を酒の肴にするような。
「なに言ってんスか。オイラは兄さんのためを思って」
うっさい。そう思うならそのニヤケた顔をやめろ。
「領主殿はお嬢さんを溺愛してるからなあ。これで何かあったら、その日からこの街にいられねえな、おい？」
ニタリと意地悪そうな笑みを浮かべて、バーナルが不吉なことを言ってくる。
（お、鬼……）
これでいて皆から信頼されているというのだから、人間よくわからない。……まあ、その強さは鬼と思えるほどなのだが。

頭を抱えてうずくまっていたコウイチは、なので、
「しかしあの人もずいぶん思い切った手を打ったもんだな」
クククという笑い声の間にもらしたバーナルの言葉を聞き逃していた。
「……え？　今、なにか」
「なんにも。……けどよ、同じじゃじゃ馬でもだいぶ気色が違うわな」
バーナルの言うもう一人のじゃじゃ馬の姿が浮かび上がり、コウイチの頭に鈍痛が走る。
「で、どうだ？　あのじゃじゃ馬から一本とれたか？」
「いえ……まだ」
力なく頭を振る。一本どころか、かすりもしない。
「約束は果たさねェと、なあ？」
ニヤニヤと笑うバーナル。姉妹との別れの時、付き添ってくれた兵士が彼だった。その時から何かと気にかけてくれるのはありがたいが、同時にからかってくるのは勘弁してほしい。
（……まあ、でも）
バーナルの言いたいこともわかる。早く現状から抜け出したいという思いは、自分にだってあるのだ。
兵士見習いであるうちは、給料などほとんどあってないようなもの。日々の食事と住む場所は提供されるが、もらうお金は雀の涙ほどだった。
見習いのうちはこんなものらしいが、これではいつまでたっても約束を果たせそうにない。今だって酒場で飲んでいる分のお金は、すべてバーナルに払ってもらっているぐらいだ。
そして見習いの立場から抜け出せるための条件――それが、バーナルの言うところの『じゃじゃ馬』であり、彼の娘でもあるリゼから一本とることだった。
「おっと。噂をすれば、だな」
バーナルが手を挙げる。その視線の先に振り向くと、いつもの兵

装とは異なる身軽な格好をしたリゼが近づいてくるところだった。
「……では、僕はこれで」
「ああ。あの件はもう今日からだったか。まあがんばれよ」
すれ違いざまリゼに会釈をして酒場を出る。怪訝そうな眼差しに見送られながらも、コウイチは与えられた役目を果たすために約束の場所に向かって歩き始めた。

◆

「まあおまえも飲めよ」
バーナルが娘のリゼに椅子を勧めて、新しい酒と酒杯を注文する。
「母さんに言われて迎えに来たんだけど」
「あいつだっておまえを迎えによこしたんならこうなることくらい予想してるさ」
それもそうか、とばかりにあっさりとリゼは腰を下ろした。迎えにきた娘に酒をつきあわせるのは、珍しいことではない。
手ずから娘の杯に酒を満たしてやり、バーナルはあっさりと話を切り出した。
「で、どうだ？　あいつは」
「コウイチのこと？」
「ああ」
「才能はないね」
ばっさりとリゼが断言する。
「おいおい。そりゃ特別な目で見たら、だろ？　平均的な物差しで測ったらどうなんだ」
「……普通だと思う」
「そうか」
グビリと喉を鳴らして、酒を一口。
（そうだろうな）
娘の見立ては間違っていないと思う。何度か剣を振っているとこ

ろを見たことがあるが、特に目につく部分があったわけではない。といっても、筋が悪いというわけでもない。ようするに、普通なのだ。

「……根性はあるんだがなあ」

今回の新兵募集にあたっての、素質のない者を振り落とす意味での訓練。その内容を主に決めたのが、バーナルとリゼの二人だった。

バーナルにしてみれば、娘にしたのと変わらないレベルの訓練だったが、後で隊長に難色を示されたほど厳しいものだったらしい。

そして、それに耐えたのはコウイチだけだった。

「それは認める。けど、グレイセン団長がわざわざ推薦してくるほどじゃないと思うよ」

（おっと、本音が出たな）

バーナルがうれしそうに口端を持ち上げる。

「聞いているだろ？　あいつが推された理由は、別に強いからでも才能があるからでもないってこと」

戦う術も知らないのに、一人で盗賊たちの囲みを抜けて助けを求めに来ようとした。それも、自分が世話になった姉妹を助けるために。その勇気がグレイセンのコウイチを推薦する理由だと、そういう話が兵士たちの間では出回っていた。

「……」

リゼが、わかってはいるけど、という顔で押し黙る。その心情が、バーナルには透けて見えた。

コウイチが来た直後から、ある噂が広がっていた。

騎士団の団長とはいえ、グレイセンはこの街ではなんら権限を持たない。その彼が、領主であるセナードにコウイチを推薦した。なぜか？

――いずれは、自分の騎士団に加えるつもりなんじゃないか？

リゼが気にかけているのは、その根拠もない噂話なのだろう。

「安心しろよ。ありゃあただの噂だ。よしんば本当にそうなるとしても、おまえの後だろうよ」

「……」
「あの団長殿が、女だからって差別しないことぐらい知ってるだろ？」
強さがものを言う戦士職でも、性別の壁は実力以上に大きい。だというのに、グレイセンの騎士団にはすでに女の騎士がいた。しかも、グレイセンの片腕を務めているほどの強者だ。
その地位を、彼女は実力で勝ち取っていた。その戦いぶりも鮮烈で、少なくとも女だからと正面きってバカにする者はもういない。
バーナルもその腕前は知っている。リゼが戦えば、十本やって一本とれるかどうか、というところだろう。
「焦るこたねえさ。あそこは特別だ。おまえぐらいの年で入ろうと思っても入れるもんじゃねえ。今は地道に腕を磨くことだな」
リゼの腕も、決して悪くはない。幼い頃から鍛えてきただけに、同年代では間違いなく上位に入る。それでもまだグレイセンの騎士団に入るには及ばない。
「ああ、それでコウイチのことだがな」
バーナルはこの話はこれで終わりとばかりに、あっさりと話題を切り替えた。
「あいつ、これからしばらく訓練を減らすぞ」
「……なんで？」
「理由は言えねえ。そういう話なんでな」
そう、とあっさり納得した娘に、バーナルが身を乗り出した。
「で、だ。これからあいつの様子がおかしかったりするかもしれねえ。気をかけてやってくれ」
「いいけど……」
なんで自分に？　――顔がそう語っていた。
試験の相手になるにも、普段の訓練につきあっているのも、ほとんどがリゼの役目となっている。バーナルに言われたのが理由なのだが、さすがに疑問に思ったらしい。
「……少しは年頃の娘らしい一面も見てみたいから、なんてこたあ

言えないわなあ……」
リゼには聞こえない程度の小声でバーナルが呟いてから、
「深く考えんな。それがおまえの取り柄だろ？」
「……ん。わかった」
バカにしているともとられる発言だったが、リゼは素直に頷いた。
バーナルの見るところ、彼女の強みは迷いのない、思い切りのいい太刀筋にある。性格的なものもあるだろうが、剣を手に敵と向かい合えば、その瞬間からためらいがなくなる。
「じゃあそろそろ戻るか」
お互いに酒杯を空にしたところで、二人は席を立った。
（さて、と。これからどうなるかね）
まだヒヨッコでしかないコウイチの顔を思い浮かべる。剣の腕も精神的にもまだまだ未熟だが、待っている相手がいる男だ。二人の少女に抱きつかれて固まっているところを思い出し、
（あんなもん見せられたからにはなあ）
肩をすくめて苦笑した。
かといって、甘やかすつもりもない。潰れない程度に鍛えてやるつもりだった。
（せいぜい、死なねェようにしろよ）
心の中でそう語りかけ、不思議そうな顔をするリゼに尻目に、バーナルは暗くなり始めた石畳の上を歩き始めた。

5．へたれ長じて兵士（見習い）となる（3）

空が少しずつ暗くなり始めていた。夕暮れが終わり、元いた世界とは違う、ただ暗いだけの夜がもうすぐ始まろうとしている。

「ふう……」

コウイチは多少疲れの残る体を労わるように、冷えた煉瓦の壁に背中を預けていた。

すぐ目の前には一件の食堂兼酒場。コウイチの感覚からすれば夕方の六時ぐらいだが、店はもう書き入れ時らしい。外からでもにぎわっているのがすぐにわかった。

電気を使った照明がないこの世界。屋外にいる限り、主に頼りとする明かりは、空で輝く太陽の光。必然的に、人々の生活サイクルもそれに合わせたものになる。ようするに、夜は早く寝て、朝は早く起きる。

一日の終わりに酒や食事を楽しむ客と、その間を忙しく動き回る給仕の女たち。厨房からは調理の音と怒鳴り声が絶え間ない。

そうした日常的な光景の中に、フェリナがいた。テーブルを回り、客に何かを聞いている。

動きやすさとカモフラージュを兼ねてか、金髪を帽子の中に隠して、そこらで見かけるような地味な服に身を包んでいた。

本来なら護衛である自分も店の中にまで一緒に行くべきなのだろうが、外で待ってほしいと頼まれたのだ。

視線の先では、フェリナが話を聞いた客に頭を下げて礼を言っているところだった。

ここ数日、彼女につき合ってわかったことがある。

セナードはフェリナをただの箱入り娘じゃないと言っていたが、実際に彼女は驚くほど精力的だった。

外見は取り繕っても、その存在はやはり浮いて見えるほどお嬢様なのだが、一日に何件も酒場や食堂といった人が集まる場所を巡り、

何人もの人に話を聞いている。相手が知らない人間だろうと、物怖じせずに。

時間を区切られたことで、より急いでいるということもあるかもしれないが、鍛えられる前だったら逆にこっちが根をあげていたかもしれない。

そして、もう一つ。

漏れ聞こえてくる会話からわかったことだが、彼女はどうやら誰かを捜しているらしかった。

それが誰で、なんで捜しているのかまではわからないが。

横でクルクル回っていたカセドラがぴたりと動きを止める。

「オイラがこっそり聞いてきてもいいッスよ？」

「いや、それは」

気にはなるが、さすがにそこまでして知りたいとは思わない。

わざわざ外で待たせるということは知られたくないということだろうし。

「そッスか」

カセドラもそれほど興味がないらしく、あっさりと引き下がった。

そんなことを話している間にも、何人もの客が店に出入りしている。

そんな日常の光景をただ立って見ていると、どうしても考えることがあった。

そもそも、なんで自分はこの世界にいるのだろうか、などということではない。それはもう考えるのを止めていた。

どう考えても答えが出そうになかったし、他に考えることは山ほどあったから。

考えているのは、この世界についてだった。自分が今いる世界は、いったいどういうところなのだろうか、という内容である。

太陽もあれば月もある。そういった意味では、地球と変わらない環境だ。文化は昔のヨーロッパ風で、映画などで見たことのあるものがあちこちで目につく。

もちろん、完全に同じではない。見たことのない生物の存在や、自分がいた世界ではありえない、赤やら緑やら青といった人々の髪や目の色がそれだ。

いわゆる平行世界というＳＦ的な単語が浮かんだが、そもそもＳＦには詳しくない上、ここがそうだと証明できる手段も思いつかない。

なのでもう少し狭い範囲に視点を当ててみようと、まずはこのセンダリア王国という国に焦点を絞ってみたのだが。

（……）

最初にそう思い立った時のことを思い出して、コウイチは軽く鬱になった。

そもそも、テレビもインターネットもないようなこの世界。情報の流通が発展していないせいで、知ろうとしてもわからないことも多い。

何かを知ろうとしたら、本を読むか、あるいは人に聞いてみるしかない。……元から情報収集には人とあまり接しない手段を選んできたコウイチだ。まったく関わりのない赤の他人に話を聞くという行為に、かなりの抵抗を感じた。

それでも一度、兵士たちの間では馴染みとなっている行商人に話を聞いたことがある。行商人はコウイチが兵士見習いだとわかると、「この国のことについて、か？　変なこと聞きたがるな、あんた。センダリアの生まれじゃないのかい？」

そう言ってあっさりと応じてくれた。

いわく、このセンダリアという国は国力こそ普通だが、長い歴史を持つ古い国らしい。そして東には、二つの国と国境を接している。昔、それらの国と戦争をしていた時に戦場となったのが、このクレイファレルの街周辺だったらしい。

（そんな時代に、いなくてよかった……）

「いたら真っ先に死んでるッスよ」

いつものようにカセドラにからかわれても、これぱかりは否定で

きない。
　地理的には大陸のだいたい西側に位置し、気候は一年を通して温暖。特産品は豊かな森林から得られる木材やそれらを活かした加工品だという。
「……だいたい？」
「ああ、俺もこの国とその周辺しか知らないからなあ。だいたいそのあたり、としか言えないんだよな」
「地図、とかは」
「大陸全土のかい？　あるわけないだろ。一国の地図ですら出回ってないってのに」
　首を傾げていると、まだ若いその行商人は呆れたように言ったものだ。
「ちったぁ考えてみなって。地図とかが簡単に手に入るようだったら、戦争の時におエライさんが困ることになるだろ。あったら便利だとは思うんだがね」
「……なるほど」
　地理や地形を知られていれば、その分不利になるという理屈。
　そういえば、日本でも昔どこかのエラい人が外国人に地図を渡したことで罰を受けたとかなんとか……そんな話を聞いた気がする。
　生まれついて戦争など経験しておらず、歴史上の出来事としてしか知らないコウイチにもその理由は納得がいくものだった。
　コウイチの職業を思い出してか、行商人はフォローするように言った。
「そんなに重く考えるこたないって。ここ最近この国周辺で、戦争なんて起こってないんだから。あんたが出向くなんてこたぁ多分一生ないよ」
　ぜひそうであってほしい。
　とりあえずその話題は打ち切って、周辺の国のことについて聞いてみると、行商人は足元に広げたいくつもの商品に視線を落としてニヤリと笑った。

「それ以上は何か買ってくれたら教えてあげるよ」
そうは言われても手持ちの金などほとんどなく、その日はそれで諦めた。
何も買わなかったコウイチに行商人は毒づくこともなく、
「ここにはよく出入りしてるから、懐(ふところ)に余裕がある時は頼むよ。…なんていっても、俺も自分が足を運ぶ国のことくらいしか知らないんだよ。もっと手を広げたいとは思うんだが、一人でやってるうちはこんなもんだ」
そう言って苦笑してみせた。
後で思い知ったのは、その言葉がこの世界のほとんどの人間に共通しているものだということだ。
ようするに、自分の生きていく上で関わっていく領分以外での知識がほとんどない。王国というからには王様がいるのだが、その名前も知らないというのも珍しくなかった。
スイッチ一つで手軽に情報を得られるわけではない、ということもあるだろうが、彼らにしてみれば、関係のない情報がなくても問題なく生活できる……ということらしい。そうした認識が当たり前のようだった。逆に自分が色々なことを聞こうとしても、なんでそんなことを知りたがる？　といった顔をされる始。
最初はそれが落ち着かなかったが、今は自分も知らなくてもいいや、という気分にさえなってきている。嫌な方向に慣れてきているのかもしれない。
そうしていくらか上の空になっていたところで、
「お待たせいたしました」
店から出てきたフェリナに声をかけられた。
「……いえ」
「今日は、もう帰ります」
そう言う彼女の表情は暗かった。何も情報が入らなかったらしい。
歩きだしたフェリナの後について、帰路(きろ)を歩く。
（……）

「どうしたんスか？　そわそわして」
思っていることが挙動に出ていたらしい。カセドラに突っ込まれた。
（……いや、なんだか……落ち着かない）
「へ？」
心の中で返事をすると、カセドラが目を丸くした。
女の子と一緒にいるから――というわけでもない。前を歩くフェリナの姿が、あまりにもきれいだからだ。
容姿の話ではない。びっと伸びた背筋と、思わず見とれてしまうような歩き方。それがあまりにもきれいすぎて、背中を丸めがちな自分とつい比較してしまう。
名家のお嬢様などという人種に会ったことはないので、はっきりとは言えないが、たぶん厳しい教育を受けてきたんだろう。
大人びた外見や物腰でつい上に見えてしまうが、自分より少し年下くらいではないだろうか。
この人は……なんで自分を指名したんだろうか？
（初めて会った時の件――だけじゃ、理由としては弱い気がするし）
疑問に思いつつも、いきなり質問するにも抵抗がある。
弾むような話題を振れるわけもなく、そもそも会話自体が苦手。
フェリナはフェリナで、何か考えごとをしているらしく一言も発しない。
「……っ」
ふと邪悪な気配を感じて、コウイチは思わず気配の先を見た。
そこにいたのは、フェリナの頭を見てウズウズしているカセドラ。
ふらふらと、引き寄せられるようにしてフェリナに近づいていく。
（ちょ、まっ――）
「ていっ！」
止める間もなかった。
あたかもスカートをめくるように、カセドラの翼の先端が、フェリナの帽子をはね飛ばす。

「きゃっ……！」
そのままシャンプーのCMにでも使えそうな、さらりとした金髪があふれ出た。
「な……」
愕然（がくぜん）としてカセドラを見ると、すでに素知（そし）らぬ顔で明後日の方向を向いていた。わざとらしく口笛なんか吹いている。
「えっと……？」
困惑した顔でフェリナが振り返った。
理由を問うような目で見られて、コウイチは言葉に詰まった。まさか自分ではなく、いつもそばにいる謎生物がやりました、なんて言えるわけもなく。
何をどう血迷ったのか、あなたの綺麗な髪が見たくてつい――なんて言ったらごまかせるだろうか、などという考えも脳裏をよぎったが、直後に否定。無理。そんなセリフを言おうものなら、その場で憤死する。そもそも途中で噛む、絶対。
そんなこんなで実際にやったことといえば、
「あ……いえ、その……すみま……せん」
消え入りそうな声で、謝ることだった。
それを見て翼で口元を隠し、プクと含み笑いをこぼすカセドラ。
（……おのれ）
初めて自分以外の誰かに殺意が芽生えた瞬間だった。今だったらなんかこう、殺意の波動っぽいオーラを出せる気がする。
それはさておき――
「ちょっと、よろけて……」
我ながら苦しいと思える言い訳を口にしながら、慌てて帽子を拾い上げる。
それを受け取りながら、フェリナは口に手を当てて、まあ、と驚いた顔をしてみせた。
「申し訳ありません。普段のお仕事でも忙しいのに、私にもつき合っていただいているからですね」

……え？　信じるの？

まさか信じられるとは思わず、コウイチは目を丸くした。

どうやら、疲れているからと勘違いしてくれたらしい。チクチクと良心を刺激されて、かえっていたたまれなくなる。

「父に言って、他の方に代わっていただくこともできますが……」

語尾を濁した言い方が、あまりそうしたくないと思っているようだった。

「……あの、なぜ、僕を護衛に？」

思わず口にした疑問だったが、フェリナは意外そうに首を傾げてみせた。

「不思議ですか？」

「僕は、まだ弱くて……正直、他にも適当な人がいるのでは、と」

自分の自虐的な言葉に嫌気がさしつつも、まぎれもない本心だった。他の兵士に比べたら、自分は明らかに未熟だ。

「まあ」

フェリナがにこにこと笑う。

「私はそうは思いません」

「……え」

「だって、前は私を助けてくれたじゃないですか」

「あれは……」

相手が一人だったし、そもそも単なる酔っぱらいだ。あの程度あしらえなければ、訓練をつけてもらっているリゼになんて言われるかもわからない。

「あの時のこと、あなたにとってはなんてことのないことかもしれませんが、私は本当に感謝しているんですよ」

（っ……！）

その言葉に、コウイチは衝撃を受けた。

自分ではずっと大したことじゃないと思っていたことだ。自分と同様、フェリナもそんなふうに思っていると決めつけていた。だが、彼女はそう受け取っていなかった。自分がこう思っているから、相

手もそうに違いない――そんな考えにとらわれていた。
（なんという……思い上がり……）
フェリナの前でなければ、そこらの壁に頭を打ちつけたい気分だった。
「ですけれど……そうですね……」
唇に指を当てて、何かを考えているような仕草をする。
そしてニコリと笑ったかと思うと、
「変に思われているのではないですか？　領主の一人娘が、こんなことをしているなんて」
などと聞いてきた。
「え……」
気になると言えば気にはなるが。ここで素直に頷いてもいいものなのだろうか。というか、頷けば失礼に当たるのでは、などと考えてしまう。
肯定とも否定とも、なんとも答えようがなく。なので結局、
「……いえ」
そう言って、首を左右に振っただけだった。
「あら……」
フェリナが困ったような微笑を浮かべた。
（ひょっとして……間違えた？）
そもそもどういう意図の質問だったのだろうか？
思わずカセドラを見ると、なんかニヤニヤとわかったような顔でこっちを見ていた。
その顔を見て、とたんにカセドラに聞く気がなくなる。
とはいえ、今さら気になるとも言い直せず。
そうして会話は途切れ、また沈黙のまま。
ただし、いつの間にか、前後だった二人の位置関係は、左右に並んで歩くものに変わっていて。コウイチには、フェリナの足取りがなぜか軽くなったように見えた気がした。

そうしていつもとは違った雰囲気のまま、フェリナの家である屋敷の前にまで来る。
いつもならここで別れてまた明日、という流れなのだが、今日は少し様子が違った。
「フェリナか」
そう声をかけてきたのは、ちょうど門から出てきた中年の男だった。
「レイモンおじさま、来ていらしたのですか？」
（……おじさま？）
フェリナの言葉に驚いて男を見た。突き出た腹と、眉間に寄ったシワ……はいいとして、団子みたいな鼻と広い額、小ぶりな目。
フェリナはもちろん、セナードとも似ていない。
「ふん……」
レイモンは鼻息を鳴らすと、フェリナを苛立ったように睨んだ。
「セナードから話は聞いた。おまえは自分の立場がわかっておるのか」
威圧的な口調で言ったのは、毎日出歩いている件だろう。思わずたじろいだコウイチとは対照的に、フェリナは気にしたふうもなくまっすぐ立っている。
「なんスか、このオヤジ」
気に入らないといった顔で近づこうとするカセドラのしっぽを、放っておいたらろくでもないことをやらかしそうだったので、慌てて掴んで引き寄せる。
「ええ、もちろんです」
「ならふらふらと出歩くなどもう止めにしろ。立場をわきまえろ。おまえのせいでクレイファレルの名が傷ついたらどうするのだ」
自分のことしか考えていないような言いぐさの上、なんだか棘のある声音だった。悪意がこもっているとでも言うのだろうか。
「申し訳ありません」
一言の反論もなく、フェリナが深々と頭を下げる。

それでも止めるとは言わず、その態度が逆に止める気はないと語っていた。

レイモンがあからさまに舌打ちをし、頭を振った。

「ふん、セナードもとんだ娘を持ったものだな。早くどこかに嫁がせればいいものを。……行くぞ、グレン」

そう呼びかけた直後、レイモンの後ろから背中に剣を背負った男が姿を現した。

いや――

（……最初から、ここにいた？）

レイモンより背が高いのに、なぜか今までそこにいることに気づかなかった。

その事実に驚く以上に、グレンと呼ばれた男の持つ荒んだ雰囲気に、コウイチは本能的に後ずさりそうになった。話すことはおろか、近づくことすらためらうような怖さを感じる。

何よりその目――無造作に伸ばした髪で表情は隠れているが、その双眸（そうぼう）が爛々（らんらん）と怪しい光を放っているようで目をひいた。

グレンを連れて、レイモンが足取り荒く立ち去る。

ふう、と息を吐いたのは同時だった。

コウイチがしたのは、グレンが見えなくなったことでの安堵（あんど）の息。

フェリナのは、どこか疲れたようなため息だった。

「見苦しいところをお見せしてしまいましたね」

「……いえ」

さっきまでの穏やかな雰囲気はどこかに消し飛んでいた。

「それでは、おやすみなさい」

それ以上の会話を拒むように、フェリナが門扉に手をかける。その背に何も声をかけることもできず、結局、その日はそんな微妙な空気のまま別れることになった。

◆

クレイファレルの街にある、とある豪商の屋敷。
その一室に、男がいた。斜め上を向いた頭と軽く曲げた膝、片方の肩だけ落としているその様は、一見だらしないように見える。が、そのくせ視線は油断なく周囲に向けられている。腰から剣を下げていた。レグラスというのが、男の名前だ。
（……似合わねェなあ、おい）
広い部屋。高級な調度品。それらを冷めた目つきで見る。自分には縁がないものだ。興味もない。
「あまりジロジロ見るな。汚れるだろう」
（見ただけでんなわけあるかよ）
「そいつァすいませんね。なんせ育ちが悪いもんで。思わず見とれちまった」
思っていることとまるで違うことを言いながら、レグラスは声の主に視線を戻す。見下すような眼差しが最初に目についた。
（……へっ）
いかにもわかりやすいタイプだった。自分だけが偉く、他人はその踏み台。心の底からそう信じて生きている人種だ。
この手の人間には慣れている。そこそこ持ち上げてやれば、すぐに気をよくする。へらへらと笑いながら、
「で、ご用件は？」
自分を呼びだした部屋の主に、そう問いかける。部屋のことを褒められたからか、まんざらでもなさそうな様子で、男がフンと鼻を鳴らした。
「聞くまでもなかろう。仕事だ」
「俺らにかい？　そこの暗そうなヤツじゃなくて」
意外そうな声を出しながら顎で示した先には、見るからに荒んだ雰囲気の男がいた。一目見てわかる。ご同業だ。レグラスの言葉を受けて、黙って立っていた男の目に慣れ親しんだ感情が浮かび上がった。

（おいおい、ずいぶん短気なヤロウだな）
隠す気もなさそうなはっきりとした殺意を向けられ、思わず笑いそうになった。ここまで尖ってたらそりゃあ生きにくいだろう。
「口のきき方に気をつけろ。私はおまえたちの雇い主だぞ」
へェへェと流し、レグラスは肩をすくめる。
「俺らは傭兵で、あんたは雇い主だ。貰えるもん貰えるならなんでもやりますがね。で、何をお望みで？」
男が嫌らしい笑みを浮かべて言った依頼内容に、レグラスは思わず顔をしかめそうになった。

「ったく、くだらねェ仕事よこしやがって」
「グチるならもうちょい離れてからにしやしょうよ。……で、なんですって？」
部屋を出るなり毒づくと、廊下で待っていた部下が声をかけてきた。
「仕事だ。明日にはとりかかるぞ」
「そりゃまた急な話で」
部下は予想していたようにあっさりと答えた。察しのいい男だ。本当に予想していたのだろう。
「はっ、そんなもんいつものことだろうが」
「そりゃそうですがね。こう、何もしない毎日も悪くなかったんで」
「だったら傭兵なんぞ辞めちまえよ」
「冗談。今さら他の生き方ができるわけねェでしょうが。それにそうなったらあんたも困るでしょう、隊長」
「おまえみてェなチンピラいてもいなくても変わらねェよ」
ひでェなあ、と部下がこぼす。ほとんど恒例（こうれい）になっているやり取りに、険悪さはまるでなかった。
「じゃ、他の奴らにも伝えときます」
「ああ」
手を上げて戻る部下の背中を見届けてから、一人になったレグラ

スは窓際に立って外を見た。窓から見える真っ黒な夜景は、考えをまとめるのにちょうどいい。

「はっ……」

短く嗤う。すべてがバカバカしく思えて、ふいに出た嗤いだった。そもそも雇っていることすら秘密にしている自分たちを使う理由はわかりきっている。万が一、俺たちがしくじっても、自分のしわざだとばれないようにするためだ。

仕事の背景は聞いてないが、どうせ後ろ暗いことだらけなのだろう。となると、真っ当な手段を選んでいられない。だから、普段は密かに飼っているだけの手駒を使う。

どうせしょせんは使い捨ての駒、チンピラまがいの傭兵だとでも考えているに違いない。

(捕まって何を言おうが、何も知らねェ関係ねェで切り抜けるつもりだろうな)

そんな扱いは珍しくもなかったが、面白くないことに変わりはない。もちろん、しくじる気はまるでなかったが。

「嫌な仕事になりそうじゃねェか、おい」

嗤いは、いつの間にか苦々しいものになっていた。

6．へたれとやさぐれ（1）

「――誰かを守りながらの戦い方？」

小首を傾げて問い返したリゼに、ゆっくりと頷きを返す。

「それを、教えてもらえれば、と」

いつもの一対一での訓練が始まる前。リゼに声をかけた切り出した用件がそれだった。

思いついたきっかけは、昨夜の帰り道でフェリナとかわした会話だ。

自分はどう思っているのであれ、彼女は自分を信頼してくれている。その信頼に応えるためには、少しでも自信につながるようなことをしなければと思ったのだ。

「ずいぶんやる気ッスね～」

すぐ横からカセドラのだらけた声がした。

（やる気……というか）

自信がないから、しなければならないと思っただけなのだが。

「そッスか」

珍しくからかうようなことを言うでもなく、カセドラは口を閉じる。意外に思って横目に見ると、空中で横になりながら目を閉じていた。そんな時でもなぜか翼だけはパタパタと動いている。

「いいけど、それは今すぐに必要なもの？　だったらそんなに教えられることはないよ」

「では、アドバイスとか」

元より、一朝一夕で何かが身につけられると思っていない。何もしないよりはマシ、という程度だ。

「半端に覚えてもあまり効果ないと思うけど」

あまり気が進まないといった様子のリゼだったが、コウイチの真剣な様子にすぐに気づいたらしい。

「なら、一つだけ教えるよ」

仕方ないとばかりに言ったその言葉は、
「戦わないこと」
「……は？」
思わず、ほうけたような声が出た。
「冗談で言ってるわけじゃないよ。誰かを守るのだけが目的なら、戦う必要なんてない。武器を捨てて一緒に逃げるだけでもいいんだから」
「……」
「どうしても、って場面も出てくるだろうけど。その場合でも、戦うのは最小限にすればいい。とにかく、守る相手から目を離さないこと。それだけかな」
「だが……」
それは、その通りかもしれないが。なんというか、当たり前すぎて拍子抜けしてしまう。もっとこう、前向きな助言を期待していたのだが。
「ならコウイチにあれができる？」
不満が顔に出ていたのかもしれない。呆れた顔のリゼが指し示した先には、四人の兵士に囲まれたバーナルがいた。
兵士たちは剣や槍を構えているにも関わらず、バーナルは何も持っていない。それどころか両腕をだらりと下げ、リラックスしているようにすら見える。
「ハァッ！」
と、バーナルの後ろにいた兵士の一人が、訓練用の槍でいきなり突きかかった。刃が潰され布が巻いてある代物とはいえ、直撃したら死んでもおかしくない勢いだ。
思わず表情を強ばらせたコウイチをよそに、背後からの槍の刺突を、バーナルは背中に目でついているかのように一歩横に動いてかわした。そのまま伸びきった槍の柄を脇で挟み、ぐっと固定する。
動きを止めたバーナルめがけて、残った三人が一斉に斬りかかった。方向も、切りつけてくる向きもまるで違うそれらの斬撃。それ

をバーナルはその場で伏せるようにしてかわす。槍の兵士が、その動きにつられるように前のめりになった。

そうなることを見越していたかのような素早さで、バーナルが大きく後ろに飛び退いた。そのまま流れるような動作で兵士の背後に回りこみ、掴んだ腕を背中に回して間接を極める。痛みに呻き、兵士が槍を取り落とした。

ちょうど仲間を盾にされた状態になり、とっさのことに、兵士たちは顔を歪めて動きを止めた。

だがそれも一瞬。正面にいた兵士はその場所にとどまり、両側の兵士がじわじわとバーナルの左右に回りこみ始めた。

その動きを最後まで見ることなく、バーナルはにやりと口元を歪め、盾にしていた兵士をいきなり突き飛ばした。正面にいた兵士が驚き、そのまま二人してもつれあう。

同時にバーナルが左側にいた兵士に飛びかかった。右側の兵士は、もつれ合った二人が邪魔になって近づいてこれない。バーナルに詰め寄られた兵士が剣を降り下ろす。

パン――

その軌道が、不自然にそらされた。予想していなかった事態に、思わず兵士が動きを止める。その隙にバーナルは手刀で剣を叩き落とし、それを足でひっかけたかと思うと、くるりと回転させて柄を掴んだ。

呆然とする兵士の前で、バーナルは奪いとった剣で自分の肩当てをトントンと叩いた。

――そこから先は一方的だった。まともに剣を合わせることもできず、兵士たちは一人づつ叩きのめされる。数十秒後、地面に倒れた兵士たちと、汗一つかかずに飄々と立っているバーナルの姿がそこにはあった。

「遊んでたね」

不満そうにリゼが言う。ということは、あれで本気ではなかったと。

「さっきのは、いったい」
「太刀筋がそれたアレ？　振り下ろされる剣を、父さんがが横から手で叩いただけだよ」
「……はい？」
高速で振り下ろされる剣の、その腹の部分を素手で叩いた？　あっさりと言うが、それって神技なのでは……。
少しタイミングを間違えれば、ただ斬られるか、伸ばした手ごと斬られるか。かなりの実力者でないとできない芸当だ。
コウイチは深々と息を吐いた。初めてでないとはいえ、バーナルの訓練風景は心臓に悪い。
で、どう？　とリゼが目で聞いてきた。それがさっきの、あれができる？　という質問の答えを求めているということに気づくまでしばらくかかった。
「……無理」
考えるまでもない。
バーナルを囲んでいた兵士たち、その一人一人が自分よりも強いのだから。
「そういうこと。少なくとも自分一人を守れるぐらいの実力がないうちは、まともに立ち向かおうなんて思わない方がいい」
「……無理はするな、と」
コウイチは迷ったように口に出した。
はっきりと実力不足だと指摘されたわけだが、そのことは言われるまでもなく自覚している。
ようは、“できることをやればいい”ということなのだろうが、そこでそう開き直れれば苦労はしないわけで。
悪い癖だとわかっているのに、つい、まだ起こってもいない最悪の事態を想像してへこんだり弱気になってしまう。
不安のあまり、顔を伏せたコウイチの耳に、ずらりと剣を抜く音が届いた。
「あれこれ考えてるより、今はやることがある――違う？」

そうしていつもの『採用試験』は、いつものように負けで終わり――コウイチは死体のように地面に横たわっていた。

（……死ぬ）

打たれた部分が痛み、じんじんと熱を発している。汗でぐしょぐしょになった服が張り付いて気持ち悪い。さっきまで荒い息をしていた口も、その中は粘(ねば)ついたようになっていた。

いつもより激しく容赦(ようしゃ)のない訓練を受けたせいで、立ち上がる気力すらない――そのおかげで、ウジウジと悩むことはなかったが。

このままここで眠りたい衝動(しょうどう)にかられたが、風邪をひくと思い直し、なんとか起きあがる。ちょうど、同じように訓練を終えた兵士たちが、がやがやと兵舎に戻っていくところだった。

（そう、いえば）

ふと思い出したことがあり、通りかかった兵士の一人に声をかける。まだ若く、コウイチと変わらないぐらいの年齢だが、気さくで話しかけやすい相手だった。

「あの……」

「ん？　ようコウイチ、どうした？」

「実は、昨日――」

昨夜に見た、領主の館から出てきた見慣れない男について聞いてみる。もちろんフェリナとのことは伏せたままだ。

「ああ……」

とたんに兵士の表情が苦々しいものになった。

「あいつはセナード様の従兄弟(いとこ)だよ」

やっぱりというか、親戚(しんせき)だったらしい。その割にはあまり似ていないが。

「街から離れたところにある農園の管理を任されててな。いつもはそっちにいるから、ここに来ることはほとんどないんだ。何の用事だったんだか」

そうして聞いてもいないのに、話し始めた内容はと言えば。

曰く、普段は農園の近くに立てられた無駄に贅沢な屋敷で生活している。

安い金で農民たちをこき使い、浮いた金で豪遊三昧。

それでも満足しておらず、密かに領主の地位を狙っているなどなど――レイモンに関する悪い噂、というか評判だった。

「領主って……あのオヤジがッスか？　うぇ……」

カセドラが本気で嫌そうな顔をした。よっぽど気に入らなかったらしい。

「まあフェリナ様がいるから無理だろうけどな。それでももし万が一、あいつが領主になったら俺はここを止めるね」

確かにあまりいい印象を持てなかったが。そう思っているのは自分たちだけではないらしい。顔をしかめて話す兵士からは、本気でそう思っていることがはっきりと伝わってきた。

「一緒に、剣を持った男がいたんですが」

「ああ、あいつか」

しかめ面をしていた兵士の目に嫌悪感が宿った。

「あのおっさん、農園警護だとかなんとかで、傭兵を雇っているんだよ。その中で一番腕の立つ奴を護衛に引き連れてるって話だ。たぶんそいつのことだろ」

（……傭兵？）

傭兵というと、金で雇われて戦争に出たりするあれか。道理で、というか、確かに物騒な雰囲気はしたが。

「不気味な奴だったろ？　俺たちがいるってのにわざわざあんな傭兵を雇うなんて、何考えてんだろな」

兵士は本気で不思議そうに首を傾げてみせた。

痛みの残る体をごまかし、いつものようにフェリナの護衛についているコウイチ。

今日、彼女が聞き込みをしているのは裏通りの人気のない店だった。店の中の客は数人程度で、そもそも路地を歩く人もあまり見か

けない。
　目はフェリナに向けながらも、コウイチは別のことを考えていた。
　この世界のことや、フェリナのしていること、レイモンとの昨夜のやりとり。色々なことが脳裏を巡るが、なかなか集中できない。気がつけば、昨日見た、レイモンの後ろにいた傭兵だという男のことを思い出してしまう。
　顔の上半分を隠すような髪の間からもはっきりとわかった、不気味に輝く双眸（そうぼう）。見るだけで恐怖を感じる、尖（とが）った雰囲気。
　傭兵だというのが本当なら……人を、殺したこともあるのだろう。
「……っ」
　もしあの男に剣を向けられたら、対抗できるだろうか。見ただけで実力がわかるほど経験を積んでいないが、たぶん無理だという気がした。精神的に気圧（けお）されて、まともに剣を振るうこともできないかもしれない。
　それに、相手がどうこうという以前に、自分はまだ――
「……さん、兄さんっ」
　耳元の声に反応して、我に返る。
「カセドラ？　……っ」
　カセドラが珍しくまじめな顔をしている、と思った直後、コウイチは周囲の異常さに気づいた。
　さっきまで人気のなかった裏通りに、人が集まっている。しかも全員が男で、コウイチを囲むようにして立っており、加えてそれぞれが武器を持っていた。間違っても、フェリナが今いる店に用がある、というわけでもなさそうで。
（いつ……の間に）
「いや、さっきからいたッスよ」
　カセドラが冷めた声でツッコミを入れる。
　こうなる前から話しかけてたのに……とか、ブツブツ言っている気がしたが、まあそれはそれとして。
　男たちの正体も目的もわからないが、その顔は自分に向けられて

いる。何か用事があるらしいが、それが決して嬉しくないものだということぐらいは見当がついた。

――誰かを守るのだけが目的なら、戦う必要なんてない。武器を捨てて一緒に逃げるだけでもいいんだから。

リゼから聞いた話がひらめきのように頭に浮かんだ。

そうだ。これほどの人数相手に立ち向かうなんて選択肢はありえない。まだそこまで切迫した事態になるとは限らないが、最悪フェリナを連れて逃げる方法だけは考えなければ。

（逃げ道、は）

裏通りは男たちで埋められている。だとすると、フェリナのいる酒場に裏口があることを祈るしかない。

顔を伏せ、視線だけ店内に向ける。あるとすれば、厨房の奥か。扉がないとしても外に出られるぐらいの大きさの窓があれば。

（……あれ？）

考えを巡らせている間に、不思議なことに気づいた。男たちに動きがない。今すぐ何かしてきそうな緊迫感もなかった。

困惑顔で周囲を見渡すと、なぜか前の方にいた一人の男も同じ顔をしていることに気づいた。露出した腕にいくつもの傷跡があり、見るからに荒事に慣れてそうなのだが。

「久々の仕事だからって大勢で出張ってみりゃあ……相手はこんなボウズかよ」

いかにも肩すかしと言うように、ため息をついてみせる。

後ろを見ると、ひらひらと手を振った。

「あー……おまえら、もう帰っていいぞ」

「へ？　いいんですかい？」

「これ相手にこんなにいらんだろ」

ぞんざいに指差され、これ扱い。さすがにムカッときたが、この状況で文句を言う度胸はない。

「まさか女を独り占めしたいからそんなこと言い出すんじゃないでしょうね？」

「アホか。俺ァガキには興味ねェよ。いいから散れ」
しっしっと追い払う仕草に、とたんにブーイングがわき起こる。
「あんたが来いって言ったんでしょうが。これだから隊長は……」
「そんなんだから女にもてないんですよ」
「そういや前にも振られてたよな。軽く見えるからって理由で」
――プチ、と。
なんかそんな感じの音が聞こえた気がした。
「いいからとっとと消えろテメエら！　ついでにクタバれチンピラども！」
リーダー格らしい男が、大声で喚きたてる。
（……コント？）
おそらく素でのやりとりなのだろうが、はたから見ているコウイチにも、本気で言っているわけではなく、ふざけているような雰囲気が感じられた。
「なんつーか……緊張感がないッスね」
カセドラもそう同意する。
その間にも、ブーブー言いながら散り散りになっていく男たち。
……なんだかなあ。
さっきまで緊張していた自分がなんだかバカみたいに思えてきた。
「コウイチさん、どうかされましたか？」
ちょうどその時、酒場からフェリナが出てきた。
「いえ、自分にも……」
首を左右に振る。何がなんだかわからないのは変わりない。
しらけた空気を察したのか、一人だけ残った隊長と呼ばれていた男がゴホンと咳払(せきばら)いをした。
「……じゃ、やるか」
そう言いながら、指の骨を鳴らす。ポキポキ、ではなく、ゴキッゴキッとかいうものすごい音が聞こえた。
「いえ、あの……何を」
「見りゃわかんだろう。喧嘩だよケンカ」

「……は？」
いや、いやいやいやいや。
なぜ。なんでそんなことになるのかさっぱりわからない。この流れでいきなりケンカとか売られても。意味がわからないし。
男とは前に会ったこともないし、当然恨みを買ったおぼえもない。
両手を突き出して首を振っていると、
「理由なんてもうどうだっていいだろ。抵抗しないならそこそこにしといてやるからよ」
そんな投げやりな声がかけられた。
（そんな、いい加減な）
それでやられる方はたまったものではない。
意味が分からず混乱していると、
「お聞きしたいことがあります」
そうフェリナが口を挟んできた。
「この狼藉（ろうぜき）は、誰に命じられてのものですか？」
驚いた顔で振り返る。フェリナの言葉が、男の行動が誰かの命令だと確信しているような言い方だったからだ。
その言葉を受けて、男が一瞬だけ感心したような顔になった気がしたが、
「さあな」
そう言って肩をすくめてみせた。
「嬢ちゃんはひっこんでな。あんたに関しちゃどっちでもいいって言われてんだ。余計なくちばし突っ込んで怪我したくないだろ？」
「……」
とぼけていても、あまり隠す気はないようだった。誰かの命令で、というのは間違いないらしい。だが、どっちでもいいというのはどういうことだろうか？
男がゆっくりと近づいてくる。反射的に腰の剣に手を伸ばしかけ、
「ああ、言っとくが――」
男の声音が、低くなった気がした。

「腰のそれを抜くんじゃねェぞ。それやったら怪我だけじゃすまなくなると思え」
本能的に、手の動きが止まった。
（っ……）
全身が痺れるような何かを、コウイチは男に感じていた。男の放つ雰囲気が変わっている。さっきまでのふざけた雰囲気とは、まるで違う。
（これ、は……）
重石を乗せられたように体が重い。恐怖を感じているのに、男から目をそらすことができない。
この感覚には覚えがある。初めて殺されそうになった時も、こんなふうに体は反応していた。だがその度合いは、あの時とは段違い。
「くっ……」
怯えるな。あの時とは違う。自分はまだ未熟だが、抗う術がまるでないわけではない。
凍りついたように動かない体を叱咤し、まだ反応が鈍い指で剣の柄に触れ――思い出した。これが、人殺しのための道具だということを。
コウイチは、本当の意味での剣を使ったことがない。訓練と手入れの時に触るぐらいで、兵士に取り立てられてからこなした仕事も、せいぜいがひったくりを捕まえたり、暴れた酔っぱらいを抑える程度だった。
下手をすればどちらかが命を落とす――そこまで緊迫した事態になったことは、今まで一度もない。
死、という単語が脳裏に浮かび、口の中が一瞬で乾いた。途端に腰に下げた剣が重くなる。人を殺すために作られた道具を抜くことに、強い抵抗を覚えた。
「コウイチさん……？」
（……いや）
かけられた声に思い出した。今ここにいるのは、自分一人だけで

はない。
　意を決してコウイチは――
「……あん？」
　鞘に納まったままの剣を構えた。近づいていた男がきょとんとした顔をする。
（これなら）
　殺し合いをする度胸はまだないが、これならいつもしている模擬戦と同じだ。
　男がふっと息を抜くような笑い方をした。
「ハッ。そうこられたらこっちも抜くわけにはいかねえわな」
　笑いながら、腰の剣を剣帯から外した。当然のように鞘付きのままだ。この時、コウイチは初めて男が二本剣を下げていることに気づいた。反対側にも、外したのとまったく同じように見える剣が下げられている。
（二刀流……？）
　そう思った直後、体の一部がざわりと撫でられたような嫌な感覚を覚えた。その一部――右手を反射的に引っ込めると同時、風が巻き起こる。
　ガッ――
「っ……！」
　その瞬間、視界が明滅した。
　激しい痛みに五感が狂い、元に戻った時に感じたのは激痛。男が鞘に収まったままの剣を、右手に叩きつけてきたのだ。
「コウイチさん！」
「運が悪かったな」
　近くにいるはずなのに、フェリナと男の声がやけに遠くから聞こえる気がした。
（まず……い）
　剣を取り落とすことはしなかったが、これではまともに扱えない。それ以前に、男の実力は自分よりもはるかに上だ。なにしろ、剣を

振るう動作も見えなかったのだから。
「兄さん」
耳のすぐ後ろで、カセドラの声がした。
「オイラが気をそらすから、その間に逃げるッスよ」
痛みに脂汗（あぶらあせ）を流しながらうなずく。情けないが、それしかない。
剣を元に戻している男の頭上に、カセドラが舞い上がった。
「せーの」
パタパタと翼を動かしながら身を翻し、
「急降下アタァアアアアック！！」
紫色の丸い体が、男の頭めがけて急接近。当たると思ったその直前――
ひょい、と、男が上体をのけぞらせた。
「へ――へぎょ！」
路面に顔面衝突し、カセドラが変な声をあげる。
「……あァ？　今なんか飛んできた気が……」
男はカセドラが通り過ぎたあたりを不思議そうに見て呟いた。カセドラの姿が見えているような反応ではない。
（なのに……まさか、勘だけでかわした!?）
驚きもやまないその直後、
「がっ……！」
白目をむいて、いきなり男が倒れた。拳ほどの大きさの石が路面に転がる。
「コウイチ」
路地の角から小柄な人影が姿を現す。浅黄色の髪が夕日を浴びて赤く染まっていた。
「……リゼ？」
姿を現したのは、先輩の女兵士だった。どうやら彼女が投げた石が、男の頭に命中したらしい。それはいいとして――
「なんで、ここに」
絶妙（ぜつみょう）のタイミングだった。思わず出待ちという単語が脳裏に浮か

んだが、リゼは問いには答えずに気絶した男を見下ろした。
「こいつは？」
「それは……わからない」
名前すらも聞かされなかった。
もしかしたら何かそれを示すような物を持っていないかと近づきかけ、
「待って」
無事な方の手を掴まれ立ち止まる。剣を持つのに慣れた、硬い手の平。その手をたどって視線を上げると、リゼが真剣な表情をうつ伏せになった男に向けていた。
眉をひそめてリゼの視線をなぞったコウイチは、男の指がピクリと動いたことに気づいた。
「いってェ……くそ、なんだってんだ……？」
「な……！」
頭を押さえ、呻きながら男が顔を上げる。
（もう、目を覚ました？）
驚きに目を丸くする。それ以前にも立て続けに予想外のことが起こったせいで、思考が追いつかない。
「詳しい話はあと。逃げるよ、コウイチ。フェリナ様も」
「あ……はいっ」
そこにいるのが当たり前のように呼ばれて、フェリナがハッと顔を上げた。
リゼが手を握ったまま走り始めた。見た目からは想像もできない強い力で引っ張られ、コウイチも走り出す。フェリナも手で帽子を押さえながら後をついてきた。
「あっ……ちょ、待て、オマエら――」
そんな呼びかけが聞こえた気がしたが、さすがにダメージが残っているらしく、男はふらふらとおぼつかない足取りだった。
（あれなら……！）
少なくとも、逃げることはできそうだ。

手の痛みに顔をしかめながら、コウイチは暗く染まりつつある街を駆けだした。

6．へたれとやさぐれ（2）

「骨まではいっとらん」

素っ気ないその一言に、ホッとため息がこぼれた。直後、眉間（みけん）にしわを寄せる。

赤く腫（は）れ上がった右手に、節くれ立った手で乱暴に薬が塗られたからだ。さすがに痛みが走ったが、すぐ横でフェリナが心配そうに見ていたので声に出すのはなんとかこらえる。

――いきなり襲いかかってきた男から逃げた後、コウイチたちはこの街の兵士たちにとっては“御用達（ごようたし）”といえる診療所（しんりょうじょ）に向かった。兵舎にほど近いその診療所は、兵士たちが訓練で怪我をした時に最も利用している場所だ。

そこで働く老医師のガークスは、無愛想だが腕の確かな医者として、この街で働く医師や薬師（くすし）たちの信頼を集めていた。以前に近隣の村が盗賊に襲われ多くの怪我人が運び込まれた時、治療のまとめ役をしたのがガークスだとも聞いている。

診療所はすでに閉まっていたが、ガークスはそのことに一言も触れないままコウイチたちを中に招き入れた。

「当分は痛むだろうが、これくらいはいつものことだろう。三日ほどは安静にすることだな」

「ありがとう、ございました」

礼を言うコウイチをちらりと一瞥（いちべつ）すると、老医者は奥にある居住空間へと引っ込んでいった。扉を閉じる前に振り返り、

「玄関の鍵は机の引き出しの中にある。使ったら扉の下の隙間から中に滑り込ませておけばいい。用がすんだなら出ていけ」

最後まで素っ気ない物言いで、扉を閉めた。

（……？）

「診察は、もう終わったのでは」

「……まだここにいていい、ってことかな」

リゼも首を傾げながら呟く。
「あのお医者様には、私も父も何度か診ていただいていますから」
フェリナが、ぽつりと呟いた。
驚いてフェリナを見ると、彼女はガークスがいるはずの扉の奥に向かって深々と頭を下げていた。
ということは、ガークスはフェリナの正体に気づいたはずだ。いくら特徴的な金髪を隠していても、これだけ近くで見ればすぐにわかることだろう。
コウイチとリゼのことも知っているから、領主の娘に兵士と兵士見習いの三人という組み合わせには疑問を抱いたはず。それなのに何も言わなかったということは――
「訳ありの事情を察して、場所を貸してくれたってことじゃないッスか？」
その声と同時、紫色の球体がはポンッと姿を現した。
（カセドラ？）
無事だったのか。
「うー、まだクラクラするッス」
少しフラフラしながらも、その体に目立った傷はなさそうだった。
「ひどいッスよ。オイラを置き去りにしてくなんて」
ふてくされたようにカセドラがぼやく。
（……えーと）
ごめん。完全に忘れてました。
「ちょっ、兄さんひどいっ！」
（それはともかく――）
「え、えぇー……」
打ちひしがれるカセドラを放っておいて、リゼとフェリナに向き直る。
「そういうことなら、遠慮なく使わせてもらってもいいのでは、と」
どのみちあんなことがあって、いつものようにお別れというわけにはいかない。

リゼとフェリナも頷くと、三人は向かい合って黙り込んだ。
話すことはそれぞれあるのだが、誰から話すべきか、という沈黙である。
「……とっさに手を引いてなかったら、折られてたろうね」
そう切り出したのは、リゼだった。包帯が巻かれたコウイチの右手を見ている。
誉めているのか、責めているのか、いまいちわからない言い方だが、コウイチは気まずそうに目を伏せた。
――はっきり言って、実力が違いすぎた。
そのこともわからず、戦おうとした。その前のコントじみたやりとりを見たということもあるが、大勢から一人になった途端、これならやれるんじゃないかと思ったのはたしかだ。もちろんそんなわけもなく、文字通り手痛い代償を払ったわけだが。
「もし剣を抜いてたら、こんなぐらいじゃすまなかったと思う」
（と、いうか――）
もし剣を抜いていたら、今頃どうなっていたのだろう？
「そりゃあもう、右腕の手首から先がなくなってたッスね」
いつの間にか復活したカセドラが、ケタケタ笑いながらのたまった。
（……えーと）
……ちょんぱ？
サーっと、コウイチの顔から血の気が引いていく。
そんなことになったらめちゃくちゃ痛い――というか、ヤバいのでは。そうなった場合、この世界の医療技術で助かるのだろうか。いや、運良く助かったとしても、そんなことになれば当然兵士はクビ。他に働く当てもないのでそのままのたれ死ぬしかないわけで。
ガクガクブルブルガクガクブルブル。
最悪の人生の終わり方を想像して、コウイチの体が極寒に裸で放り出されたように震え始めた。
「コウイチさん？　まだ、痛みますか？」

あまりに顔色が悪かったらしい。
フェリナが心配そうに顔を覗き込んできた。吐息がかかるほどの距離から、慌てて体をそらして離れる。
「いえ、あの……だいぶ、マシになりました」
打たれた瞬間こそ激痛が走ったし、今でもまだ痛むが、耐えられないほどではない。訓練を受ける前なら悶絶していたかもしれないが、今ではかなり我慢強くなっていた。訓練の成果を実感して、少しだけ気分が晴れる。
「あの男、たぶん傭兵だよ」
リゼの言葉に、ふと引っかかるものがあった。
……そういえば、襲われる直前に仕事がどうとか言っていた気がする。レイモンと一緒にいた男ほど荒んだ雰囲気はなかったが、言われてみれば確かに同じ人種に思えた。
「かなり強いよ。あたしでも、勝てないと思う」
「え」
リゼが訓練の時に見せるような真剣な顔つきになっていた。年上の、ベテランの兵士相手でもいい勝負をしてみせる彼女がである。
コウイチの意外そうな反応が気に入らなかったのか、リゼは不満げに唇を歪めてみせた。
「勝てる自信があるなら、不意打ちなんてしないよ」
そう言えば、男が気づいた時、真っ先に逃げると言い出したのはリゼだった。あれだけフラフラでも勝てるかどうか怪しいということか。
確かに目に見えないはずのカセドラの体当たりをかわしたことをみても、只者ではない感じだった。あれがなければ、その後のリゼの不意打ちもかわされていたかもしれない。
……ん？
不意打ち、ということは、その前から彼女はあの近くに隠れてたということで。
「リゼは……いつからあそこに？」

「見慣れない男たちが裏通りから出ていくのを見かけたから、ちょっと気になって。あの男の仲間だよね？」

なるほど。あの集団は確かに目立つ。自分がリゼの立場でも様子を見に行くだろう。

納得していると、リゼが眉をひそめて聞いてきた。

「……そういえば、あそこにもう一人、あの男の仲間が残っていなかった？」

「……え？」

誰か、とは自分とフェリナと、あの傭兵らしい男以外にだろうか。

「いや、誰も」

「そう？　他にも誰かいた気がしたんだけど」

「それは、酒場の客とかではなく」

「そういうのじゃなくって……まあいいか」

さして気にしたふうでもなく、彼女は話を切り上げる。

「だけど、今日はいきなり変わったことを言い出すと思ってたけど」

リゼの視線が、コウイチから隣のフェリナへと移った。

「誰かを守りながらの戦い方ね。まさか、フェリナ様のことだとは思わなかったけど」

「……いや、まあ」

理由を聞くような口調に、コウイチは視線を泳がせた。ここまで来たら隠すのは無理だろうが、それを自分の口から話してもいいものかどうか。

「……わかりました」

何かを決意したような声に、二人はフェリナの方を向く。

「お二人には、事情をお話します」

引き結んだ口元が、その心情を表していた。

「行方不明になっている友人を捜しているんです」

コウイチを護衛として連れていることを説明した後、フェリナが夜毎（よごと）外出している理由を初めて口にした。

（捜しているのは、友達だったのか……）
誰かを捜しているのはわかっていただけに、その理由はすんなりとコウイチの胸に収まる。
「それはわかりましたが、なんでフェリナ様がご自身で捜しているんですか？」
口調こそ丁寧（ていねい）だが、領主の娘にも遠慮（えんりょ）ない物言いでリゼが疑問を口にした。
当然の疑問だった。友人が行方不明になったとしても、フェリナが自分で探す必要はない。彼女の立場なら、父親である領主のセナードに訴えればいいだけの話だ。
「それは……」
言いづらそうに、フェリナが視線を落とす。
「何か、事情でも」
「彼女は……私の友人なんですが、聖封教会の関係者なんです」
その言葉を聞いた途端、リゼの表情が納得したようなものに変わった。
（……聖封教会？）
どこかで聞いた憶えはあるが、なんだったっけ？
「あの……聖封教会、とは」
「「え？」」
なんて聞いたら、思いっきり意外な顔をされた。
（もしかして、常識？）
まずいことを聞いたのかもしれない。
この世界にも宗教があるのは知っていたが、元々の世界から宗教というものに興味もなく、身近に熱心な信者がいたわけでもない。なのでついスルーしていたのだが。
「あの……ご存じないんですか？」
首を傾げたフェリナとは対照的に、
「ああ……そういえば記憶がないって言ってたね」
リゼが納得したように頷く。

曰く、聖封教会とは――

この世界で最も広く広まっている歴史のある宗教らしい。

変わってるなと思ったのが、この宗教が信仰するのが、創造神ではなく、その後を引き継いだ世界を管理する神だということ。この世界に残る神の奇跡の残滓を見つけ、管理するのが主な役目とかなんとか。

（神の残滓……？）

いくつか疑問に思うこともあったが、この聖封教会。世界的に広まっているせいか、いくつもの宗派に分かれているらしい。

「この国で広まっている宗派はそれほど教義も厳しくないのですが……」

歯切れの悪い言い方から察したのか、リゼが口を挟んだ。

「関係者って……ひょっとして神官の方ですか？」

「……ええ」

「そういえば、街の教会がしばらく閉まったままでしたね」

この街にも、中心部に小さな教会があるらしい。

細かい場所を言われて、屋根の上に音符の親戚のようなものが飾られている建物を思い出す。たぶんアレのことだろう。

正直、宗教関係となるとちんぷんかんぷんだが、聖職者となれば他の職業に比べて周りの目も厳しいのかもしれない。

聞く話によると、姿をくらます直前、理由はわからないが彼女は夜に盛り場へと出かけていたらしい。だが神官とかいう以前に、夜の街に一人で繰り出すような女性ではなかったという。

なんにせよ、そういうことがあった後で行方不明となれば、よくない噂が立つかもしれない――それがフェリナが独力で友人を捜している理由だという。

「なら、夜に、出歩いていたのも」

「同じ時間帯に話を聞けば、より詳しい手がかりが得られると思ったからです」

「それで、何かわかったんですか？」

フェリナは表情を曇らせてかぶりを振った。
「詳しいことはなにも……ただ、彼女が焦った様子で誰かを捜していたということぐらいです」
奇しくも、今のフェリナと同じことをしていたわけだ。
だけどなんでそんな時間に？　と疑問は浮かんだが、先に口を開いたのはリゼだった。
「それで、これからどうするつもりですか？」
「……それは」
「今の話になんでさっきの男が首を突っ込んできたのかわかりませんが、コウイチ一人にあの男の相手は無理です」
まるっきりの事実だった。フェリナを守るどころか、一人だけ逃がすこともできそうにない。
「セナード様に言って、表沙汰にしたほうがいいと思います。ご友人がフェリナ様の言うとおりの方なら、なにか事件に巻き込まれた可能性もあるわけですし」
フェリナが辛そうに目を閉じた。
何か公にできない理由でもあるのだろうか。
「実は……彼女はもうすぐ結婚する予定なんです」
フェリナが苦しそうな声で、理由を口にした。
その相手は今では別の街に住んでいるが、以前よりの付き合いだという。問題は、相手の家が名家だということだ。このことが知れ渡ったら破談になる可能性もあるらしい。
「ですが……こんなことになってはもう言われた通りにしたほうがいいのかもしれませんね」
コウイチの怪我を見て、フェリナが諦めたように呟いた。
（……）
リゼの言うことの方が正しいのはわかっている。
ただ、正直気が引けた。自分のせいではないが、自分がきっかけで誰かの人生がねじ曲がってしまうことに。
「いえ、あの……」

大丈夫、と言いかけ、言葉に詰まる。
今回は軽い怪我をしただけですんだ。だがそれが取り返しのつかないものだったら？　フェリナが怪我をしていたら？　次はそうなるかもしれないと思うと、軽々しいことは言えない。
だけど――本当にそれでいいのか？
葛藤（かっとう）するコウイチの横で、ため息が聞こえた。
「……仕方ないか」
フェリナに向き直り、
「あたしも手伝います」
あっさりと言ってのけた。
「……え？」
言葉の意味がわからないまま、コウイチとフェリナの二人はリゼを見つめる。リゼは肩をすくめて、いかにも気が進まないといった仕草をしてみせた。
「コウイチ一人じゃ、あの男相手に太刀打ちできないからね」
「え……？　それでは――」
「ご友人のことはもう少し伏せておきましょう」
「ありがとうございます！」
フェリナがぱっと顔を輝かせて、リゼの手を取った。表情一つ変えないまま、リゼが素っ気ない声を出す。
「ただし、条件があります」
「条件、ですか……？」
「コウイチの怪我が治るまでは、外出は止めること。自分たちから離れず、指示にも従うこと。守れますか？」
「ええ。それなら当たり前のことですから！」
不安げな顔をしたのは一瞬。思わず見とれるような笑顔でフェリナは頷いてみせた。
いつもより遅れてフェリナを館に送ってから、リゼと一緒に兵舎へと向かう。彼女の場合、女性ということもあって実家住まいなの

だが、その家は兵舎のすぐ近くにあるらしい。
「あの……今日のことは、あり――」
「気にしないでいいよ。父さんにもコウイチのことを頼まれたから」
お礼の言葉は素っ気なく遮られた。
……というか父さん？
「バーナルさんが？」
「父さんは事情は知っているんでしょ？」
「……ああ」
（そう、か）
脅かすようなことを言いつつも、気にかけてくれてはいたのか。
心の中でバーナルにそっと感謝。でなければ、今日もっとひどい目にあっていたかもしれないから。
「それより」
不意にリゼが立ち止まって、真剣な目を向けてきた。
「……なにか？」
「さっきの男のことだけど、殺気を向けられていたのに気づいてた？」
「殺気」
リゼに言われて、ああ、あれが……と思った。
元の世界の平穏な日常では、まず接することなどないものだ。
そう思うと、とんでもないところに来ちゃったなあ、などと少し落ち込んでみたり。
「まあ……一応は」
「……気づいてたんだ？」
少し意外そうな反応だった。鈍い奴とでも思われていたのかもしれない。
まあ気づいていたとしても、だからどうとまでは思わなかったし。以前ほど追いつめられた実感はなかったから、それで身がすくむ、なんてこともなかったわけだが。
……もっとはっきり、自分が殺されるようなイメージでも湧けば

話は違ったかもしれない。
「逃げようとは思わなかったの？」
「いや、フェリナ様もいたし」
カセドラじゃないし、さすがに置き去りにしてはいけない。
とか思ってたら、いつの間にか至近距離でリゼに見られていた。
「……なにか？」
（なんか……ついさっき似たようなことがあった気が……）
既視感を感じながらたじろぐと、リゼはさっと離れて唇を動かす。
「へぇ、少しは……」
呟きの後半は、小さすぎて聞き取れなかった。
「あの……リゼ、さん？」
「ああ、ごめん。なんでもないから」
そう言うと、さっと身を翻して歩き出した。
（……えーと……？）
……え？　少しは、なに？

◆

「どういうことだ！？」
部屋中にとどろく大声を耳にして、レグラスはわずかに顔をしかめた。
以前に仕事の内容を聞かされた時に入った、豪勢な調度品の連なる一室。部屋にいるのはレグラスと、雇い主の男と、その護衛の傭兵。
それまでは同じだが、ただしその部屋の主だけは以前とはまったく違う様子だった。
「大丈夫ですよ。あんたの名前が出るようなヘマはしてません」
「そんなものは当たり前だ！」
顔を真っ赤にして、男はよくまあここまでと思えるほどの怒声と罵声をがなりたてる。レグラスは伏せた顔に一応は反省したような

表情を張り付けて、それらの大声を聞き流していた。
「大口を叩きおって、まさかしくじるとは思わなんだわ！」
「そうは言いますがね」
それでもさすがに長々と大声を浴びせられて嫌気がさしてきたので、声の切れ間をぬって言い訳を口にする。
「ご依頼はほとんど果たしたようなもんですよ。護衛していた兵士ってのも、ほどほどに痛めつけときましたし」
「娘のほうには何も言わなかったのだろうが！」
レグラスが耳にした仕事の内容とは、ある少女の護衛を叩きのめし、とある警告をするというものだった。その際、少女に多少の害が及んでもかまわない、というおまけ付きだったが。
「今回はしくじりましたが、次はきっちりやらせてもらいますよ」
「次の機会など――」
男がさらに声を張り上げようとして、何かを思い出したように口を閉ざした。
「……いや、そうだな」
（ん？）
意外そうな顔をしてみせるレグラスに、男は声量を落とした。
「安くない金を払っておるのだ。元はとらせてもらわねば困る」
「なら、まだ契約は続行ってことで？」
「やむを得ないが、そういうことだ」
「……了解」
男が背中を見せて、無言で手を振る。出ていけ、ということらしい。
肩をすくめてレグラスは大人しく部屋を後にする。扉を閉める寸前、護衛の傭兵の口元に蔑（さげす）むような笑みが浮かんでいるのが目に入った。
「どうでしたか？　説教は」
部屋を出て数歩も行かないうちに、からかうような声をかけられる。

「耳が腐りそうだった」
「ま、しょうがないでしょ。あんたがしくじったのは確かなんですから。大人しく腐らせといてください」
歩きながらついてくる腹心の部下の嫌みに、
「うるせ」
とだけ返してから、ふと思いったようにポツリと言った。
「……近いうちに街を出た方がいいかもしれねェな」
「クビ、ってわけじゃなさそうですね」
「あのおっさん、あんなヘマしたってのにまだ俺らを雇うつもりだ」
「ありがたいじゃないですか」
「ありがたいわけがあるかよ。ありゃ自分の秘密を知ってる奴は、手元に置いとかなきゃ安心できないクチだな」
「へェ……じゃあ最後はコレですかい？」
部下が手刀で首を切る仕草をした。
「そう思っといたほうがいいだろな」
「やれやれ、ひでェ話だなあ」
「珍しいことじゃねェだろ」
汚れ仕事の果てに口封じ――どこにでも転がっている話だ。
「それならいつでも出られるように、あいつらに支度させときますわ」
「ああ、だがそうなる前に――」
途端に、レグラスの表情と声にある近寄りがたい凄みが宿った。
「借りは返すつもりだけどな」
部下が肩をすくめる。その表情が、さっきよりも硬いものに変わっていた。
「……気の毒に。あのボウズも怖ェのに目ェつけられたもんだ」
「あいつじゃねェよ」
後ろから石を投げてきた奴。はっきりとは見ていないが、女だったと思う。
この街で仕事をしていれば、また会えるかもしれない。本音を言

えばやる気の出ない仕事だが、個人的な恨みはまた別だ。
「やられっぱなしで終わるってのも癪だからな」
そう口にしたレグラスの双眸が、獲物を見定めた獣のような光を放っていた。

6．へたれとやさぐれ（3）

コウイチが傭兵らしき男に怪我を負わされ、フェリナから彼女の抱えている問題を聞かされたその翌日。コウイチは練兵場の片隅で、一人黙々と素振りをしていた。

骨折寸前の怪我をしていても、兵士としての訓練が休みになるわけでもない。それでも軽く体を動かす程度でかまわない、とも言われたのだが、コウイチは訓練用の剣を手に取っていた。

「左手は使えるんだろ？　なら片手での剣の扱い方を覚えるチャンスだな」

などとバーナルに言われたから、というだけではない。初めての実戦らしい実戦――剣は抜かなかったが――を経て、あらためて自分の弱さを突きつけられた気がしたからだ。

（……未熟）

昨日の男に勝てなかったのはまだいい。リゼが言うには、実力が違いすぎたらしいのだから。問題は、右手が使えなくなった時点で戦うのを諦めたことだ。左手も両足も満足に動くのに、それであがくという発想すら思いつかなかった。

左手で剣を握り、包帯の巻かれた右手はだらりと下げたまま。正面に構えた状態から、突き上げ、右から左に横薙ぎにして、左上から斬りおろす。勢いを止められず、切っ先が地面を叩いて腕に痺れが走った。

「っ……！」

ガラン、と剣が地面に倒れる。何度も教わった通りの型を繰り返して、握力がすっかりなくなっていた。

いつもなら両腕に分散している負荷を一手に引き受けた左腕は、すっかり熱をもってパンパンになっていた。

「……」

思わずため息をつく。まだ一連の動作を、二百回もできていない。

固くなった左腕を揉みほぐしていると、ざわめきが聞こえてきた。
気になって振り向くと、兵士たちの視線が一点に注がれている。
フェリナが、豊かな金髪をなびかせながら歩いていた。ここでは正体を隠す必要がないからか、今日はいかにも令嬢（れいじょう）というような白いドレスを身にまとっている。似合ってはいるが、兵舎に隣接する練兵場（れんぺいじょう）では場違いな格好だった。
（なんで、ここに……？）
不思議に思って見ていると、こっちに気づいたフェリナが驚いた顔で駆け寄ってきた。
「コウイチさん、こんにちは。……あの、もう大丈夫なのですか？」
「ええ、まあ」
不安そうな眼差しが怪我をした右手に注がれている。
「安静にしているようにと言われたのでは？」
「問題があるのは、右手だけなので」
「そう、ですか……」
納得してなさそうな声で言うフェリナに向かいつつも、コウイチの視線は、自分たちを驚いた様子で見ている周囲の兵士たちを気にしていた。
落ち着かなくなって、会話を急ぐように口を開く。
「ところでフェリナ様は、何か用事でも」
「え？　いえ、その……」
なぜか困ったような顔をされてしまった。
はあ、とため息。最近では姿を現すのも面倒なのか、カセドラの呆れた声がどこからか聞こえてきた。
「兄さんの様子を心配して見にきたに決まってるじゃないッスか」
（……ああ）
まあ、たしかに。ちょっと考えればわかることで。
とはいえ、今さらどうフォローすればいいかも思いつかず、気まずい沈黙の中でコウイチは視線を泳がせる。
「その、呼び方のことなんですが」

沈黙を破ったのはフェリナだった。
「は？」
「様、をつけて呼ぶのを、やめていただけませんか？　せっかくお知り合いになれたのに、それだとよそよそしい感じがして……」
思わぬ要望に、コウイチは目を丸くする。周囲からはどよめきが起こった。
「ですが」
立場的には雇い主の娘さんだし、他のみんなもそう呼んでいる。自分だけ変えるのは抵抗があった。
「ダメ、でしょうか……？」
上目つかいで見つめられ、うっと言葉に詰まる。
「ダメ、というわけでは」
考えてみれば、元の世界では誰かを様付けで呼んだことなどなかった。初めて口にする時も、違和感があったし。向こうがそう言ってくれるなら、断る理由もない。
「では。……フェリナ、さんで」
「さん、だなんて。呼び捨てでかまいませんよ？」
「……さすがに、それは」
「気にすることありません。殿方なのですから」
そういう問題でもなく。そもそも、この世界では割と一般的な男尊女卑の考え方は好きではない。
それに、様付けから呼び捨てだなんて、いくらなんでもスキップし過ぎじゃなかろうか？
コウイチの困惑する様子を見てか、フェリナは眉をよせて、
「申し訳ありません。困らせてしまったようですね」
そう謝ってきた。
「いえ、そんな……では、さん付けで」
「はいっ」
弾むような返事と、笑顔。何度も見ているはずなのに、より親しみがこめられているように思えて、コウイチは思わずたじろいだ。

（……え？）

なにこの表情？

聞き耳を立てている兵士たちから悲鳴のような声があがったが、それにも気づかないほど混乱する。

今は一緒にいる時間も長いが、それも一時的な話。立場もあるし、とりあえず線を引いた付き合いをしておこうと思うのだが、なぜか向こうはその線を軽々と越えてきてしまう。

「ひょっとして……兄さんに気があるんじゃないッスか？」

いやらしい響きのカセドラの発言に、コウイチは目を伏せた。

（……はは）

いや、そんな、まさか。

自分みたいな無気力人間がですよ？　同じクラスの女子に、好き嫌いどころか名前も覚えられていなかった空気君が？　あんなお嬢様的な美人に好かれるなんて？　そんなことあるわけないない。

……はあ。

否定するうちに色々と嫌な思い出がよみがえってきて、コウイチはズーンと肩を落とした。

「兄さんって……面倒くさい奴ッスね」

……ほっといてください。

その後帰るフェリナの姿は、なぜか上機嫌に見えた。

その姿が見えなくなると同時、コウイチは兵士たちに囲まれた。

「さ～てと……コウイチ？」

含みのある声で話しかけてきたのは、特に親しい若い兵士だった。

「あの……なに、か？」

「なにか、じゃないだろ！　いつの間にフェリナお嬢様と親しくなったんだよ！？」

「いや、それは……」

「俺たちの誰もが憧れながら、身分の違いに軽々しく言葉を交わすこともできなかったあのフェリナ様と……しかもフェリナ『さん』

だとっ？　それになんなんだ、あの笑顔は！？」
「いや……あの……」
よく見れば、自分を囲んでいるのは皆若い兵士ばかりで。
「いえ、その……誤解（ごかい）――」
「「「「「ハァ！？」」」」」
まるで魔女裁判のような、こっちの言い分など聞く気もない、というか即刻死刑と言わんばかりの糾弾（きゅうだん）の嵐。下手すればこのまま火あぶりにされてもおかしくない勢いである。事情が事情だけに、本当のことも言えない。
嫉妬（しっと）と羨望（せんぼう）に端を発した怒りがこれほど恐ろしいものだと、コウイチは初めて思い知らされた。
（知りたくなかったし……誤解だし……たぶん）
逃げようにも、周りは敵だらけ。すぐに回り込まれそうだった。
（そうだ……！）
思いついたのは、カセドラになんとか道を開けてもらうという手。今までも、ぎりぎりまで追い詰められた時にはカセドラが助けてくれていた。
救いを求めてカセドラの姿を探し――絶望した。
こっちを見ているカセドラの表情は、口元を引き結んだ真面目なものに見える。ただし、その目尻と口。その部分が、笑いをこらえるようにピクピクと震えていた。
（……はは）
まあ、うん。わかっていたとも。カセドラに期待した自分がバカだったってことくらい。
追いつめられ、虚（うつ）ろな笑みさえ浮かべ始めたコウイチに、救いの手がさしのべられたのはその時だった。
「コウイチ」
熱狂（ねっきょう）に冷水を浴びせるような涼やかな声。
訓練を終えたばかりなのか、汗に濡れた髪を拭きながら、リゼが姿を現した。

「リゼ……？　悪いが、今取り込み中――」
「ちょっとコウイチと話したいから、二人にさせてもらえるかな？」
「！！！！！！！」
その瞬間、周囲の空気が凍りついた。
（ちょっ……！）
このタイミングで、そんな誤解されるような！
「こ、コウイチと話したいことって、な、なんだ？」
「ごめん。ちょっとそれは言えない」
そこかしこで絶望の呻きがあがる。
嫉妬を通り越して、殺意すら感じられる荒んだ目になりながらも、兵士たちは解散した。
（おのれ、リゼまでも……）
（男臭い中での唯一の潤（うるお）いだったのに……）
（大人しそうなフリして、二股か？　二股なのか？）
そんな、誤解に満ちあふれた心の声が聞こえた気がしたが、気のせいだろう。気のせいだと信じたい。
「……はぁ」
どっと疲れた。こうなったら早く切り上げよう。後のことは……あまり考えない方向で。
「それで……話とは」
「これからのことなんだけど」
自分の怪我が治ってからの話だ。そう気づいて背筋を伸ばした。
「三人で固まって動くのは止めた方がいいと思うんだ」
「？　それは、どういう」
「三人でまとまって動くより、一人は離れた場所にいたほうがいいと思う。いざという時、助けを呼べるように」
（……なるほど）
二人が三人に増えても、確かにどうにもならないこともあるだろう。たとえば、あの男の仲間全員に囲まれるようなことになったら、抵抗するどころではなくなる。

「では、その割り振りは」
リゼと自分、どっちがフェリナにつくかという疑問には、
「それはコウイチにしてもらうつもり」
「……妥当（だとう）、かと」
あの傭兵（らしき男）の発言を聞く限り、あの時は自分だけが狙われていた。かといってフェリナも無関係というわけではなく、むしろ彼女と一緒にいたから、という感じだった気がする。
ともかく、自分ははっきりと顔を覚えられた。フェリナと一緒にいたことも知られているし、他人のフリをして後をつけるなどできそうにない。
それなら顔を知られていないリゼに後をついてきてもらったほうがいい。あの時は不意打ちだったし、たぶん顔までは見られていないはずだ。
ここは心細いが、一網打尽（いちもうだじん）にならないためにも、
「なら、僕がフェリナ……様、と一緒に行動すると」
なんとなく抵抗を感じて、以前通りの呼び方をする。
微妙な間を気にしたふうもなく、リゼはあっさりと頷いた。
「うん。よろしく」
ふと、リゼが何かを考えているように黙り込む。
「……なにか」
「そのフェリナ様のことだけど、コウイチはどういう人だと思ってる？」
（……どういう、人？）
親切で、礼儀正しい。深窓（しんそう）の令嬢っぽい見た目に反して行動的。あと意外に度胸もあって、友達思い。自分に対しても……ほんとどう思ってるんだろう？
いや、それはさておき。
思っているままの印象を述べると、リゼは納得いかない表情になった。
「コウイチよりずっと前から知ってるし、女同士だからかけっこう

話すこともあるけど……自分を偽っているとかじゃなくて、全部見せてないって感じがする」

意味がわからず首を傾げる。どんな人間にだって、隠したいことの一つや二つあるだろう。

「兄さんはそれどころじゃないッスけどね」

うっさい。

「なんで、そう思うように？」

リゼが途端に顔をしかめた。言葉を探すというより、はっきりとした根拠が思いつかないような反応だった。

それでもよほど引っかかるのか、リゼは黙って目を泳がせた。

「なんていうのかな……腰が据わりすぎてる気がするんだ」

（……まあ）

言いたいことはなんとなくわかる。自分だったら動揺して冷静さを失う事態であっても、フェリナは落ち着き払っていた。単純にすごい人だなとしか思っていなかったが。

「……考えすぎでは、ないかと」

自分からみれば、フェリナは裏のありそうな人物には見えそうにない。何か隠していることがあるかもしれないが、気にするほどでもないと思う。

「そうだね。ごめん、忘れて」

さすがに無理があると思ったのか、リゼはあっさりと話を打ち切った。

「リゼこそ」

ついでとばかりに、こっちからも質問してみる。

「なんで僕らを……手伝うことに？」

「納得がいかなかったから」

答えはあっさりと帰ってきた。

「あの傭兵……かなり強いって言ったよね。あの時は急だったから不意打ちをしたけど、真正面からも戦ったらどうなるのか、どこまで渡り合えるのか知りたいと思ったから」

「渡り合える、というか……リゼよりも強いんじゃ？」
たしか、自分でそう言っていた気がする。
「今は、多分ね。だからさっきまで、父さんに鍛えてもらってたの」
そう言うリゼの目に、自分との訓練では見せることのない熱のようなものが宿った気がした。
よく見れば、リゼのむき出しの腕に、打ち身のような痕があった。服もびっしょりと汗で濡れている。
コウイチは彼女の意外な一面を見た気がした。もっとクールな性格だと思ってたのだが、こと戦いのことに関しては譲れないものがあるのかもしれない。
「もちろん、フェリナ様の友人の事情も考えてだけどね。このことはセナード様に知らせたほうがいいって、今も思ってるし。……もし次に誰かが怪我をするようなことになったら、迷いなくそうするつもり」
反論する理由もなく頷く。
「とにかく、怪我が治ってから三人で行動するわけだけど、無理はしないように。今度は怪我じゃすまないかもしれないからね」

訓練の後、兵舎の脇にある井戸へと向かう。
運良く、今は誰かが使っているということもなく、コウイチは麻でできたポケットもついていないシンプルな服を脱いだ。元の世界から着てきた服がダメになってしまい、その後、支給品として渡されたものだ。
汲み上げた水で汗を流し、一息つく。
行水のたびに、風呂に入りたいと思う。一応兵舎の中に浴槽はあるのだが、水を運んで火をおこして……と、手間も面倒だし、後かたづけで結局は汗をかいてしまうので、今まで一回しか熱い湯に浸かったことがなかった。
さっぱりしてから、リゼの勧めで怪我の経過を見てもらいに診療所へと向かう。

その道中。行ったこともある食堂の前で、人だかりができていることに気づいた。

（……？）

一階が食堂で二階が宿屋という、この世界では一般的な形態の店だ。気になって中を覗くと、店内の床には料理が散乱していた。

「あんた、たしか兵士の……」

店主がコウイチに気づき、近づいてくる。

「なにか、あったんですか？」

「よくあることさ。ろくでもない連中が暴れただけだ。もう終わったけどな」

指さした先には、数人のいかにも悪そうな男たちが伸びていた。

「……誰が？」

「店にいたお客さんがやっつけてくれたんです！　すごかったですよ！」

興奮した様子で言ったのは、店員の一人だったと思う。

「その、人は？」

「ああ、もう行っちまったよ。名前も言わずにな」

（……なんと）

いいことをしておいて、名前も言わずに立ち去るとか……どれだけかっこいいんだ。

コウイチが感動していると、見知った同僚（どうりょう）の兵士が店に入ってきて、伸びた男たちを縛り上げていく。こうなったらできることは何もない。

邪魔にならないようにひっそりと退散（たいさん）し、診療所へと向かう。

その道のりで、ふと思いついたことがあった。

もしかして……名前を言わなかったのではなく、言えないような、後ろめたい事情があった、とか？

◆

「あー……だる」
「どうしたんですかい？　死んだような声出して」
「退屈なんだよ」
シーツも枕も薄汚れたベッドから起きあがり、レグラスは気だるそうな声を出した。
狭苦しく、窓もない部屋ははっきり言ってぼろい。
裏通りにあるこの宿屋は、すべてが古びている割には宿賃が高かった。一般客なら選択にも入れないような宿屋だ。
もちろん、料金が高いなりの理由がある。
客の素性は聞かないし、トラブルを持ち込まない限りうるさい口を挟んでくることもない。
（要するに、俺たちみたいなのにはぴったりってことだな）
こんなうらぶれた宿屋に泊まっている理由は、あまり人目につかないようにと雇い主に言われているからだ。さびれた裏通りなら人の往来も少ないし、少しくらい怪しくても目立つこともない。
どうせならもっといい宿にしてくれよと思うが、野宿に比べれば、壁と屋根があれば十分という気もした。
ただ、何もせずに雇い主に呼び出されるのを待つという退屈さだけは慣れそうになかった。
「それならあいつらと一緒に行けばよかったじゃないですか」
「あー……気分じゃねェ」
部下の傭兵たちは、酒場へ行くか、娼館（しょうかん）へ行くか、賭事に精を出すか。なんにしてもろくでもない毎日を送っている。
「……腐りそうだ」
のっそりと起き上がり、
「メシでも食ってくる」
そう言って部屋を出る。
愛想のかけらもない主人に一瞥（いちべつ）をくれると、裏通りを出てぶらつく。出るなと言われているが、そこまで聞く気は端（はな）からない。
「なんかなあ……」

街を歩きながら、どうにも慣れない違和感を感じていた。
一歩裏通りを出れば、そこには平和な光景が広がっていた。
子供が元気よく石畳の上を駆け回り、通りの両側に並んだ露店からは威勢のいい呼び込みの声がする。
噴水の近くでは行商人が地べたに広げた布の上の商品について客と値段の交渉をしており、そのすぐそばでは隠居老人がうつらうつらと船を漕いでいた。
少しあたりを見回しても、物乞いも獲物を探すひったくりの姿も見あたらない。
平和で、彼らにとっては当たり前の日常。
いちいち背後を警戒しなければいけないようなピリピリとした剣呑さなど気配もなく、思わずあくびをしてしまいそうなほどゆったりとした空気が漂っていた。
（いい街ってことなんだろうがなあ……）
最低限の緊張感も削ぎ落とされそうだ。
（ま、こういうのもたまにはいいか）
何より、メシが合う。
ふらふらと歩いているうちに、食欲をそそられる匂いにつられて、一軒の食堂に入った。
見た目は泊まっているところと同じくらいに古びているが、中は客で混雑していた。これだけ混んでいるなら外れはない。適当な椅子に座り、周囲を見渡す。うまそうな肉料理を見つけて、
「あれと同じモン頼む。量は多めにな」
店員にそう注文した。
期待して待ちながら、店を見渡す。途端に嫌なものが目に入った。
三人組の、荒くれ者らしき男たち。同業ではない。街の中だけで幅をきかすタイプのならず者だ。
顔をしかめていると、
「はい、お待たせ」
「おおっ」

皿にこんもりと盛られた肉料理が運ばれてきた。
肉のかたまりをそのまま素焼きしたもので、周りには数種の野菜が添えられている。
シンプルだが味付けに工夫があるのか、口に入れると思わずニヤケてしまいそうな味わいが口の中に広がった。

――ダン！

そんな幸せな時間を遮るような、大きな物音。その直後、男の怒鳴り声が聞こえてレグラスの眉がピクリと跳ね上がった。
「……あァ？」
見ると、さっき目にしたならず者が立ち上がってお互いを罵り合っていた。
すぐに店員が駆け寄り、外でやってくれと訴える。が、男の一人が顔も見ずに突き飛ばし、一気に店の雰囲気が悪くなった。
元凶である男たちは、関係ないとばかりに喧嘩を始めそうになっている。
――ブチ。
「っのヤロウ……！」
考えるよりも先に、体は動いていた。
ずかずかと男たちに近寄り、にらみ合う男の片方を殴りとばす。
「なっ……」
「せっかく人がいい気分でメシ食おうってんだ。邪魔してんじゃねェぞコラ」
言い終えるよりも早く、もう一人の男の股間を蹴りあげる。泡を吹いて悶絶する男に背を向けて、残った一人に向き直った。
その動きが不自然に止まる。
「っ……今だっ」
最初に殴りとばした男が足にしがみつき、動きを止めていた。
その隙に顔を殴られ、レグラスは口の中を切る。

「ほォ……」
口端から流れる鉄の味の液体。指で拭ったレグラスの目が据わったものへと変わっていた。
(殴られたからには――)
しがみついている男の頭へ肘を落とす。
(――ただじゃ済まさねェぞ)
白目をむいて気絶する男に目もくれず、自分を殴った男に向かい合う。
嫌な予感を感じてか、男が背を向けて逃げる素振りを見せた。
「……はっ」
(逃がすかよ)
その背に蹴りをくらわせると、男はバランスを崩して床に倒れた。
ばたばたともがく男に近より、髪をつかんで顔を持ち上げる。
「……よォ」
男の口から、悲鳴のような短い息がこぼれた。その顔がゆっくりと持ち上げられ、背筋がぎりぎりと反っていく。
「あ……っが……や、やめ――」
「いやだね」
男の懇願をあっさりとはねのけ、レグラスは腕にこめていた力の方向を、今度は逆向きへ変えた。男の頭部が、猛烈な勢いで床へと逆戻りする。自分に待ち受ける無惨な未来を想像して、男が目をむいた。
「――ちっ……」
衝突音の代わりに、レグラスの舌打ちの音が店内に響いた。
そのままいけば木材の床が割れるほどのほどの勢いで叩きつけられるはずだった男の顔が、床に触れる直前で止まっていた。
気絶でもしたのか、一度だけ痙攣した後、男が動きを止める。
(やりすぎたらメシが食えなくなるからな)
さてメシの続きを、と思って立ち上がり、店の客が遠巻きに見ていることに気づいた。店の外にも人垣ができている。驚いた顔をレ

グラスに向けていた。
「やべ……」
さすがにこれほどの騒ぎになれば、巡回兵も駆けつけてくる。顔を憶えられるのはさすがにまずかった。
「あ、あんた……」
呆然と見ていた店主に一言、
「また来る」
それだけ言って外に出る。少し遅れて歓声と称賛（しょうさん）の声が背中を追いかけてきたが、足を止めるようなことはしない。急ぎ足で路地へと入り、
「ああっ、クソッ！」
苛立たしげに足を踏み鳴らした。
「あのクソどもがいなけりゃよ、今頃……」
食い損ねた料理のことを思いだし、歯ぎしりする。今からどこか適当な店に入るにしても、もうそんな気分じゃなくなっていた。
レグラスは深々とため息をついて、
「……帰ってふて寝だ」
力のない足取りで体を動かし、ふと自分にかけられた歓声を思い出して頭を掻いた。
「柄（がら）にもないことをしちまったな……」
その呟きは、自分に向けられたものだというのに呆れたような響（ひびき）を伴（ともな）っていた。

7．へたれを取り巻くその他諸々（1）

「すまないね。急に呼び出して」
勧められてソファに座るなり、対面に座っていたセナードがそう切り出した。
「いえ……」
歯切れ悪く、首を振る。
やりとりは以前と変わらないが、コウイチだけが気まずさを感じて顔をうつむかせていた。
背中をひっきりなしに冷や汗が伝う。
セナードになにやら近況を聞かれるが、あまり頭には入ってこない。目の前におかれたお茶に伸びそうになった手をはっとして押さえる。動揺を表に出さない自信がなかった。
こうして呼び出されるのは三回目。そろそろ慣れてもいいのではと思いつつも、今回が一番緊張しているのは事実なわけで。
意識しなければ泳ぎそうになる視線をテーブルの一点に固定し、じっと押し黙る。
（迂闊……）
呼び出された理由については見当がついている。フェリナと一緒にいて襲われたあの日。結果的にフェリナは約束した時刻を破って帰宅した。その件についてのことだ。
セナードの立場を考えれば、コウイチが怪我をしたことも知っていてもおかしくはない。同日に、遅く帰ってきた娘。普通に考えれば関連づけるのが当たり前だった。
なら、こうして呼ばれるのも当然の流れなのだが。
（考えてもいなかった……）
それだけでも十分ダメだが、当然、うまい言い訳も考えていないわけで。
「右手はもう大丈夫なのかね？」

「ええ、その……はい」
腫れはすっかりひいて、動かすと少し違和感がある程度。今日からまたフェリナと、そしてリゼと聞き込みを再開する予定だった。
「そうか……それはよかった」
その声音は、言葉が上っ面だけのものでないことを教えていた。本当に心配してくれていたらしい。
（……気まずい）
良心が痛んで胸がチクチクする。一人だったらそこらの壁に頭を打ちつけているところだ。
「ところで、その怪我の理由を聞いてもいいかね？」
――きた。
「いえ……これは、あの転んで……」
「転んで？」
迷ったあげく口をついて出たのは、嘘の言い訳としては最悪の言葉だった。
「兄さん……」
呆れを通りこしてため息混じりのカセドラの声が聞こえてくる。言われなくてもわかっている自分のダメさ加減にもの悲しくなってくるが、一度吐いた言葉を引っ込めるわけにもいかず、
「フェリナ様も、それで遅れて……すいません」
二階の部屋の窓から飛び降りたい衝動をこらえて、なんとか言葉をつなぐ。
コウイチにしてみれば、思わず叫びだしたくなりそうな沈黙の後、
「なるほど……」
セナードは一つ頷き、
「確かにあの娘なら、知り合いが怪我をしたのを知って一人で帰ってくるような性格をしていないだろうな。むしろ、そんな薄情な真似をしていたら私が叱っているところだ」
（……え？）
はっと顔を上げると、セナードの笑いを含んで目で見返された。

「どうしたのかね？　不思議そうな顔をして。……当ててみせようか？　君は、わたしが君の話を嘘だと思わないことを意外に思っている、違うかね？」
「それ、は……」
その通りだが、ここで素直にハイそうですと言えるほど剛胆でもなく。ただうろたえるように視線をさまよわせるだけ。
「で、嘘なのかね？」
首をぶんぶんと、横に振る。
「ならこの話はこれで終わりだ。そうだろう？」
「はあ……」
何を考えているのかわからず、この程度しか言葉が出てこない。
「それに……」
一拍の間を置いて、
「よしんばこれが嘘だとしても、悪意からくる嘘ではない。私はそう思っているよ」
そう言い終えた時のセナードの顔は、すべてを許容するような大人の笑みを浮かべていた。
「どうやら、娘は君のことを信頼しているようなのでね。これからも娘をよろしく頼むよ」

「――では、今日からまたよろしくお願いします」
言いながら深々と頭を下げるフェリナ。長い髪は目深にかぶった帽子に隠されて、垂れることはない。
「あ、いえ。……こちらこそ」
その日、コウイチは三日ぶりに屋敷の裏口からほど近い場所でフェリナと待ち合わせをしていた。
予想外のことはあったが、予定通り、聞き込みを再開するためだ。
すでにフェリナにはリゼが別行動することを伝えてある。残念そうな顔をしたのも一瞬、フェリナは理由も聞かずにわかりました、と頷いて見せた。

信頼されているのか、それとも、わけを聞くまでもなく理解しているのか。たぶん、後者のような気がする。

二人並んで歩きだし、街でも酒場などの盛り場が密集（みっしゅう）している区画へたどり着く。

「今日は、この通りの店に行きます」

交通の要所にあるクレイファレルの町には、旅人や行商人用に酒場や宿屋が多い。フェリナが示した通りにも、そこだけで数軒の店が門扉（もんぴ）を開いていた。

事情をすべて聞かされた今、店の外で待っている必要もなく。店内には二人で入り、フェリナが聞き込みをする横で立つ。

そうして気づいたのが、フェリナの注目度の高さ。男女の比率が圧倒的に男側に偏（かたよ）っているせいもあるが、それ以上に、人目を引く品の良さがあるのだろう。自然と注目が集まる。

必然、一緒にいるコウイチにも無遠慮（ぶえんりょ）な視線が注がれる。視線の元のまなざしのほとんどが、どんな関係だと探るようなものになっていた。

（……これは……）

ただでさえ注目を集めるのに慣れてない身。その上向けられる視線のほとんどが友好的とはいいがたい。

注目を集めるという、人によっては快楽を感じるこの状況も、コウイチにとっては居心地が悪いだけでしかなく。

聞き込みのほうも、はかばかしくはなかった。時間帯からか店員や女給は話を聞けるほど暇そうではなく、客も酔っている者が多い。そうでない客もいるが、酔客しかいない場合はどうしようもなく、まだマシと思える相手を選んで声をかけている、らしいのだが。

フェリナと最初に会った時の酔っぱらいほどタチの悪い相手はいなくても、からまれる確率はやはり高い。

「へぇ、そいつはあんたの知り合いかい？」

「ええ、友人です」

「ふぅん……言われてみりゃ、そんな女を見た憶えがあるような…

…」

「それは、どこで」

思わず、フェリナより先に食いついていた。

その客は勢いに押されたようにのけぞり、目を白黒させる

「んー。そうだなあ」

顎をなでながら、フェリナの頭からつま先までじっくりと目をくれる。

「お嬢ちゃんも座れよ。一緒に飲んでくれたら教えてやるから」

なまじ美人なためか、こういう誘いも今までに何度かあったらしい。

特に驚くようなことなく、

「あら、申し訳ありません。私にはすでにお付き合いしている殿方がいるので、そうしたお誘いは断るようにしているんです」

「ぶっ」

思わず吹き出していた。

言いながらのフェリナのまなざしが自分に向けられていたから。

知らない人間が見れば、明らかに誤解を誘う行為だ。

気のせいか、フェリナの頬が赤くなっているように見えた。さらには、面食らった様子の男にかまわず、そっと寄り添うように体を近づけてくる。

（な……なにを……？）

混乱し、それをまともに表情に出すコウイチに気づかず、男がやってらんねぇやといった顔を横を向ける。そうしていたのも束の間、

「それじゃあ、しょうがねえなあ」

何かを思いついたように、男はニヤリと笑ってみせた。

「オイそこのボウズ。ちょっと付き合いな……って、聞いてんのか？」

「……え？」

動揺が収まらないまま、コウイチは自分を指さした。

「僕が、ですか」

「ああ、飲み比べでどうだ。俺に勝てたら、知ってること全部教えてやるよ」
「え」
（飲み……比べ？）
「やらなくてもいいけどよ。それだったら話を聞くのは諦めろや」
「……わかりました。やります」
考えるよりも先に、言葉が口をついて出た。
「コウイチさん？　無理はしなくても」
「いえ……大丈夫、です」
はっきりいって、自信はない。酒を初めて飲んだのもバーナルにつきあってからで、それほど強くはないらしい。限界まで飲んだこともなかった。
だが――
護衛（ごえい）として今日までフェリナにつきあっているが、役に立った憶えはない。少なくとも自分ではそう思っている。
襲われた時も為すすべもなくやられていた。リゼがいなければそのまま、無様な姿をさらすところだった。もしフェリナが狙われていたら、どうしようもなかったに違いない。
期待され、信頼されている以上、一つぐらいは役に立ったという実感がほしい。
にわかにざわめき始めた周囲をよそに、コウイチは席に着く。同時に目の前の杯になみなみと酒を注がれた。
「……では」
見慣れない色の酒。鼻につんとくるきつい臭い。飲んだことのない酒に、ためらいが生まれる。
（……いや）
どんな酒であろうと、胃に流し込めばすべて同じ。味など二の次。
「いきます」
言い終えるや否や、杯を手に取り、中身を一気に喉に流し込む。
喉が焼けるような感覚。店にいた客から歓声があがった。

――コウイチにとって誤算だったのは、杯の中身が麦酒や葡萄酒（ワイン）ではなく。アルコール度数がそれらよりもはるかに高い蒸留酒だったことだ。もちろん、一気に飲むような酒ではない。

初めに感じたのは、頭の後ろの柔らかい感触。

「……う」

うっすらと目を開けば、ぼやけた視界を占めるのは見覚えのある顔だった。

「あら」

「目、覚めましたか？」

「ええ、そうみたいです」

（……暖かく……冷たい？）

はっきり目覚めていない意識で思ったのは、相反する二つの感想。後頭部は暖かい。にも関わらず、首からは下は冷たく、硬質だった。

水の音に気づいて視線を巡らせる。おぼえのある光景が広がっていた。

大通りの交差する広場。その中心にある、噴水。

（えーと……）

……うん、そこまでは理解した。だが、この頭の後ろの暖かいような柔らかいような感触はなんだろう？

「コウイチ、いつまでフェリナ様の膝に頭を乗せてるの？」

リゼの冷めた、氷を思わせる声。反射のように体が急な覚醒を促す。

（膝……？　ひ……ざ――）

「っ！　す、すいません……！」

慌てて跳ね起きた。すぐにふらつき、噴水の水面に落ちそうになる。あ――と思った直後には腕を捕まれ、ずぶ濡れになるのはなんとかまぬがれた。

「あ、ありが――」

振り返れば、そこにあるのは見る者を凍らせるような凍てついた双眸。

リゼの極寒な目にさらされ、背筋を寒気が突き抜けた。それほど寒くもないのに、ぷつぷつと鳥肌が浮き上がる。

護衛する相手の前で酔いつぶれたばかりか、そのうえ介抱までされる。

（……ひどすぎる）

というかありえない。弁解の余地もない。

「いえ、あの……リゼ、さん？」

「何？」

あくまでも声は淡々としている。ただし、表情は感情が抜け落ちたかのような無。それがまた恐怖を誘う。

「いえ……なんでも」

そう、と一息。リゼが背を向けた。

「じゃ、あたしはまた離れるから」

（ちょ、まっ……！）

こんな状況で、二人きりにされるとか。なんの罰ゲーム？　いや、今のリゼと一緒にいるのとどっちがマシなんだろうか、とあまり意味のないことを考えられる程度には頭も働いていたわけで。

微笑んでいるフェリナに、ギギギと錆びたロボットのような動作で振り返り。

「えー……と、フェリナ様」

「呼び方」

途端にフェリナの目から笑みが消えた。

「間違ってますよ？」

「あ、はい……フェリナ……さん」

「はい、なんですか？」

「あれから、いったい」

困ったように、フェリナが笑う。

話を聞くと、相手が先に音をあげたらしい。酔いつぶれたという

意味ではなく、
「俺の負けでいいからこいつをつれて帰ってくれ。酒がまずくなってたまらねえ」
そう言ってリタイアしたという。
「それは、な――」
なぜ、と言いかけ、途中で言葉を止める。なんとなく知ったら死にたくなるような気がする。
そして耳元では、自称精霊で本性は小悪魔な謎生物の囁き。
「後でオイラが教えてあげるッスよ」
（……本気でやめてください）
心の中で懇願し、ごくりと喉を慣らして、話題を変える。
「と、いうことは。話を……？」
「それが――」
話は聞けたが、結論から言えば男の勘違いだったらしい。話に出てきた女性はフェリナの友人ではなく、他の客の知り合いで今も普通に暮らしているという。
がっかりと肩を落とした。
酔いつぶれた意味が、まるでない。
「……はぁ」
落胆を隠しきれずにため息を吐いて空を見上げる。
幸い、酔いつぶれていた時間はそう長くなかったらしい。夕日はまだ沈みきっておらず、今からなら門限に間に合いそうだった。
ふらつく足で立ち上がると、近寄ってきたフェリナにそっと肩を支えられた。
その瞬間、酒場で寄り添われたことを思いだし、あわてて離れる。
「あ……」
小さく声を漏らし、フェリナが寂しそうな顔をした。
「すいません、コウイチさん。なれなれしくして……。あの場合は、ああするのが一番だと思ったものですから」
ああ、やっぱり演技ですか、そうですか。……そうですよね、は

あ。
「いえ、あの……別に、気にしてはいないので」
「期待してた、の間違いじゃないッスか～？」
これは無視。
まあ、演技だとしても。少なくとも、嫌っている相手にああした行動には出ないだろうと思う。思うのだが。というかぜひそうであってほしい。
……本心は、どうなんだろう？　それに膝枕って、彼女的にはかなり大胆な行為だと思うのだが。
つい、さっきの酔っぱらいのように全身をまじまじと見つめてしまう。
「あの……なんでしょうか？」
不快さはなく、照れたような声音に我に返った。
「あ、いえ……少し、考え事を」
「考え事ですか？　もしかして……先日、お父様に呼び出されたことについて、ですか？」
驚いて見ると、硬い声音と同様、フェリナは真剣な表情をしていた。
「私が帰るのが遅れたことについて、ですよね？」
ためらいはあったが、嘘をつく理由もなく、おずおずと頷いた。
「ええ。ですが、本当のことは話さずに、なんとか」
「父にはなんと説明したのですか？」
「自分が勝手に転んで怪我をして、心配してくれたフェリナさんが遅れてしまった、と」
「それではっ……責められたのではないですか？」
「いえ。これからも、娘をよろしくたのむと」
「そうですか……ありがとうございます」
ほっとした様子で頭を下げられ、コウイチは複雑な顔をした。
嘘をついたわけでないが、フェリナに話していないこともあったから。

セナードの部屋に呼び出され、もっと問いつめられるかと思った話が拍子抜けするぐらいにあっさりと終わって息をついた直後、
「ところで、一つ聞きたいのだが」
その問いかけは、タイミング的にも、内容的にも不意打ちに近いものだった。
「娘のことを、どう思っているかね？」
「……は？」
え……？　なにこの質問？
相手が相手なだけあって、意味深にもとれる質問だった。一人の男として、という意味だとしたら、なんとも答えようがない。
硬直しているコウイチを見て気づいたのか、
「ああ、君が思っているような意味の質問ではないよ」
自分の問いかけのまぎらわしさを笑うようにセナードは苦笑した。
「そうだな……。年頃の娘としてではなく、人間としてどう思うか、という意味なのだが、わかるかね？」
「ああ、はい」
それなら普通に答えられる。
「尊敬できる、人かと」
「そうか」
おべっかを言ったつもりではない。セナードもうれしそうに顔をほころばせた。
「あの娘は時々、親の理解を超えた賢さを示す時があるのでね。それが他人の目には、不気味に映るのではないかと不安に思ったのだよ」
「……」
リゼとの話を思い出した。彼女も不気味とまではいかないが、引っかかるようなものを覚えていたのは事実だ。
「将来に備えて、何度か領主としての仕事をあの娘に手伝ってもらったことがあるのでね。立場上仕方のないことだが、それが原因で

同じ年頃の若者たちと考え方がずれてしまっては不憫ではないかと常々思っていたところだ」

「それは。まあ」

同意しながら納得していた。彼女の妙に落ち着いた性格は、そこから来ていたのか……。

ふと、疑問が浮かんだ。セナードやフェリナ以外にあともう一人、必ずいるはずの人物に会っていない。

「ところで。奥さまは」

「ああ……」

セナードは不意にさびしげな表情を浮かべ、

「死んだよ。かなり前の話だ」

「っ……それは」

「気にしなくていい。なにぶん昔のことだ。あの娘がどう思っているかはわからないが」

言葉を挟む隙もない早口でセナードが言葉を継ぐ。

「ともあれ、まだ年若い娘に、などと言われることもあるが、あの娘は賢い。領地や領民への愛情もある。あの娘の示した考えに誤りはあっても、そこに私欲を感じたことはなかった。将来はきっと立派にこの地を治めてくれるだろう。もちろん、君たちのような支えてくれる者がいてこそ、の話だが」

いえ、そんな……と首を左右。セナードのフェリナへの過剰とも思える信頼は、そうした経緯からきているのだろうか。

漠然とそう考えていると、セナードが身を乗り出してきた。

「だから、あの娘が私に隠れて何かをやっているとしても、それが結果的に悪影響をもたらすものではない、と信じているよ」

「っ……」

（この人は……）

フェリナが、何をしているのか気づいていないだろうか。

もしかすると、知っていてあえて黙認しているのかもしれない。

「今の話はフェリナには内緒にしておいてほしい。さすがに照れく

さいのでね」
　口元をほころばせ、セナードは照れたように笑ってみせる。穏やかな大人のような仕草から感じる印象は、今日話す以前とはまったく違って感じた気がした。

7．へたれを取り巻くその他諸々（2）

剣がぶつかり合い、顔をしかめたくなるような甲高い音が響きわたる。

コウイチの毎日の日課となっている、リゼとの実戦形式の試合。まともに刃を合わせれるのは最初の一度だけで、その後は速さと鋭さに勝るリゼに押されて終わる――それがいつものパターンだった。

「っ……く……！」

例によって追い込まれ、じりじりと後ずさる。すでに剣を振る暇もなく、できるのは構えた剣でリゼの斬撃を受け止めることだけ。リゼも力尽くで押し込むような真似はせず、角度と方向を変えた連撃で押し込んでくる。

やがて勢いに負けたのか、コウイチの剣が大きく弾かれた。両手にしっかり握っていた柄を持つのは左手のみ。がら空きになった胴体に、横薙ぎの一閃を繰り出そうとリゼが構え――その眉がぴくりと跳ね上がった。

「――ふっ！」

鋭い呼気一つ。

白刃はコウイチが考えていた通りの軌道を描いて、狙い通りの場所へ振り下ろされる。

剣は左手だけで握ったまま。試合では初めて見せる片手斬りだった。

猛攻に耐えきれず、姿勢を崩したと見せかけての不意打ち。数ヶ月前とは別人のように鍛えられた肉体は、頭で描いた動きを忠実に再現してくれた。

いける、と短い時間の中で、初めて手応えを感じる。

（……）

その直後、ためらいが脳裏をよぎった。狙ったのはリゼの右手。

刃が潰されているとはいえ、剣が当たれば骨が折れてもおかしくない。寸止めなどという器用な真似はできないし――
そう思った瞬間、切っ先の勢いが鈍った。

キィ……ン――

手の中の感触が、消えてなくなっていた。眼前には、剣を弾き飛ばした体勢のリゼ。
「……は？」
呆然していられたのもわずかな間。
「え……あぶっ！」
頭に衝撃に感じて、コウイチはその場に崩れ落ちた。

「悪い手じゃなかったよ」
剣を下ろしながらリゼが言う。淡々とした物言いだが、あまりお世辞を言うタイプでにも見えないので、たぶん本当のことなのだと思う。思うのだが。
「……なにが、いけなかったのだろうか」
一瞬だけでも勝てると確信しただけに、ショックは大きい。
「不意をつくみたいに両手から片手に切り替えたアイデアは悪くなかったと思う。けど、ちょっとあっけなかったから」
「あっけない、とは」
「昨日まではもっと粘れてたから。何か仕掛けてくるだろうな、と思ったんだ」
ようするに、タイミングが悪かったということか。それで警戒された、と。
「あと、片手だとどうしても握りが弱くなるから。実戦で使うんだったらもっと鍛えるか、今みたいに不意打ちの時だけにしておいたほうがいいよ」
たしかに、あっさり弾かれた。弾かれた、ということにもすぐに

気づかなかったほどだ。
「あと……」
「まだ、何か」
「最後の瞬間、勢いがなくなったけど？」
う。
「それは……」
言葉に詰まる。まさか負けた身でリゼの体を心配しました、なんて言えるはずもなく。
「まさか、手を抜いた。なんてこと、ないよね？」
区切るような口調、声音の中に、かすかな怒りの片鱗があった。
そりゃあ格下の相手にそんなことされたら怒るだろうなー、と頭の中の達観した自分が頷く。
「いえ、あの……その」
威圧するような眼差しを注がれて、こめかみを冷や汗がだらだらと流れる。
なにも言えずに硬直していると、リゼが意識を切り替えるようにふっと息を吐いた。
「まあいいけど」
その瞬間から威圧感がなくなった。そうして気が緩んだ直後、
「ところで……まだ余裕ありそうだね？」
「は？」
「じゃ、構えて」
などと言ったにも関わらず、構える前から斬りかかってくる。慌てて剣で受け止め、大きく飛び退いた。
「ちょ……な、なに、を……？」
「大丈夫そうだから、もう少しだけ付き合ってあげようと思っただけ。気にしないでいいよ」
「いや……気にしない、とかじゃなく――」
「話す余裕はあげないよ」
それからしばらくの間、練兵場の片隅では剣同士の弾き合う音と、

コウイチの悲鳴が途絶えることはなかった。

「つぅ……」

気絶するように倒れ込んだ体をようやく体を起こすと、全身に痛みが走った。

ここまでボロボロにされたのは久しぶりだった。我慢強くなっていなければ、今も起き上がれないでいたに違いない。

それでいて体が動かせなくなるほどの重い怪我はない。さじ加減を知っている、ということなのだろうが、これならいっそ数日間寝込むぐらいに……などと安易な考えが浮かんだが、すぐに首を振って追い払う。楽なほう楽なほうへ流される自分は、あまり好きじゃなかった。

「……さむ」

全身が汗と土に汚れていた。汗まみれになった服のせいで、すっかり体温が奪われている。

（……早く洗い流して、横になりたい）

よろよろと、井戸へ向かう。

ちょうど時間が重なったせいか、井戸の周りには人垣ができ、待ちの兵士たちが列を作っていた。しばらく待たなければ、水浴びもできなさそうである。

（そういえば……）

ふと思い出す。

ここ以外にも、もう一つ井戸があった。少し離れているが、少なくともここで待つよりもそこに行って水浴びしたほうが早そうだった。

兵舎の裏側へ回り込む。通りの反対側にあたり、街の中にもかかわらず滅多に人は来ない。井戸を囲むように木が生えており、遠目からではその存在に気づきにくい。なんでこんなところに井戸があるんだろうと思っていたが、今はもう一つ井戸があるというだけでありがたかった。

そして――

「あ」

「……コウイチ？」

そこにいたのは、水に濡れた肌を露(あら)わにしたリゼだった。

水滴を滴らせる髪を張りつかせた頬(ほお)。きょとんとした表情。そして、その下には細く、引き締まった肢体。この体のどこからあれだけの力が出せるのかという疑問が浮かんだが、それはそれとして。

「な……なっ……」

まともに声も出せず、コウイチはその場に立ち尽くした。

こういう場面で男が硬直する理由がわかった気がする。あまりの衝撃的な出来事に、頭の中がつい現実逃避めいた思考で埋まってしまうのだ……なんて、いやいやいや、呑気(のんき)に納得している場合じゃなくて！

慌てて背中を向ける。

「す……すいま、せん」

なぜか敬語。

「決して、その、わざとでは……」

「知ってる」

応答はあっさりしたものだった。

「コウイチはそんなことをする人じゃないし。そんなに焦らなくていいよ。あたしも気にしてないから」

さばさばした物言いと同時に、服を着る音。このまま立ち去ろうかどうか悩んでいる間にも着終わったらしい。もういいよ、とリゼが声をかけてきた。恐る恐る振り返る。

「ここの話、聞いてない？」

「話、とは」

「この井戸、基本的に水浴びで使うの禁止なんだ。洗濯や料理で使うだけ。あたしは女だから、脇の井戸で水浴びさせるわけにもいかないだろうって許されてるけど」

「初めて、聞いた……」

「そうだと思った」
そして何かを思い出すように、リゼはついと視線をそらした。
「そういえば、前にも覗かれたことがあったけど」
その声はつまらなそうで、何が楽しいのかと言いたげだった。
「その時はわざとだったから。ちょっと痛い目にあってもらったけどね」
思わず、ごくりと唾を飲み込む。
「その、痛い目とは」
「それから一ヶ月間、訓練の相手になってもらったよ――本気で」
「……」
なんだ。それなら自分がしているのと大して……。
――あれ？
なんか、聞き捨てならない言葉を聞いた気がする。
「本気で、とは」
意味がわからないと言いたげに、リゼが小首を傾げてみせる。
「そのままの意味だけど？」
「ええ、と……僕との、試合は」
それで質問の意味がわかったらしく、ああ、と頷いた後、
「さすがに本気でやったら、見習いから卒業できないから」
こともなげに、リゼはさらりとそう口にした。
――ようするに。
自分との試合は、ぜんぜん本気なんかじゃなかったということで。
「……はあ」
脱力すると同時に、その覗いた誰とも知れないその相手に心の中で合掌した。
「つっ……」
不意にリゼが痛そうに顔をしかめる。
眉を寄せたまま腕をさすっている。その部分に真新しい痣ができていた。前に自分がやられた右手ほどではないが、かなり痛そうだった。

「それは……」
「父さんとの訓練で、ちょっとね」
そういえばリゼは、前に襲いかかってきた傭兵と正面から戦うことを望んでいた。あれ以来、バーナルとリゼが練兵場で向かい合う姿を見ることが多くなっている。
少しでも鍛えておこうということなのだろうが、リゼの痣を見る眼差しには厳しさのようなものがこめられている気がした。
「……なに？」
気づけば、じっと見ていたらしい。リゼが不思議そうな顔をしていた。
「なんとなく……不満そう、なので」
「不満？」
「あ、いや、不満というか……落ち着かなそう？」
あやふやな言い方だったが、言いたいことは伝わったらしい。リゼは一つ頷き、
「不満はあるよ。自分の実力不足を思い知らされたから。それに、相手の力がはっきりわかってるわけじゃないしね。太刀筋は見たけど、本気じゃなかったろうし」
黙って頷く。
そもそも実力差がありすぎたのだ。あの男にしてみれば、自分は本気を出すまでもない相手なのだろう、と自虐でもなく素直に思う。
「あの男と。バーナルさんとでは、どっちが強いと思う？」
「父さんに勝てそうな人なんて、ほとんどいないよ」
当たり前のことを言うようにリゼが言い切った。
そりゃまあ。武器持ち四人に素手で囲まれた状態からどうにかできるような人だ。それがどれだけ常識はずれなことか、少し鍛えた今ならよくわかる。普段はいろいろとイジられているが。
まあどちらにしても、自分などよりはるかに高みにいるわけで――
（……？）
そういえば。あの人の奥さんってどんな人なんだろうか。今まで

一度も会ったことがない。
いい機会だと思って聞いてみると、答えはあっさり返ってきた。
「普通の人かな。あたしたちみたいに戦えるわけでもないし。ある意味、家では一番強いんだけど」
意味不明なリゼの言葉に首を傾げ、
「尻に敷いてるってこと」
（ああ……）
ともかく、剣が使えるというわけではないらしい。
「意外？」
「正直に言えば、まあ」
娘のリゼからしてこれだけ強いのだから、母親のほうも相当な腕前だと思っていた。とはいえ勝手な思いこみでしかなかったわけなのだが。
「あたしが父さんと同じ仕事についているのを、あまりよく思ってないみたい。それが普通かもしれないけど」
なんでもないようにリゼは言ったが、なんとなく聞いてはいけないことを聞いた気がして、コウイチは言葉につまった。
そうしてふと思いついた疑問を口にする。
「そういえば――」
フェリナの友人の家族はどうしているのだろうか。普通なら最初に気づく相手だし、それなりの対応をするだろうに、フェリナの話ではそのことに少しも触れなかった。
「ああ。それならこの街にはいないよ」
「……いない？」
「この街の出身じゃないって。彼女一人が、この街の教会を任せるために派遣されたらしいよ」
なるほど……、家族が他の街にいるとなると行方不明の原因が家族がらみということはなさそうだった。
「同僚、とかは」
「それもいなかった。けどやっぱり人手が足りないから、教会の管

理は、信者の人たちも協力してやってたって。……ああ、今までの話はその信者の人たちから聞いたんだけど」

その人たちも、彼女がいなくなって途方にくれているらしい。フェリナに聞いたとおり、直前まで誰かを捜していたようだった。ずいぶん思い詰めた様子だった、とも口にしたそうだ。となると、行方不明はその『誰か』が関係していると考えるべきか。

「それと気になることを聞いたんだけど――」

声をひそめ、リゼは真剣な表情で言った。

「素性のわからない人間が、彼女を捜してるらしいよ」

「っ！」

その言葉にまず浮かんだのは、数日前にいきなり襲いかかってきたあの男とその仲間だ。

表情から想像していることを察したらしく、リゼは頭を振った

「あそこまで物騒な連中じゃなかったって」

思わずこわばった体から力が抜けるが、また気になることが増えてしまった。

（自分たち以外にも……？）

いったい、誰が。どんな理由で。

首を傾げながら兵舎へ向かう途中、見知った相手がこっちを見ていることに気づいた。

「よう」

「どうも……」

片手を挙げ、気軽そうに声をかけてくるバナール。ここ数日はフェリナの一件があって、まともに話していなかった。

「何か……？」

「何ってもんでもないんだがな」

ニヤニヤと、意地悪そうな笑みを浮かべるその様子に嫌な予感がした。

「で、どうだった？　リゼの裸は」

「っ……！」
思わず吹き出しそうになったが、それはなんとかこらえる。
（というか……ついさっきのことなのに、なんで――）
疑問が浮かんだが、それは脇に置いてとりあえず、
「すいま……せん、でした」
謝っておく。後半は恥ずかしさのあまり、ほとんど聞き取れないほど小さな声になっていた。
殴られることも覚悟していたが、反応はあっさりしたものだった。
「わざとじゃないんだし気にすんな。アイツも気にしちゃいなかっただろ？」
「それは……そうですが」
「親としてはちったぁ恥じらい、ってもんを覚えてほしいんだがな」
ぼそり、と。どこか物足りなそうに呟いたバーナルの声は、小さすぎて聞き取れなかった。
「……今、なんと」
「ああいい、気にすんな。ってかおまえは気にし過ぎなんだよ。もうちょっと大雑把になってみろ」
「……はあ」
と、言われても。これぱっかりは性分なので、すぐにどうこうできるものでない。
とりあえず気にしていないということをこれ以上話すのもアレなので、話題を変えてみる。
「相談したいことが、あるのですが」
「ああ、フェリナお嬢さんのことか？　それに関しちゃおまえに任せる」
「ま……任せる、ですか……？」
なんとなく突き放された気がして、軽くショックを受ける。
「話はリゼから聞いてる。おまえの思うようにやってみるんだな」
「いえ、その、わからないことが多すぎて」
「今やってることで手一杯ってか？」

頷くと、ククと短い笑い声が返ってきた
「どんなことになってるかは大体リゼから聞いてる。で、だ。おまえはわからないこと全部を知る必要はあるのか？」
「……いえ」
「だろ？　なら全部を抱え込む必要はねェさ。そもそも無茶な話なんだ。それでも、どうしても気になるってんなら――」
コウイチに背を向け、バーナルは片手をひらひらと振りながら言った。
「よく観察するんだな。今回の件に関係してる奴、全員を。それからじっくり考えてみろよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9044r/

へたれ長じて○○となる

2011年12月27日00時46分発行